は、實にわが全身に滿ち渡る骨の痛みの聲であつた。さうして其痛みが、宵に、酒を被つた勢で、多數を相手に劇しい喧嘩を挑んだ末、散々に打ち据ゑられて、手も足も利かなくなつた時の如くに吾を鈍く叩きこなしてゐた。砧に擣たれた布は、斯うもあらうかと迄考へた。夫程正體なく極め付けられ了つた狀態を適當に形容するには、ぶちのめすと云ふ下等社會で用ひる言葉が、たゞ一つある許である。少しでも身體を動かさうとすると、關節がみし〳〵と鳴つた。

昨日迄狹い布團に劃された余の天地は、急に又狹くなつた。其布團のうちの一部分より外に出る能力を失つた今の余には、昨日迄狹く感ぜられた布團が更に大きく見えた。余の世界と接觸する點は、こゝに至つてたゞ肩と脊中と細長く伸べた足の裏側に過ぎなくなつた。――頭は無論枕に着いてゐた。

是程に切り詰められた世界に住む事すら、昨夕は許されさうに見えなかつたのにと、傍のものは心の中で余の爲に觀じて呉れたらう。何事も辨へぬ余にさへ夫が憐れであつた。たゞ身の布團に觸れる所のみがわが世界である丈に、さうして其觸れる所が少しも變らないために、我と世界との關係は、非常に單純であつた。全くスタチツク（靜）であつた。從つて安全であつた。綿を

敷いた棺の中に長く寐て、われ棺を出でず、人棺を覆はざる亡者の氣分は――もし亡者に氣分が有り得るならば、――此時の余のそれと餘り懸け隔つては居なかつたらう。

しばらくすると、頭が麻痺れ始めた。腰の骨が骨丈になつて板の上に載せられてゐる樣な氣がした。足が重くなつた。かくして社會的の危險から安全に保證された余一人の狹い天地にも亦相應の苦しみが出來た。さうして其苦痛を逃れるべく余は一寸の外にさへ出る能力を持たなかつた。枕元に何んな人が何うして坐つてゐるか、丸で氣が付かなかつた。余を看護する爲に、余の視線の屆かぬ傍らを占めた人々の姿は、余に取つて神のそれと一般であつた。

余はこの安らかながら痛み多き小世界にじつと仰向に寐た儘、身の及ばざる所に時々眼を走らした。さうして天井から釣つた長い氷嚢の糸を屢見詰めた。其糸は冷たい袋と共に、胃の上でびくり〳〵と鋭どい脈を打つてゐた。

朝寒や生きたる骨を動かさず

十九

余は此の心持を何う形容すべきかに迷ふ。

力を商ひにする相撲が、四つに組んで、かつきり合つた時、土俵の眞中に立つ彼等の姿は、存外靜かに落ち付いてゐる。けれども其腹は一分と經たないうちに、恐るべき波を上下に描かなければ已まない。さうして熱さうな汗の球が幾條となく脊中を流れ出す。

最も安全に見える彼等の姿勢は、此波と此汗の辛うじて齎らす努力の結果である。靜かなのは相剋する血と骨の、僅に平均を得た象徴である。之を互殺の和といふ。二三十秒の現狀を維持するに、彼等が何れほどの氣魄を消耗せねばならぬかを思ふとき、看る人は始めて殘酷の感を起すだらう。

自活の計に追はれる動物として、生を營む一點から見た人間は、正に此相撲の如く苦しいものである。吾等は平和なる家庭の主人として、少くとも衣食の滿足を、吾等と吾等の妻子とに與へんがために、此相撲に等しい程の緊張に甘んじて、日々自己と世間との間に、互殺の平和を見出さうと力めつゝある。戸外に出て笑ふわが顏を鏡に映すならば、さうして其笑ひの中に殺伐の氣に充ちた我を見出すならば、更に此笑ひに伴ふ恐ろしき腹の波と、背の汗を想像するならば、

最後にわが必死の努力の、同向院のそれの樣に、一分足らずで引分を期する望みもなく、命のあらん限は一生續かなければならないといふ苦しい事實に想ひ至るならば、我等は神經衰弱に陷るべき極度に、わが精力を消耗するために、日に生き月に生きつゝあると迄言ひたくなる。

かく單に自活自營の立場に立つて見渡した世の中は悉く敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社會は不正で人情のある敵である。もし彼對我の觀を極端に引延ばすならば、朋友もある意味に於て敵であるし、妻子もある意味に於て敵である。さう思ふ自分さへ日に何度となく自分の敵になりつゝある。疲れても已め得ぬ戰ひを持續しながら、茫然として獨り其間に老ゆるものは、見慘と評するより外に評しやうがない。

古臭い愚癡を繰返すなといふ聲が頻りに聞えた。今でも聞える。それを聞き捨てにして、古臭い愚癡を繰返すのは、しみ〴〵さう感じたから許りではない、しみ〴〵さう感じた心持を、急に病氣が來て顚覆したからである。

血を吐いた余は土俵の上に仆れた相撲と同じ事であつた。自活のために戰ふ勇氣は無論、戰はねば死ぬといふ意識さへ持たなかつた。余はたゞ仰向けに寢て、緩な呼吸を敢てしながら、怖い

世間を遠くに見た。病氣が床の周圍を屏風の樣に取り卷いて、寒い心を暖かにした。

今迄は手を打たなければ、わが下女さへ顏を出さなかつた。人に賴まなければ用は辨じなかつた。いくら仕ようと焦慮つても、調はない事が多かつた。それが病氣になると、がらりと變つた。余は寢てゐた。默つて寢てゐた丈である。すると醫者が來た。社員が來た。妻が來た。仕舞には看護婦が二人來た。さうして悉く余の意志を働かさないうちに、ひとりでに來た。

「安心して療養せよ」と云ふ電報が滿洲から、血を吐いた翌日に來た。思ひがけない知己や朋友が代る〳〵枕元に來た。あるものは鹿兒島から來た。あるものは山形から來た。又あるものは眼の前に逼る結婚を延期して來た。余は是等の人に、どうして來たと聞いた。彼等は皆新聞で余の病氣を知つて來たと云つた。仰向に寢た余は、天井を見詰めながら、世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住み惡いとのみ觀じた世界に忽ち暖かな風が吹いた。

四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、左したる過去を持たぬ男に、忙しい世が、是程の手間と時間と親切を掛てくれようとは夢にも待設けなかつた余は、病に生き還ると共に、心に生き還つた。余は病に謝した。又余のために是程の手間と時間と親切とを惜まざる人々に謝し

た。さうして願はくは善良な人間になりたいと考へた。さうして此幸福な考へをわれに打壞す者を、永久の敵とすべく心に誓つた。

馬上青年老。鏡中白髮新。幸生天子國。願作太平民。

二十

ツルゲニエフ以上の藝術家として、有力なる方面の尊敬を新たにしつゝあるドストイエフスキーには、人の知る如く、小供の時分から癲癇の發作があつた。われ等日本人は癲癇と聞くと、たゞ白い泡を連想するに過ぎないが、西洋では古くこれを神聖なる疾と稱へてゐた。此神聖なる疾に冒かされる時、或は其少し前に、ドストイエフスキーは普通の人が大音樂を聞いて始めて到り得るやうな一種微妙の快感に支配されたさうである。それは自己と外界との圓滿に調和した境地で、丁度天體の端から、無限の空間に足を滑らして落ちるやうな心持だとか聞いた。

「神聖なる疾」に罹つた事のない余は、不幸にして此年になるまで、さう云ふ趣に一瞬間も捕はれた記憶を有たない。たゞ大吐血後五六日――經つか經たないうちに、時々一種の精神狀態に

陷づた。それからは毎日の様に同じ狀態を繰り返した。遂には來ぬ先にそれを豫期する樣になつた。さうして自分とは緣の遠いドストイエフスキーの享けたと云ふ不可解の歡喜をひそかに想像して見た。それを想像するか思ひ出す程に、余の精神狀態は尋常を飛び越えてゐたからである。ドクインセイの細かに書き殘した驚くべき阿片の世界も余の連想に上つた。けれども讀者の心目を眩惑するに足る妖麗な彼の敍述が、鈍い色をした卑しむべき原料から人工的に生れたのだと思ふと、それを自分の精神狀態に比較するのが急に厭になつた。

余は當時十分と續けて人と話をする煩はしさを感じた。聲となつて耳に響く空氣の波が心に傳つて、平らかな氣分をことさらに騷つかせるやうに覺えた。口を閉ぢて黃金なりといふ古い言葉を思ひ出して、ただ仰向けに寐てゐた。難有い事に室の廂と、向ふの三階の屋根の間に、靑い空が見えた。其空が秋の露に洗はれつゝ次第に高くなる時節であつた。余は默つて此空を見詰めるのを日課の樣にした。何事もない、又何物もない此大空は、其靜かな影を傾むけて悉く余の心に映じた。さうして余の心にも何事もなかつた、又何物もなかつた。透明な二つのものがぴたりと合つた。合つて自分に殘るのは、縹緲とでも形容して可い氣分であつた。

其内穩かな心の隅が、何時か薄く暈されて、其所を照す意識の色が微かになつた。すると、エイルに似た靄が輕く全面に向つて萬遍なく展びて來た。さうして總體の意識が何處も彼處も稀薄になつた。それは普通の夢の樣に濃いものではなかつた。尋常の自覺の樣に混雜したものでもなかつた。又其中間に横はる重い影でもなかつた。魂が身體を拔けると云つては既に語弊がある。靈が細かい神經の末端に迄行き亙つて、泥で出來た肉體の內部を、輕く清くすると共に、官能の實覺から杳かに遠からしめた狀態であつた。余は余の周圍に何事が起りつゝあるかを自覺した。同時に其自覺が窈窕として地の臭を帶びぬ一種特別のものであると云ふ事を知つた。床の下に水が廻つて、自然と疊が浮き出すやうに、余の心は己の宿る身體と共に、蒲團から浮き上がつた。より適當に云へば、腰と肩と頭に觸れる堅い蒲團が何處かへ行つて仕舞つたのに、心と身體は元の位置に安く漂つて居た。發作前に起るドストイエフスキーの歡喜は、瞬刻のために十年もしくは終生の命を賭しても然るべき性質のものとか聞いてゐる。余のそれは左樣に强烈のものではなかつた。寧ろ恍惚として幽かな趣を生活面の全部に輕く且つ深く印し去つたのみであつた。從つて余にはドストイエフスキーの受けた樣な憂鬱性の反動が來なかつた。余は朝から屢此狀態に

入つた。午過にもよく此蕩漾を味づた。さうして覺めたときは何時でも其樂しい記憶を抱いて幸福の記念とした位であつた。

ドストイエフスキーの享け得た境界は、生理上彼の病の將に至らんとする豫言である。生を半に薄めた余の興致は、單に貧血の結果であつたらしい。

仰臥人如啞。默然見大空。大空雲不動。終日杳相同。

二十一

同じドストイエフスキーも亦死の門口迄引き摺られながら、辛うじて後戻りをする事の出來た幸福な人である。けれども彼の命を危めにかゝつた災は、余の場合に於るが如き惡辣な病氣ではなかつた。彼は人の手に作り上げられた法と云ふ器械の敵となつて、どんと心臟を打ち貫かれやうとしたのである。

彼は彼の倶樂部で時事を談じた。已むなくんば只一揆あるのみと叫んだ。さうして囚はれた。八ケ月の長い間薄暗い獄舍の日光に浴したのち、彼は蒼空の下に引き出されて、新たに刑壇の上

に立つた。彼は自己の宣告を受けるため、二十一度の霜に、襯衣一枚の裸姿となつて、申渡の終るのを待つた。さうして銃殺に處すの一句を突然として鼓膜に受けた。「本當に殺されるのか」とは、自分の耳を信用しかねた彼が、傍に立つ同囚に問ふた言葉である。……白い手帛を合圖に振つた。兵士は覘を定めた銃口を下に伏せた。ドストイエフスキーは斯くして法律の揑ね丸めた熱い鉛の丸を呑まずに濟んだのである。其代り四年の月日をサイベリヤの野に暮した。

彼の心は生から死に行き、死から又生に戻つて、一時間と經たぬうちに三たび鋭どい曲折を描いた。さうして其三段落が三段落ともに、妥協を許さぬ強い角度で連結された。其變化丈でも驚くべき經驗である。生きつゝあると固く信ずるものが、突然是から五分のうちに死ななければならないと云ふ時、既に死ぬと極つてから、猶餘る五分の命を提げて、將に來るべき死を迎へながら、四分、三分、二分と意識しつゝ進む時、更に突き當ると思つた死が、忽ちとんぼ返りを打つて、新たに生と名づけられる時、――余の如き神經質では此三象面の一つにすら堪へ得まいと思ふ。現にドストイエフスキーと運命を同じくした同囚の一人は、是がために其場で氣が狂つて仕舞つた。

夫にも拘はらず、回復期に向つた余は、病牀の上に寐ながら、屢ばドストイエフスキーの事を考へた。ことに彼が死の宣告から蘇へつた最後の一幕を眼に浮べた。――寒い空、新らしい刑壇、刑壇の上に立つ彼の姿、襯衣一枚の儘顫へてゐる彼の姿、――悉く鮮やかな想像の鏡に映つた。獨り彼が死刑を免かれたと自覺し得た咄嗟の表情が、何うしても判然映らなかつた。しかも余はたゞ此咄嗟の表情が見たい許に、凡ての畫面を組み立てゝ居たのである。

余は自然の手に罹つて死なうとした。現に少しの間死んでゐた。後から當時の記憶を呼び起した上、猶所々の穴へ、妻から聞いた顚末を埋めて、始めて全く出來上る構圖を振り返つて見ると、所謂慄然と云ふ感じに打たれなければ已まなかつた。其恐ろしさに比例して、九仞に失つた命を一簀に取り留める嬉しさは又特別であつた。此死此生に伴ふ恐ろしさと嬉しさが紙の裏表の如く重なつたため、余は連想上常にドストイエフスキーを思ひ出したのである。

「もし最後の一節を缺いたなら、余は決して正氣ではゐられなかつたらう」と彼自身が物語つてゐる。氣が狂ふほどの緊張を幸ひに受けずと濟んだ余には、彼の恐ろしさ嬉しさの程度を料り得ぬと云ふ方が寧ろ適當かも知れぬ。夫であればこそ、畫龍點睛とも云ふべき肝心の刹那の表情

が、何う想像しても漠として眼の前に描き出せないのだらう。運命の擒縱を感ずる點に於て、ドストイエフスキーと余とは、殆んど詩と散文ほどの相違がある。

夫にも拘はらず、余は屢ばドストイエフスキーを想像して已まなかつた。さうして寒い空と、新らしい刑壇と、刑壇の上に立つ彼の姿と、襯衣一枚で顫へてゐる彼の姿とを、根氣よく描き去り描き來つて已まなかつた。

今は此想像の鏡も何時となく曇つて來た。同時に、生き返つたわが嬉しさが日に日にわれを遠ざかつて行く。あの嬉しさが始終わが傍にあるならば、――ドストイエフスキーは自己の幸福に對して、生涯感謝する事を忘れぬ人であつた。

二十二

余はうと〳〵しながら何時の間にか夢に入つた。すると鯉の跳ねる音で忽ち眼が覺めた。

余が寐てゐる二階座敷の下はすぐ中庭の池で、中には鯉が澤山に飼つてあつた。其鯉が五分に一度位は必ず高い音を立てゝばしやりと水を打つ。晝のうちでも折々は耳に入つた。夜は殊に甚

しい。隣りの部屋も、下の風呂場も、向ふの三階も、裏の山も悉く靜まり返つた眞中に、余は絶えず此音で眠を覺ました。

犬の眠りと云ふ英語を知つたのは何時の昔か忘れてしまつたが、犬の眠りと云ふ意味を實地に經驗したのは此頃が始めてゞあつた。余は犬の眠りのために夜毎惱まされた。漸く寐付いて難有いと思ふ間もなく、すぐ眠が開いて、まだ空は白まないだらうかと、幾度も曉を待ち侘びた。床に縛り付けられた人の、しんとした夜半に、たゞ獨り生きてゐる長さは存外な長さである。——鯉が勢よく水を切つた。自分の描いた波の上を叩く尾の音で、余は眠を覺ました。

室の中は夕暮よりも猶暗い光で照されてゐた。天井から下がつてゐる電氣燈の珠は黑布で隙間なく掩がしてあつた。弱い光りは此黑布の目を洩れて、微かに八疊の室を射た。さうして此薄暗い灯影に、眞白な着物を着た人間が二人坐つてゐた。二人とも口を利かなかつた。二人とも動かなかつた。二人とも膝の上へ手を置いて、互ひの肩を竝べた儘凝としてゐた。

黑い布で包んだ球を見たとき、余は紗で金箔を卷いた弔旗の頭を思ひ出した。此喪章と關係のある球の中から出る光線によつて、薄く照された白衣の看護婦は、靜かなる點に於て、行儀の好

い點に於て、幽靈の離の樣に見えた。さうして其離は必要のあるたびに無言の儘必ず動いた。

余は聲も出さなかつた。呼びもしなかつた。夫でも余の寐てゐる位置に、少しの變化さへあれば彼等は屹度動いた。手を毛布のうちで、もぢ付かせても、心持肩を右から左へ搖つても、頭を——頭は眼が覺める度に必ず麻痹れてゐた。或は麻痹れるので眼が覺めるのかも知れなかつた。——其頭を枕の上で一寸摺らしても、或は足——足は能く寐覺めの種となつた。平生の癖で時々、片方を片方の上へ重ねて、其儘とろ〳〵となると、下になつた方の骨が澤庵石でも載せられた樣に、みし〳〵と痛んで眠が覺めた。さうして余は必ず強い痛さと重たさとを忍んで足の位置を變へなければならなかつた。——是等のあらゆる場合に、わが變化に應じて、白い着物の動かない事は決してなかつた。時にはわが動作を豫期して、向ふから動くと思はれる場合もあつた。時には手も足も頭も動かさないのに、眠りが盡きて不圖眼を開けさへすれば、白い着物はすぐ顏の傍へ來た。余には白い着物を着てゐる女の心持が少しも分らなかつた。けれども白い着物を着てゐる女は余の心を善く悟つた。さうして影の形に隨ふ如くに變化した。響の物に應ずる如くに働いた。黑い布の目から洩れる薄暗い光の下に、眞白な着物を着た女が、わが肉體の先を越して、

ひそ〳〵と、しかも規則正しく、わが心のまゝに動くのは恐ろしいものであつた。

余は此氣味の惡い心持を抱いて、眼を開けると共に、ぼんやり眸に映る室の天井を眺めた。さうして黑い布で包んだ電氣燈の珠と、其黑い布の織目から洩れてくる光に照らされた白い着物を着た女を見た。見たか見ないうちに白い着物が動いて余に近づいて來た。

秋風鳴萬木。山雨撼高樓。病骨稜如劍。一燈青欲愁。

二十三

余は好意の干乾びた社會に存在する自分を甚だぎごちなく感じた。

人が自分に對して相應の義務を盡して呉れるのは無論難有い。けれども義務とは仕事に忠實なる意味で、人間を相手に取つた言葉でも何でもない。從つて義務の結果に浴する自分は、難有いと思ひながらも、義務を果した先方に向つて、感謝の念を起し惡い。夫が好意となると、相手の所作が一擧一動悉く自分を目的にして働いてくるので、活物の自分に其一擧一動が悉く應へる。其所に互を繋ぐ暖い糸があつて、器械的な世を賴母しく思はせる。電車に乘つて一區を瞬く間に

走るよりも、人の脊に負はれて淺瀨を越した方が情が深い。

義務さへ素直には盡して呉れる人のない世の中に、又自分の義務さへ碌に盡しもしない世の中に、斯んな贅澤を竝べるのは過分である。さうとは知りながら余は好意の干乾びた社會に存在する自分を切にぎごちなく感じた。——或る人の書いたものゝ中に、餘りせち辛い世間だから、自用車を節儉する格で、當分良心を質に入れたとあつたが、質に入れるのは固より一時の融通を計る便宜に過ぎない。今の大多數は質に置くべき好意さへ天で持つて居るものが少なさうに見えた。如何に工面が付いても受出さうとは思へなかつた。とは悟りながら矢張り好意の干乾びた社會に存在する自分をぎごちなく感じた。

今の青年は、筆を執つても、口を開いても、身を動かしても、悉く「自我の主張」を根本義にしてゐる。夫程世の中は切り詰められたのである。夫程世の中は今の青年を虐待してゐるのである。「自我の主張」を正面から承れば、小憎しい申し分が多い。けれども彼等をして此「自我の主張」を敢てして憚かる所なき迄に押し詰めたものは今の世間である。ことに今の經濟事情である。「自我の主張」の裏には、首を縊つたり身を投げたりすると同程度に悲慘な煩悶が含まれ

てゐる。ニーチエは弱い男であつた。多病な人であつた。又孤獨な書生であつた。さうしてザラツストラは斯の如く叫んだのである。

斯うは解釋する樣なものゝ、依然として余は常に好意の干乾びた社會に存在する自分をぎごちなく感じた。自分が人に向つてぎごちなく振舞ひつゝあるにも拘はらず、自らをぎごちなく感じた。さうして病に罹つた。さうして病の重い間、此ぎごちなさを何處へか忘れた。

看護婦は五十グラムの粥をコップの中に入れて、それを鯛味噌と混ぜ合はして、一匙づつ自分の口に運んでくれた。余は雀の子か鳥の子の樣な心持がした。醫師は病の遠ざかるに連れて、殆んど五日目位毎に、余のために食事の獻立表を作つた。ある時は三通りも四通りも作つて、夫を比較して一番病人に好ささうなものを撰んで、あとは夫限反故にした。

醫師は職業である。看護婦も職業である。禮も取れば、報酬も受ける。たゞで世話をして居ない事は勿論である。彼等を以て、單に金錢を得るが故に、其義務に忠實なるのみと解釋すれば、まことに器械的で、實も蓋もない話である。けれども彼等の義務の中に、半分の好意を溶き込んで、それを病人の眼から透かして見たら、彼等の所作がどれ程尊とくなるか分らない。病人は彼

等のもたらす一點の好意によつて、急に生きて來るからである。余は當時さう解釋して獨りで嬉しかつた。さう解釋された醫師や看護婦も嬉しからうと思ふ。

子供と違つて大人は、なまじい一つの物を十筋二十筋の文から出來た樣に見窮める力があるから、生活の基礎となるべき純潔な感情を悉ままに吸收する場合が極めて少ない。本當に嬉しかつた、本當に難有かつた、本當に尊かつたと、生涯に何度思へるか、勘定すれば幾何もない。たとひ純潔でなくても、自分に活力を添へた當時の此感情を、余は其儘長く余の心臟の眞中に保存したいと願つてゐる。さうして此感情が遠からず單に一片の記憶と變化して仕舞さうなのを切に恐れてゐる。——好意の干乾びた社會に存在する自分を甚だぎごちなく感ずるからである。

天下自多事。被吹天下風。高秋悲鬢白。衰病夢顏紅。
送鳥天無盡。看雲道不窮。殘存吾骨貴。愼勿妄磨礲。

二十四

小供のとき家に五六十幅の畫があつた。ある時は床の間の前で、ある時は藏の中で、又ある時

は虫干の折に、余は交る〳〵それを見た。さうして懸物の前に獨り蹲踞まつて、默念と時を過すのを樂とした。今でも玩具箱を引繰り返した樣に色彩の亂調な芝居を見るよりも、自分の氣に入つた畫に對して居る方が遙かに心持が好い。

畫のうちでは彩色を使つた南畫が一番面白かつた。惜い事に余の家の藏幅には其南畫が少なかつた。子供の事だから畫の巧拙などは無論分らう筈はなかつた。好き嫌ひと云つた所で、構圖の上に自分の氣に入つた天然の色と形が表はれてゐれば夫で嬉しかつたのである。

鑑識上の修養を積む機會を有たなかつた余の趣味は、其後別段に新らしい變化を受けないで生長した。從つて山水によつて畫を愛するの弊はあつたらうが、名前によつて畫を論ずるの譏りも犯さずに濟んだ。丁度畫と前後して余の嗜好に上つた詩と同じく、如何な大家の筆になつたものでも、如何に時代を食つたものでも、自分の氣に入らないものは一向顧みる義理を感じなかつた。

（余は漢詩の內容を三分して、いたく其一分を愛すると共に、大いに他の一分をけなしてゐる。殘る三分の一に對しては、好むべきか惡むべきか何れとも意見を有してゐない。）

或時、靑くて丸い山を向ふに控えた、又的皪と春に照る梅を庭に植へた、又柴門の眞前を流れ

る小河を、垣に沿ふて緩く繞らした、家を見て——無論畫絹の上に——何うか生涯に一遍で好いから斯んな所に住んで見たいと、傍にゐる友人に語つた。友人は余の眞面目な顏をしけ〳〵眺めて、君こんな所に住むと、どの位不便なものだか知つてゐるかと左も氣の毒さうに云つた。此友人は岩手のものであつた。余は成程と始めて自分の迂濶を愧づると共に、余の風流心に泥を塗つた友人の實際的なのを惡んだ。

それは二十四五年も前の事であつた。其二十四五年の間に、余も已を得ず岩手出身の友人の樣に次第に實際的になつた。崖を降りて溪川へ水を汲みに行くよりも、臺所へ水道を引く方が好くなつた。けれども南畫に似た心持は時々夢を襲つた。ことに病氣になつて仰向に寐てからは、絕えず美くしい雲と空が胸に描かれた。

すると小宮君が歌麿の錦繪を葉書に刷つたのを送つて呉れた。余は其色合の長い間に自と寂びたくすみ方に見惚れて、眼を放さずそれを眺めてゐたが、不圖裏を返すと、私はこの畫の中にある樣な人間に生れたいとか何とか、當時の自分の情調とは似ても似付かぬ事が書いてあつたので、斯んなやにつこい色男は大嫌だ、おれは暖かな秋の色と其色の中から出る自然の香が好きだと答

へて呉れと傍のものに頼んだ。所が今度は小宮君が自身で枕元へ坐つて、自然も好いが人間の背景にある自然でなくつちやとか何とか病人に向つて古臭い説を吐き掛けるので、余は小宮君を捕へて御前は青二才だと罵つた。――其位病中の余は自然を懐かしく思つてゐた。

空が空の底に沈み切つた様に澄んだ。高い日が蒼い所を目の届くかぎり照らした。余は其射返しの大地に冷ねき内にしんとして獨り温もつた。さうして眼の前に群がる無數の赤蜻蛉を見た。

さうして日記に書いた。――「人よりも空、語よりも默。……肩に來て人懐かしや赤蜻蛉」

是は東京へ歸つた以後の景色である。東京へ歸つたあとも暫らくは、絶えず美くしい自然の畫が、子供の時と同じ樣に、余を支配してゐたのである。

秋露下南硼。黄花粲照顔。欲行沿測遠。却得興雲還。

二十五

子供が來たから見てやれと妻が耳の傍へ口を着けて云ふ。身體を動かす力がないので余は元の姿勢のまゝ唯視線丈を其方に移すと、子供は枕を去る六尺程の所に坐つてゐた。

余の寐てゐる八疊に付いた床の間は、余の足の方にあつた。余の枕元は隣の間を仕切る襖で半塞いであつた。余は左右に開かれた襖の間から敷居越しに余の子供を見たのである。

頭の上の方にゐるものを室を隔てゝ見る視力が、不自然な努力を要するためか、其處に坐つてゐる子供の姿は存外遠方に見えた。無理な一瞥の下に余の眸に映つた顔は、逢ふたと記すよりも寧ろ眺めたと書く方が適當な位離れてゐた。余は此一瞥より外に復子供の影を見なかつた。余の眸はすぐと自然の角度に復した。けれども余は此一瞥の短きうちに凡てを見た。

子供は三人ゐた。十二から十、十から八つと順に一列になつて隣座敷の眞中に竝ばされてゐた。さうして三人ともに女であつた。彼等は未來の健康のため、一夏を茅が崎に過すべく、父母から命ぜられて、兄弟五人で昨日迄海邊を驅け廻つてゐたのである。父が危篤の報知によつて、親戚のものに伴れられて、わざ〳〵砂深い小松原を引き上げて、修善寺迄見舞に來たのである。

けれども危篤の何を意味してゐるかを知るには彼等は餘り小さ過た。彼等は死と云ふ名前を覺えてゐた。けれども死の恐ろしさと怖さとは、彼等の若い額の奥に、未だ嘗て影さへ宿さなかつた。死に捕へられた父の身體が、是から何う變化するか彼等には想像が出來なかつた。父が死ん

だあとで自分等の運命に何んな結果が來るか、彼等には無論考へ得られなかつた。彼等はたゞ人に伴はれて父の病氣を見舞ふべく、父の旅先迄汽車に乘つて來たのである。

彼等の顏には此會見が最後かも知れぬと云ふ愁の表情が丸でなかつた。彼等は親子の哀別以上に無邪氣な顏を有つてゐた。さうして色々人のゐる中に、三人特別な席に竝んで坐らせられて、嚴肅な空氣に凝と行儀よく取り濟ます窮屈を、切なく感じてゐるらしく思はれた。

余はたゞ一瞥の努力に彼等を見た丈であつた。さうして病を解し得ぬ可憐な小さいものを、わざわざ遠く迄引張り出して、殊勝に枕元に坐らせて置くのを却て殘酷に思つた。妻を呼んで、折角來たものだから、其處い等を見物させて遣れと命じた。もし其時の余に、或は是が親子の見納めになるかも知れないと云ふ懸念があつたならば、余はもう少ししみ〴〵彼等の姿を見守つたかも知れなかつた。然し余は醫師や傍のものが余に對して抱いてゐた樣な危險を余の病の上に自ら感じてゐなかつたのである。

子供はぢきに東京へ歸つた。一週間程してから、彼等は各々に見舞狀を書いて、それを一つ封に入れて、余の宿に屆けた。十二になる筆子のは、四角な字を入れた整はない文で、「御祖母樣が雨がふつても風がふいても毎日々々一日もかゝさず御しやか樣へ御詣を遊ばす御百度をなされて早く御父樣の全快を御祈りに居りひ」とあつた。十になる恆子のは尋常であつた。八になるえい子のは全く片假名丈で書いてあつた。字を埋て讀み易くすると、「御父樣の御病氣は如何で御座いますか、私は無事に暮して居りますから御安心なさいませ。御父樣も私の事を思はずに御病氣を早く直して早く御歸りなさいませ。私は毎日休まずに學校へ行つて居ります。又御母樣によろしく」と云ふのである。

余は日記の一頁を寐ながら割いて、それに、留守の中は大人なしく御祖母樣の云ふ事を聞かなくては不可ない、今に序のあつた時修善寺の御土產を屆けてやるからと書いて、すぐ郵便で妻に出さした。子供は余が東京へ歸つてからも、平氣で遊んでゐる。修善寺の土產はもう壞して仕舞つたらう。彼等が大きくなつたとき父の此文を讀む機會が若しあつたなら、彼等は果して何んな感じがするだらう。

傷心秋已到。嘔血骨猶存。病起期何日。夕陽還一村。

二十六

五十グラムと云ふと日本の二勺半にしか當らない。たゞ夫丈の飲料で、此身體を終日持ち應へてゐたかと思へば、自分ながら氣の毒でもあるし、可愛らしくもある。又馬鹿らしくもある。

余は五十グラムの葛湯を恭やしく飲んだ。さうして左右の腕に朝夕二回宛の注射を受けた。腕は兩方とも針の痕で埋まつてゐた。醫師は余に今日は何方の腕にするかと聞いた。余は何方にもしたくなかつた。藥液を皿に溶いたり、夫を注射器に吸ひ込ましたり、針を丁寧に拭つたり、針の先に泡の樣に細かい藥を吹かして眺めたりする注射の準備は甚だ物奇麗で心持が好いけれども、其針を腕にぐさと刺して、其所へ無理に藥を注射するのは不愉快で堪らなかつた。余は醫師に全體其蒼色の液は何だと聞いた。森成さんはブンベルンとかブンメルンとか答へて、遠慮なく余の腕を痛がらせた。

やがて日に二回の注射が一回に減じた。其一回も亦しばらくすると廢めになつた。さうして葛

湯の分量が少しづゝ增して來た。同時に口の中が執拗く粘り始めた。爽かな飲料で絶えず舌と顎と咽喉を洗つてゐなくては居たゝまれなかつた。余は醫師に氷を請求した。醫師は固い片らが滑つて胃の腑に落ち込む危險を恐れた。余は天井を眺めながら、腹膜炎を患らつた廿歲の昔を思ひ出した。其時は病氣に障るとかで、凡ての飲物を禁ぜられてゐた。たゞ冷水で含嗽をする丈の自由を醫師から得たので、余は一時間のうちに、何度となく含嗽をさせて貰つた。さうして其つど人に知れない樣に、そつと含嗽の水を幾分かづゝ胃の中に飲み下して、やつと熱り付く樣な渴を紛らしてゐた。

昔の計を繰り返す勇氣のなかつた余は、口中を潤すための氷を齒で嚙み碎いては、正直に殘らず吐き出した。其代り日に數回平野水を一口づゝ飲まして貰ふ事にした。平野水がくんくんと音を立てる樣な勢で、食道から胃へ落ちて行く時の心持は痛快であつた。けれども咽喉を通り越すや否やすぐと又飲みたくなつた。余は夜半に屢ば看護婦から平野水を洋盃に注いで貰つて、それを難有さうに飲んだ當時を能く記憶してゐる。

渴は次第に歇んだ。さうして渴よりも恐ろしい餓じさが腹の中を荒して歩く樣になつた。余は

寐ながら美くしい食膳を何通りとなく想像で拵らえて、それを眼の前に竝べて樂んでゐた。夫許ではない、同じ獻立を何人前も調へて置いて、多數の朋友にそれを想像で食はして喜こんだ。今考へると普通のものゝ嬉しがる樣な食物はちつともなかつた。斯う云ふ自分にすら餘り難有くはない御膳ばかりを眼の前に浮べてゐたのである。

森成さんがもう葛湯も厭きたらうと云つて、わざ〳〵東京から米を取り寄せて重湯を作つて呉れた時は、重湯を生れて始めて啜る余には大いな期待があつた。けれども一口飲んで始めて其不味いのに驚ろいた余は、夫限り重湯といふものを近づけなかつた。其代りカジノビスケットを一片貰つた折の嬉しさは未だに忘れられない。わざ〳〵看護婦を醫師の室まで遣つて、特に禮を述べた位である。

やがて粥を許された。其旨さはたゞの記憶となつて冷やかに殘つてゐる丈だから實感としては今思ひ出せないが、斯んな旨いものが世にあるかと疑ひつゝ舌を鳴らしたのは確かである。夫からオートミールが來た。ソーダビスケットが來た。余は凡てを難有く食つた。さうして、より多く食ひたいと云ふ事を日課の樣に繰り返して森成さんに訴へた。森成さんは仕舞に余の病床に近

づくのを恐れた。東君はわざ〳〵妻の所へ行つて、先生はあんな尤もな顏をしてゐる癖に、子供の樣に始終食物の話ばかりしてゐて可笑しいと告げた。

腸に春滴るや粥の味

二十七

オイツケンは精神生活と云ふ事を眞向に主張する學者である。學者の習慣として、自己の說を唱ふる前には、あらゆる他のイズムを打破する必要を感ずるものと見えて、彼は彼の所謂精神生活を新たならしむるため、其用意として、現代生活に影響を與ふる在來からの處生上の主義に一も二もなく非難を加へた。自然主義も遣られる、社會主義も叩かれる。凡ての主義が彼の眼から見て存在の權利を失つたかの如くに說き去られた時、彼は始めて精神生活の四字を拈出した。さうして精神生活の特色は自由である、自由であると連呼した。

試みに彼に向つて自由なる精神生活とは何んな生活かと問へば、端的に斯んなものだとは決して答へない。たゞ立派な言葉を秩序よく竝べ立てる。六づかしさうな理窟を蜿蜒と幾重にも重ね

て行く。そこに學者らしい手際はあるかも知れないが、とぐろの中に卷き込まれる素人は茫然して仕舞ふ丈である。

しばらく哲學者の言葉を平民に解る樣に翻譯して見ると、オイツケンの所謂自由なる精神生活とは、斯んなものではなからうか。――我々は普通衣食の爲に働らいてゐる。衣食のための仕事は消極的である。換言すると、自分の好惡撰擇を許さない强制的の苦しみを含んでゐる。さう云ふ風に外から壓し付けられた仕事では精神生活とは名づけられない。苟しくも精神的に生活しやうと思ふなら、義務なき所に向つて自ら進む積極のものでなければならない。束縛によらずして、己れ一個の意志で自由に營む生活でなければならない。

斯う解釋した時、誰も彼の精神生活を許して詰らないとは云ふまい。コムトは倦怠を以て社會の進歩を促がす原因と見た位である。倦怠の極已を得ずして仕事を見付け出すよりも、內に抑えがたき或るものが蟠まつて、凝と持ち應へられない活力を、自然の勢から生命の波動として描出し來る方が實際實の入つた生き法と云はなければなるまい。舞踏でも音樂でも詩歌でも、凡て藝術の價値は玆に存してゐると許しても差支ない。

けれども學者オイツケンの頭の中で纏め上げた精神生活が、現に事實となつて世の中に存在し得るや否やに至つては自から別問題である。彼オイツケン自身が純一無雜に自由なる精神生活を送り得るや否やを想像して見ても分明な話ではないか。間斷なき此種の生活に身を託せんとする前に、吾人は少なくとも早く既に職業なき閑人として存在しなければならない筈である。

豆腐屋が氣に向いた朝丈石臼を回して、心の機まないときは決して豆を挽かなかつたなら商買にはならない。更に進んで、己れの好いた人丈に豆腐を賣つて、いけ好かない客を悉く謝絕したら猶の事商買にはならない。凡ての職業が職業として成立するためには、店に公平の灯を點けなければならない。公平と云ふ美しさうな德義上の言葉を裏から言ひ直すと、器械的と云ふ醜い本體を有してゐるに過ぎない。一分の遲速なく發着する汽車の生活と、所謂精神的生活とは、正に兩極に位する性質のものでなければならない。さうして普通の人は十が十迄此兩端を七分三分とか六分四分とかに交ぜ合はして自己に便宜な樣に又世間に都合の好い樣に（卽ち職業に忠實な樣に）生活すべく天から餘儀なくされてゐる。是が常態である。たま〳〵藝術の好きなものが、好きな藝術を職業とする樣な場合ですら、其藝術が職業となる瞬間に於て、眞の精神生活は既に

汚されて仕舞ふのは當然である。藝術家としての彼は己れに篤き作品を自然の氣乘りで作り上げやうとするに反して、職業家としての彼は評判のよきもの、賣高の多いものを公けにしなくてはならぬからである。

既に個人の性格及び教育次第で融通の利かなくなりさうなオイツケンの所謂自由なる精神生活は、現今の社會組織の上から見ても、是程應用の範圍の狹いものになる。それを一般に行き亙つて實行の出來る大主義の如くに說き去る彼は、學者の通弊として統一病に罹つたのだと酷評を加へても可いが、たま〳〵文藝を好んで文藝を職業としながら、同時に職業としての文藝を忌んでゐる余の如きものの注意を呼び起して、其批評心を刺戟する力は充分ある。大患に罹つた余は、親の厄介になつた子供の時以來久振で始めて此精神生活の光に浴した。けれどもそれは僅か一二ケ月の中であつた。病が癒るに伴れ、自己が次第に實世間に押し出されるに伴れ、斯う云ふ議論を公けにして得意なオイツケンを羨やますには居られなくなつて來た。

二十八

學校を出た當時小石川のある寺に下宿をしてゐた事がある。其處の和尙は內職に身の上判斷をやるので、薄暗い玄關の次の間に、算木と筮竹を見るのが常であつた。固より看板を懸けての公表な商買でなかつた所爲か、占を賴に來るものは多くて日に四五人、少ない時は丸で筮竹を揉む音さへ聞えない夜もあつた。易斷に重きを置かない余は、固より斯の道に於て和尙と無緣の姿であつたから、たゞ折々襖越しに、和尙の、夫や當人の望み通りにした方が好うがすな抔と云ふ緣談に關する助言を耳に挾さむ位なもので、面と向き合つては互に何も語らずに久しく過ぎた。

或時何かの序に、話がつい人相とか方位とか云ふ和尙の繩張り內に摺り込んだので、冗談半分私の未來は何うでせうと聞いて見たら、和尙は眼を据えて余の顏を凝と眺めた後で、大して惡い事もありませんなと答へた。大して惡い事もないと云ふのは、大して好い事もないと云つたも同然で、卽ち御前の運命は平凡だと宣告した樣なものである。余は仕方がないから默つてゐた。すると和尙が、貴方は親の死目には逢へませんねと云つた。余はさうですかと答へた。すると今度は貴方は西へ西へと行く相があると云つた。余は又左樣ですかと答へた。最後に和尙は、早く顯の下へ髯を生やして、地面を買つて居宅を御建てなさいと勸めた。余は地面を買つて居宅を建て

得る身分なら何も君の所に厄介になつちや居ないと答へたかつた。けれども顎の下の髯と、地面居宅とは何んな關係があるか知りたかつたので、それ丈一寸聞き返して見た。すると和尚は眞面目な顔をして、貴方の顔を半分に割ると上の方が長くつて、下の方が短か過ぎる。從つて落ち付かない。だから早く顎髯を生やして上下の釣合を取る樣にすれば、顔の居坐りが可くなつて動かなくなりますと答へた。余は余の顔の雜作に向つて加へられた此物理的もしくは美學的の批判が、優に余の未來の運命を支配するかの如く容易に說き去つた和尚を少し可笑しく感じた。さうして成程と答へた。

一年ならずして余は松山に行つた。それから又熊本に移つた。熊本から又倫敦に向つた。和尚の云つた通り西へ西へと赴いたのである。余の母は余の十三四の時に死んだ。其時は同じ東京に居りながら、つい臨終の席には侍らなかつた。父の死んだ電報を東京から受け取つたのは、熊本に居る頃の事であつた。是で見ると、親の死目に逢へないと云つた和尚の言葉も何うか斯うか的中してゐる。たゞ顎の髯に至つては其時から今日に至る迄、寧日なく剃り續けに剃つてゐるから、地面と居宅が果して髯と共にわが手に入るか何うか未だに判然せずにゐた。

所が修善寺で病氣をして寐付くや否や、頰がざら〳〵し始めた。それが五六日すると一本々々に撮める樣になつた。又しばらくすると、頰から顎が隙間なく隱れる樣になつた。和尚の助言は十七八年振で始めて役に立ちさうな氣色に髯は延びて來た。妻は一層御生やしなすつたら好いでせうと云つた。余も半分其氣になつて、頻りに其邊を撫で廻してゐた。所が幾日となく洗ひも櫛づりもしない髮が、膏と垢で余の頭を埋め盡さうとする汚苦しさに堪へられなくなつて、或日床屋を呼んで、不充分ながら寐たまゝ頭に手を入れて顏に髮剃を當てた。其時地面と居宅の持主たるべき資格を又奇麗に失つて仕舞つた。傍のものは若くなつた〳〵と云つて頻りに囃し立てた。獨り妻丈はおや悉皆剃つて御仕舞になつたんですかと云つて、少し殘り惜しさうな顏をした。妻は夫の病氣が本復した上にも、猶地面と居宅が欲しかつたのである。余と雖も、髯を落さなければ地面と居宅が屹度手に入ると保證されるならば、あの顎は其儘に保存して置いた筈である。

其後髯は始終剃つた。朝早く床の上に起き直つて、向ふの三階の屋根と吾室の障子の間に僅かばかり見える山の頂を眺めるたびに、わが頰の潔よく剃り落してある滑らかさを撫で廻しては嬉しがつた。地面と居宅は當分斷念したか、又は老後の樂しみにあと〳〵迄取つて置く積だつたと

見える。

客夢回時一鳥鳴。夜來山雨曉來晴。孤峯頂上孤松色。早映紅暾鬱々明。

二十九

修善寺が村の名で兼て寺の名であると云ふ事は、行かぬ前から疾に承知してゐた。然し其寺で鐘の代りに太鼓を叩かうとは嘗て想ひ至らなかつた。それを始めて聞いたのは何時の頃であつたか全く忘れて仕舞つた。たゞ今でも余が鼓膜の上に、想像の太鼓がどん——どんと時々響く事がある。すると余は必ず去年の病氣を憶ひ出す。

余は去年の病氣と共に、新らしい天井と、新らしい床の間に懸けた大島將軍の從軍の詩を憶ひ出す。さうして其詩を朝から晩迄に何遍となく讀み返した當時を明らさまに憶ひ出す。新らしい天井と、新らしい床の間と、新らしい柱と、新らしい過ぎて開閉の不自由な障子は、今でも眼の前にあり〳〵と浮べる事が出來るが、朝から晩迄に何遍となく讀み返した大島將軍の詩は、讀んでは忘れ、讀んでは忘れして、今では白壁の樣に白い絹の上を、何處迄も同じ幅で走つて、尾頭ともにぷつりと折れて仕舞ふ黑い線を認める丈である。句に至つては、始めの劍戟といふ二字より外憶ひ出せない。

余は余の鼓膜の上に、想像の太鼓がどん——どんと響く度に、凡て是等のものを憶ひ出す。是等のものゝ中に、凝と仰向いて、尻の痛さを紛らしつゝ、のつそつ夜明を待ち侘びた其當時を回顧すると、修禪寺の太鼓の音は、一種云ふべからざる連想を以て、何時でも余の耳の底に卒然と鳴り渡る。

其太鼓は最も無風流な最も殺風景な音を出して、前後を切り捨てた上、中間丈を、自暴に夜陰に向つて擲き付ける樣に、ぷつきら棒な鳴り方をした。さうして、一つどんと素氣なく鳴ると共にぱたりと留つた。余は耳を峙だてた。一度靜まつた夜の空氣は容易に動かうとはしなかつた。良久らくして、今のは錯覺ではなからうかと思ひ直す頃に、又一つどんと鳴つた。さうして愛想のない音は、水に落ちた石の樣に、急に夜の中に消えたぎり、しんとした表に何の活動も傳へなかつた。寐られない余は、待ち伏せをする兵士の如く次の音の至るを思ひ詰めて待つた。其次の音は矢張り容易には來なかつた。漸くのこと第一第二と同じく極めて乾び切つた響が——響とは

云ひ悪い。黒い空氣の中に、突然無遠慮な點をどつと打つて直筆を隱した樣な音が、余の耳朶を叩いて去る後で、余はつく〳〵と夜を長いものに觀じた。

尤も夜は長くなる頃であつた。暑さも次第に過ぎて、雨の降る日はセルに羽織を重ねるか、思ひ切つて朝から袷を着るかしなければ、肌寒を防ぐ便とならなかつた時節である。山の端に落ち込む日は、常の短かい日よりも猶の事短かく晝を端折つて、灯は容易に點いた。さうして夜は中中明けなかつた。余はじり〳〵と晝に食ひ入る夜長を夜毎に恐れた。眼が開くと屹度夜であつた。是から何時間位斯うしてしんと夜の中に生きながら埋もつて居る事かと思ふと、我ながらわが病氣に堪へられなかつた。新らしい天井と、新らしい柱と、新らしい障子を見詰めるに堪へなかつた。眞白な絹に書いた大きな字の懸物には最も堪へなかつた。あゝ早く夜が明けて呉れゝば可いのにと思つた。

修禪寺の太鼓は此時にどんと鳴るのである。さうして殊更に余を待ち遠しがらせる如く疎らな間隔を取つて、暗い夜をぽつりぽつりと縫ひ始める。それが五分と經ち七分と經つうちに、次第に調子付いて、遂に夕立の雨滴よりも繁く逼つて來る變化は、余から云ふともう日の出に間もな

いと云ふ報知であつた。太鼓を打ち切つてしばらくの後に、看護婦がやつと起きて室の廊下の所丈雨戸を開けて呉れるのは何よりも嬉しかつた。外は何時でも薄暗く見えた。

修善寺に行つて、寺の太鼓を余ほど精密に研究したものはあるまい。其結果として余は今でも時々どんと云ふ餘音のないぷつ切つた樣な響を余の鼓膜の上に錯覺の如く受ける。さうして一種云ふべからざる心持を繰り返してゐる。

夢續星漢泫露幽。夜分形影暗燈愁。旗亭病近修禪寺。一梶疎鐘已九秋。

三十

山を分けて谷一面の百合を飽く迄眺めやうと心に極めた翌日から床の上に仆れた。想像は其時限りなく咲き續く白い花を碁石の樣に點々と見た。それを小暗く包まうとする綠の奥には、重い香が沈んで、風に搖られる折々を待つ程に、葉は息苦しく重なり合つた。——此間宿の客が山から取つて來て瓶に插した一輪の白さと大きさと香から推して、余は有るまじき廣々とした晝を頭の中に描いた。

聖書にある野の百合とは今云ふ唐菖蒲の事だと、其唐菖蒲を床に活けて置いた時、始めて芥舟君から教はつて、夫では丸で野の百合の感じが違ふ様だがと話し合つた一月前も思ひ出された。聖書と關係の薄い余にさへ、檜扇を熱帶的に派出に仕立てた様な唐菖蒲は、深い沈んだ趣を表はすには餘り强過ぎるとしか思はれなかつた。唐菖蒲は何うでも可い。余が想像に描いた幽かな花は、一輪も見る機會のないうちに立秋に入つた。百合は露と共に摧けた。

人は病むものゝ爲に裏の山に入つて、此所彼所から手の屆く幾莖の草花を折つて來た。裏の山は余の室から廊下傳ひにすぐ上る便のある位近かつた。障子さへ明けて置けば、寐ながら緣側と欄間の間を埋める一部分を鼻の先に眺める事も出來た。其一部分は岩と草と、岩の裾を縫ふて迂回して上る小徑とから成り立つてゐた。余は余の爲に山に上るものゝ姿が、緣の高さを辭して欄間の高さに達する迄に、一遍影を隱して、又反對の位地から現はれて、遂に余の視線の外に沒して仕舞ふのを大いなる變化の如くに眺めた。さうして同じ彼等の姿が再び欄間の上から曲折して下つて來るのを疎い眼で眺めた。彼等は必ず粗い縞の貸浴衣を着て、日の照る時は手拭で頬冠りをしてゐた。岨道を行くべきものとも思はれない其姿が、花を抱へて岩の傍にぬつと現はれると、

一種芝居にでも有りさうな感じを病人に與へる位釣合が可笑しかつた。

彼等の採つて來て呉れるものは色彩の極めて乏しい野生の秋草であつた。

或日しんとした眞晝に、長い薄が疊に伏さる様に活けてあつたら、何時何處から來たとも知れない蟋蟀がたつた一つ、大人しく中程に宿つてゐた。其時薄は虫の重みで撓ひさうに見えた。さうして袋戸に張つた新らしい銀の上に映る幾分かの絲が、暈した様に淡くかつ不分明に、眸を誘ふので、猶更運動の感覺を刺戟した。

薄は大概すぐ縮れた。比較的長く持つ女郎花さへ眺めるには餘り色素が足りなかつた。漸く秋草の淋しさを物憂く思ひ出した時、始めて蜀紅葵とか云ふ燃える様な赤い花瓣を見た。留守居の婆さんに錢を遣つて、もつと折らせろと云つたら、錢は要りません、花は預かり物だから上げられませんと斷はつたさうである。余は其話を聞いて、何んな所に花が咲いてゐて、何んな婆さんが何んな顏をして花の番をしてゐるか、見たくて堪らなかつた。蜀紅葵の花瓣は燃えながら、翌日散つて仕舞つた。

桂川の岸傳ひに行くといくらでも咲いてゐると云ふコスモスも時々病室を照らした。コスモス

は凡ての中で最も單簡で且つ長く持つた。余は其薄くて規則正しい花片と、空に浮んだ樣に超然と取り合はぬ咲き具合とを見て、コスモスは干菓子に似てゐると評した。何故ですかと聞いたものがあつた。範賴の墓守の作つたと云ふ菊を分けて貰つて來たのは夫から餘程後の事である。墓守は鉢に植ゑた菊を貸して上げやうかと云つたさうである。此墓守の顏も見たかつた。仕舞には畠山の城址からあけびと云ふものを取つて來て瓶に插んだ。それは色の褪めた茄子の色をしてゐた。さうして其一つを鳥が啄いて空洞にしてゐた。——瓶に插す草と花が次第に變るうちに氣節は漸く深い秋に入つた。

日似三春永。心隨野水空。牀頭花一片。閑落小眠中。

三十一

若い時兄を二人失つた。二人とも長い間床に就いてゐたから、死んだ時は何れも苦しみ拔いた病の影を肉の上に刻んでゐた。けれども其長い間に延びた髮と髯は、死んだ後迄も漆の樣に黑くかつ濃かつた。髮は夫程でもないが、剃る事の出來ないで不本意らしく爺々汚さうに生えた髯に

至つては、見るから憐れであつた。余は一人の兄の太く逞しい髯の色を未だに記憶してゐる。死ぬ頃の彼の顏が如何にも氣の毒な位痩せ衰へて小さく見えるのに引き易へて、髯丈は健康な壯者を凌ぐ勢で延びて來た一種の對照を、氣味惡く又情なく感じた爲でもあらう。

大患に罹つて生か死かと騷がれる余に、幾日かの怪しき時間は、生とも死とも片付かぬ空裏に過ぎた。存亡の領域が稍明かになつた頃、まづ吾存在を確めたいと云ふ願から、取り敢へず鏡を取つてわが顏を照らして見た。すると何年か前に世を去つた兄の面影が、卒然として冷かな鏡の裏を掠めて去つた。骨許意地惡く高く殘つた頰、人間らしい暖味を失つた蒼く黃色い皮、落ち込んで動く餘裕のない眼、それから無遠慮に延びた髮と髯、——どう見ても兄の記念であつた。

たゞ兄の髮と髯が死ぬ迄漆の樣に黑かつたのに拘はらず、余の夫等には何時の間にか銀の筋が疎らに交つてゐた。考へて見ると兄は白髮の生へる前に死んだのである。死ぬとすれば其方が屑よいかも知れない。白髮に鬢や頰をぽつ〳〵冒され乍ら、まだ生き延びる工夫に餘念のない余は、今を盛りの年頃に容赦なく世を捨てゝ逝く壯者に比べると、何だか極りが惡い程未練らしかつた。鏡に映るわが表情のうちには、無論果敢ないと云ふ心持もあつたが、死に損なつたと云ふ恥も少

しは交つてゐた。又「ヴアージニバス・ピユエリスク」の中に、人はいくら年を取つても、少年の時と同じ樣な性情を失はないものだと書いてあつたのを、成程と首肯いて讀んだ當時を憶ひ出して、たゞ其當時に立ち戻りたい樣な氣もした。

「ヴアージニバス・ピユエリスク」の著者は、長い病苦に責められながらも、よく其快活の性情を終焉迄持ち續けたから、嘘は云はない男である。けれども惜しい事に髪の黑いうちに死んで仕舞つた。もし彼が生きて六十七十の高齡に達したら、或は斯うは云ひ切れなかつたらうと思へば、思はれない事もない。自分が二十の時、三十の人を見れば大變に懸隔がある樣に思ひながら、何時か三十が來ると、二十の昔と同じ氣分な事が分つたり、わが三十の時、四十の人に接すると、非常な差違を認めながら、四十に達して三十の過去を振り返れば、依然として同じ性情に活きつゝある自己を悟つたりするので、スチーヴンソンの言葉も尤と受けて、今日迄世を經た樣なものゝ、外部から萌して來る老頽の徵候を、幾莖かの白髪に認めて、健康の常時とは心意の趣を異にする病裡の鏡に臨んだ刹那の感情には、若い影は更に射さなかつたからである。

白髪に强いられて、思ひ切りよく老の敷居を跨いで仕舞はうか、白髪を隱して、猶若い街巷に

徘徊しやうか、――其所迄は鏡を見た瞬間には考へなかつた。又考へる必要のない迄に、病める余は若い人々を遠くに見た。病氣に罹る前、ある友人と會食したら、其友人が短かく刈つた余の揉上を眺めて、其所から白髪に冒されるのを苦にして段々上の方へ剃り上げるのではないかと聞いた。其時の余には斯う聞かれる丈の色氣は充分あつた。けれども病に罹つた余は、白髪を看板にして事をしたい位迄に諦めよく落ち付いてゐた。

病の癒えた今日の余は、病中の余を引き延ばした心に活きてゐるのだらうか、又は友人と食卓に就いた病氣前の若さに立ち戻つてゐるだらうか。果してスチーヴンソンの云つた通りを歩く氣だらうか、又は中年に死んだ彼の言葉を否定して漸く老境に進む積だらうか。――白髪と人生の間に迷ふものは若い人たちから見たら可笑しいに違ない。けれども彼等若い人達にもやがて墓と浮世の間に立つて去就を決しかねる時期が來るだらう。

桃花馬上少年時。笑據銀鞍拂柳枝。綠水至今迢遞去。月明來照鬢如絲。

三十二

初めはたゞ漠然と空を見て寐てゐた。それから暫くして何時歸れるのだらうと思ひ出した。或時はすぐにも歸りたい様な心持がした。けれども床の上に起き直る氣力すらないものが、何うして汽車に搖られて半日の遠きを行くに堪へ得やうかと考へると、歸りたいと念ずる自分が可成馬鹿氣て見えた。從つて傍のものに自分は何時歸れるかと問ひ糺した事もなかつた。同時に秋は幾度の霜夜を卷いて、わが心の前を過ぎた。空は次第に高く且蒼くわが上を掩ひ始めた。

もう動かしても大事なからうと云ふ頃になつて、東京から別に二人の醫者を迎へて其意見を確めたら、今二週間の後にと云ふ挨拶であつた。挨拶があつた翌日から余は自分の寐てゐる地と、寐てゐる室を見捨るのが急に惜しくなつた。約束の二週間が成るべく緩くり廻轉する樣にと冀つた。曾て英國に居た頃、精一杯英國を惡んだ事がある。それはハイネが英國を惡んだ如く因業に英國を惡んだのである。けれども立つ間際になつて、知らぬ人間の渦を卷いて流れてゐる倫敦の海を見渡したら、彼等を包む蒼色の空氣の奥に、余の呼吸に適する一種の瓦斯が含まれてゐる樣な氣がし出した。余は空を仰いで町の眞中に佇ずんだ。二週間の後此地を去るべき今の余も、病む軀を横へて、床の上に獨り佇ずまざるを得なかつた。余は特に余のために造つて貰つた高さ一

尺五寸程の偉大な藁蒲團に佇ずんだ。靜かな庭の寂寞を破る鯉の水を切る音に佇ずんだ。朝露に濡れた屋根瓦の上を遠近と尾を搖かし歩く鶺鴒に佇ずんだ。枕元の花瓶にも佇ずんだ。廊下のすぐ下をちよろ〳〵と流れる水の音にも佇ずんだ。斯くわが身を繞る多くのものに低徊しつゝ、豫定の通り二週間の過ぎ去るのを待つた。

其二週間は待ち遠い齒搔さもなく、又あつけない不足もなく普通の二週間の如くに來て、尋常の二週間の如くに去つた。さうして雨の濛々と降る曉を最後の記念として與へた。暗い空を透かして、余は雨かと聞いたら、人は雨だと答へた。

人は余を運搬する目的を以て、一種妙なものを拵らえて、それを座敷の中に舁き入れた。長さは六尺もあつたらう、幅は僅か二尺に足らない位狹かつた。其一部は疊を離れて一尺程の高さ迄上に反り返る樣に工夫してあつた。さうして全部を白い布で掩いた。余は抱かれて、此高く反た前方に脊を託して、平たい方に足を長く横たへた時、是は葬式だなと思つた。生きたものに葬式と云ふ言葉は穩當でないが、此白い布で包んだ寐臺とも寐棺とも片の付かないもの丶上に横になつた人は、生きながら葬はれるとしか余には受け取れなかつた。余は口の中で、第二の葬式と云

ふ言葉をしきりに繰り返した。人の一度は必ず遺つて貰ふ葬式を、余丈はどうしても二返執行しなければ濟まないと思つたからである。

舁かれて室を出るときは平であつたが、階子段を降りる際には、臺が傾いて、急に輿から落ちさうになつた。玄關に來ると同宿の浴客が大勢竝んで、左右から白い輿を目送してゐた。何れも葬式の時の樣に靜かに控えてゐた。余の寐臺は其間を通り拔けて、雨の降る庇の外に擔ぎ出された。外にも見物人は澤山居た。やがて輿を竪に馬車の中に渡して、前後相對する席と席とで支へた。豫かじめ寸法を取つて拵らえたので、輿はきつしりと旨く馬車の中に納つた。馬は降る中を動き出した。余は寐ながら幌を打つ雨の音を聞いた。さうして、御者臺と幌の間に見える窮屈な空間から、大きな岩や、松や、水の斷片を難有く拜した。竹藪の色、柿紅葉、芋の葉、槿垣、熟した稻の香、凡てを見るたびに、成程今は斯んなものゝ有るべき季節であると、生れ返つた樣に憶ひ出しては嬉しがつた。更に進んでわが歸るべき所には、如何なる新らしい天地が、寐ぼけた古い記憶を蘇生せしむるために展開すべく待ち構へてゐるだらうかと想像して獨り樂しんだ。同時に昨日迄低徊した藁蒲團も鶺鴒も秋草も鯉も小河も悉く消えて仕舞つた。

萬事休時一息同。餘生豈忍比殘灰。風過沸秋聲起。日落幽篁暝色來。
漫道山中三月滯。詎知門外一天開。歸期勿後黃花節。恐有羇魂夢舊苔。

四三、一〇、二九——四四、二、二〇

三十三

正月を病院で爲た經驗は生涯にたつた一遍しかない。

松飾りの影が眼先に散らつく程暮が押し詰つた頃、余は始めて此珍らしい經驗を目前に控えた自分を異樣に考へ出した。同時に其考が單に頭丈に働らいて、毫も心臟の鼓動に響を傳へなかつたのを不思議に思つた。

余は白い寢床の上に寐ては、自分と病院と來るべき春とを斯の如く一所に結び付ける運命の醉興さ加減を懇ろに商量した。けれども起き直つて机に向つたり、膳に着いたりする折は、もう此所が我家だと云ふ氣分に心を任して少しも怪しまなかつた。それで歳は暮れても春は逼つても別に感慨と云ふ程のものは浮ばなかつた。余は夫程長く病院に居て、夫程親しく患者の生活に根

を卸したからである。

愈大晦日が來た時、余は小さい松を二本買つて、それを自分の病室の入口に立てやうかと思つた。然し松を支へる爲に釘を打ち込んで美くしい柱に創を付けるのも惡いと思つて已めにした。看護婦が表へ出て梅でも買つて參りませうと云ふから買つて貰ふ事にした。

此看護婦は修善寺以來余が病院を出る迄半年の間始終余の傍に附き切りに附いてゐた女である。余は故らに彼の本名を呼んで町井石子孃々々と云つてゐた。時々は間違へて苗字と名前を顚倒して、石井町子孃とも呼んだ。すると看護婦は首を傾げながらさう改めた方が好い樣で御座いますねと云つた。仕舞には遠慮がなくなつて、とう〳〵颱と云ふ渾名を付けて遣つた。或時何かの序に、時に御前の顏は何かに似てゐるよと云つたら、何うせ碌なものに似てゐるのぢや御座いますまいと答へたので、凡そ人間として何かに似てゐる以上は、まづ動物に極つてゐる。外に似やうたつて容易に似られる譯のものぢやないと言つて聞かせると、夫や植物に似ちや大變ですと絕叫して以來、とう〳〵颱と極つて仕舞つたのである。

颱の町井さんはやがて紅白の梅を二枝提げて歸つて來た。白い方を藏澤の竹の畫の前に插して、

紅い方は太い竹筒の中に投げ込んだなり、袋戸の上に置いた。此間人から貰つた支那水仙もくるくると曲つて延びた葉の間から、白い香をしきりに放つた。町井さんは、もう大分病氣が可くおなりだから、明日は屹度御雜煮が祝へるに違ないと云つて余を慰めた。

除夜の夢は例年の通り枕の上に落ちた。斯う云ふ大患に罹つた揚句、病院の人となつて幾つの月を重ねた末、雜煮迄こゝで祝ふのかと考へると、頭の中にはアイロニーと云ふ羅馬字が明らかに綴られて見える。夫にも拘はらず、感に堪えぬ趣は少しも胸を刺さずに、四十四年の春は自づから南向の緣から明け放れた。さうして町井さんの豫言の通り形ばかりとは云ひながら、小さい一切の餅が元日らしく病人の眸に映じた。余は此一椀の雜煮に自家頭上を照すある意義を認めながら、しかも何等の詩味をも感ぜずに、小さな餅の片を平凡にかつ一口に、ぐいと食つて仕舞つた。

二月の末になつて、病室前の梅がちらほら咲き出す頃、余は醫師の許を得て、再び廣い世界の人となつた。振り返つて見ると、入院中に、余と運命の一角を同じくしながら、遂に廣い世界を見る機會が來ないで亡くなつた人は少なくない。ある北國の患者は入院以後病勢が次第に募るの

で、附添の息子が心配して、大晦日の夜になつて、無理に郷里に連れて歸つたら、汽車がまだ先へ着かないうちに途中で死んで仕舞つた。一間置いて隣りの人は自分で死期を自覺して、諦らめてしまへば死ぬと云ふ事は何でもないものだと云つて、氣の毒な程大人しい往生を遂げた。向ふの外れにゐた潰瘍患者の高い咳嗽が日毎に薄らいで行くので、大方落ち付いたのだらうと思つて町井さんに尋ねて見ると、衰弱の結果何時の間にか死んでゐた。さうかと思ふと、癌で見込のない病人の癖に、から景氣をつけて、回診の時に醫師の顏を見るや否や、すぐ起き直つて尻を捲るといふのがあつた。附添の女房を蹴たり打つたりするので、女房が洗面所へ來て泣いてゐるのを、看護婦が見兼て慰めてゐましたと町井さんが話した事も覺えてゐる。ある食道狹窄の患者は病院には這入つてゐる樣なものゝ迷ひに迷ひ拔いて、灸點師を連れて來て灸を据ゑたり、海草を採つて來て煎じて飲んだりして、ひたすら不治の癌症を癒さうとしてゐた。……

余は是等の人と、一つ屋根の下に寐て、一つ賄の給仕を受けて、同じく一つ春を迎へたのである。退院後一ケ月餘の今日になつて、過去を一攫にして、眼の前に竝べて見ると、アイロニーの一語は益鮮やかに頭の中に拈出される。さうして何時の間にか此アイロニーに一種の實感が伴

つて、兩つのものが互に纏綿して來た。馳の町井さんも、梅の花も、支那水仙も、雜煮も、――あらゆる尋常の景趣は悉く消えたのに、たゞ當時の自分と今の自分との對照丈がはつきりと殘る爲だらうか。

――四四、四、一三――

子規の畫

余は子規の描いた畫をたつた一枚持つてゐる。亡友の記念だと思つて長い間それを袋の中に入れて仕舞つて置いた。年數の經つに伴れて、ある時は丸で袋の所在を忘れて打ち過ぎる事も多かつた。近頃不圖思ひ出して、あゝして置いては轉宅の際などに何處へ散逸するかも知れないから、今のうちに表具屋へ遣つて懸物にでも仕立てさせやうと云ふ氣が起つた。澁紙の袋を引き出して塵を拂いて中を檢べると、畫は元の儘濕つぽく四折に疊んであつた。畫の外に、無いと思つた子規の手紙も幾通か出て來た。余は其中から子規が余に宛てゝ寄こした最後のものと、夫から年月の分らない短いものとを選び出して、其中間に例の畫を挾んで、三つを一纏めに表裝させた。

畫は一輪花瓶に插した東菊で、圖柄としては極めて單簡な者である。傍に「是は萎み掛けた所

と思ひ玉へ。下手いのは病氣の所爲だと思ひ玉へ。嘘だと思はゞ肱を突いて描いて見玉へ」といふ註釋が加へてある所を以て見ると、自分でもさう旨いとは考へて居なかつたのだらう。子規が此畫を描いた時は、余はもう東京には居なかつた。彼は此畫に、東菊活けて置きけり火の國に住みける君の歸り來るがねと云ふ一首の歌を添へて、熊本迄送つて來たのである。

壁に懸けて眺めて見ると如何にも淋しい感じがする。色は花と莖と葉と硝子の瓶とを合せて僅に三色しか使つてない。花は開いたのが一輪に蕾が二つだけである。葉の數を勘定して見たら、凡てゞやつと九枚あつた。夫に周圍が白いのと、表裝の絹地が寒い藍なので、どう眺めても冷たい心持が襲つて來てならない。

子規は此簡單な草花を描くために、非常な努力を惜まなかつた樣に見える。僅か三莖の花に、少くとも五六時間の手間を掛けて、何處から何處迄丹念に塗り上げてゐる。是程の骨折は、たゞに病中の根氣仕事として餘程の決心を要するのみならず、如何にも無雜作に俳句や歌を作り上げる彼の性情から云つても、明かな矛盾である。思ふに畫と云ふ事に初心な彼は當時繪畫に於ける寫生の必要を不折などから聞いて、それを一草一花の上にも實行しやうと企てながら、彼が俳句

の上で既に悟入した同一方法を、此方面に向つて適用する事を忘れたか、又は適用する腕がなかつたのであらう。

東菊によつて代表された子規の畫は、拙くて且眞面目である。才を呵して直ちに章をなす彼の文筆が、繪の具皿に浸ると同時に、忽ち堅くなつて、穂先の運行がねつとり竦んで仕舞つたのかと思ふと、余は微笑を禁じ得ないのである。虚子が來て此幅を見た時、正岡の繪は旨いぢやありませんかと云つたことがある。余は其時、だつてあれ丈の單純な平凡な特色を出すのに、あの位時間と勞力を費さなければならなかつたかと思ふと、何だか正岡の頭と手が、入らざる働きを餘儀なくされた觀がある所に、隱し切れない拙が溢れてゐると思ふと答へた。馬鹿律氣なものに厭味も利いた風もあり樣はない。其處に重厚な好所があるとすれば、子規の畫は正に働きのない愚直ものゝ旨さである。けれども一線一畫の瞬間作用で、優に始末をつけられべき特長を、咄嗟に辨ずる手際がない爲めに、已を得ず省略の捷徑を棄てゝ、几帳面な塗抹主義を根氣に實行したとすれば、拙の一字は何うしても免れ難い。

子規は人間として、又文學者として、最も「拙」の缺乏した男であつた。永年彼と交際をした

何の月にも、何の日にも、余は未だ曾て彼の拙を笑ひ得るの機會を捉へ得た試がない。又彼の拙に惚れ込んだ瞬間の場合さへ有たなかつた。彼の歿後殆ど十年にならうとする今日、彼のわざわざ余の爲に描いた一輪の東菊の中に、確に此一拙字を認める事の出來たのは、其結果が余をして失笑せしむると、感服せしむるとに論なく、余に取つては多大の興味がある。たゞ畫が如何にも淋しい。出來得るならば、子規に此拙な所をもう少し雄大に發揮させて、淋しさの償としたかつた。

——四四、七、四——

ケーベル先生

木の葉の間から高い窓が見えて、其窓の隅からケーベル先生の頭が見えた。傍から濃い藍色の烟が立つた。先生は烟草を呑んでゐるなと余は安倍君に云つた。

此前此處を通つたのは何時だか忘れて仕舞つたが、今日見ると僅かの間にもう大分樣子が違つてゐる。甲武線の崖上は角並新らしい立派な家に建て易へられて、何れも現代的日本の產み出した富の威力と切り放す事の出來ない門構許である。其中に先生の住居だけが過去の記念の如くつた一軒古ぼけたなりで殘つてゐる。先生は此燻ぶり返つた家の書齋に這入つたなり滅多に外へ出た事がない。其書齋は取も直さず先生の頭が見えた木の葉の間の高い所であつた。

余と安倍君とは先生に導びかれて、敷物も何も足に觸れない素裸の儘の高い階子段を薄暗がり

にがたがた云はせながら上つて、階上の右手にある書齋に入つた。さうして先生の今迄腰を卸して窓から頭丈を出してゐた一番光に近い椅子に余は坐つた。そこで外面から射す夕暮に近い明りを受けて始めて先生の顏を熟視した。先生の顏は昔と左迄違つて居なかつた。先生は自分で六十三だと云はれた。余が先生の美學の講義を聽きに出たのは、余が大學院に這入つた年で、慥か先生が日本へ來て始めての講義だと思つてゐるが、先生は其時から已に斯う云ふ顏であつた。先生に日本へ來てもう二十年になりますかと聞いたら、左樣はならない、たしか十八年目だと答へられた。先生の髮も髯も英語で云ふとオーバーンとか形容すべき、ごく薄い麻の樣な色をしてゐる上に、普通の西洋人の通り非常に細くつて柔かいから、少しの白髮が生えても丸で目立たないのだらう。夫にしても血色が元の通りである。十八年を日本で住み古した人とは思へない。

先生の容貌が永久にみづ〳〵してゐる樣に見えるのに引き易へて、先生の書齋は毫け切つた色で包まれてゐた。洋書といふものは唐本や和書よりも裝飾的な背皮に學問と藝術の派出やかさを偲ばせるのが常であるのに、此部屋は余の眼を射る何物をも藏してゐなかつた。たゞ大きな机があつた。色の褪めた椅子が四脚あつた。マッチと埃及烟草と灰皿があつた。余は埃及烟草を吹か

しながら先生と話をした。けれども部屋を出て、下の食堂へ案内される迄、余は遂に先生の書齋にどんな書物がどんなに竝んでゐたかを知らずに過ぎた。

花やかな金文字や赤や青の背表紙が余の眼を刺激しなかつた許りではない。純潔な白色でさへ遂に余の眼には觸れずに濟んだ。先生の食卓には常の歐洲人が必要品とまで認めてゐる白布が懸つてゐなかつた。其代りにくすんだ更紗形を置いた布が一杯に被さつてゐた。さうして其布は此間迄余の家に預かつてゐた娘の子を嫁づける時に新調して遣つた布團の表と同じものであつた。此卓を前にして坐つた先生は、襟も襟飾も着けてはゐない。千筋の縮みの襯衣を着た上に、玉子色の薄い脊廣を一枚無造作に引掛けた丈である。始めから儀式ばらぬ樣にとの注意ではあつたが、あまり失禮に當つてはと思つて、余は白い襯衣と白い襟と紺の着物を着てゐた。君が正裝をしてゐるのに私はこんな服でと先生が最前云はれた時、正裝の二字に痛み入る許であつたが、成程洗ひ立ての白いものが手と首に着いてゐるのが正裝なら、余の方が先生よりも餘程正裝であつた。

余は先生に一人で淋しくはありませんかと聞いたら、先生は少しも淋しくはないと答へられた。西洋へ歸りたくはありませんかと尋ねたら、夫程西洋が好いとも思はない、然し日本には演奏會

と芝居と圖書館と書館がないのが困る、それ丈が不便だと云はれた。一年位暇を貰つて遊んで來ては何うですと促がして見たら、そりや無論遣つて貰へる、けれども夫は好まない。私がもし日本を離れる事があるとすれば、永久に離れる。決して二度とは歸つて來ないと云はれた。

先生は斯ういふ風に夫程故郷を慕ふ樣子もなく、あながち日本を嫌ふ氣色もなく、自分の性格とは容れ惡い程に矛盾な亂雜な空虛にして安つぽい所謂新時代の世態が、周圍の過渡層の底から次第々々に浮き上つて、自分を其中心に陷落せしめねば已まぬ勢を得つゝ進むのを、日毎眼前に目擊しながら、それを別世界に起る風馬牛の現象の如く餘所に見て、極めて落ち付いた十八年を吾邦で過ごされた。先生の生活はそつと煤烟の巷に棄てられた希臘の彫刻に血が通ひ出した樣なものである。雜鬧の中に己れを動かして如何にも靜かである。先生の踏む靴の底には敷石を嚙む鋲の響がない。先生は紀元前の半島の人の如くに、しなやかな革で作つたサンダルを穿いて音なしく電車の傍を歩るいてゐる。

先生は昔し鳥を飼つて居られた。何處から來たか分らないのを餌を遣つて放し飼にしたのである。先生と鳥とは妙な因緣に聞える。此二つを頭の中で結び付けると一種の氣持が起る。先生が

大學の圖書館で書架の中からポーの全集を引き卸したのを見たのは昔の事である。先生はポーもホフマンも好きなのだと云ふ。此夕其烏の事を思ひ出して、あの烏は何うなりましたと聞いたら、あれは死にました、凍えて死にました。寒い晩に庭の木の枝に留つたまんま、翌日になると死んでゐましたと答へられた。

烏の序に蝙蝠の話が出た。安倍君が蝙蝠は懐疑な鳥だと云ふから、何故と反問したら、でも薄暗がりにはた〳〵飛んでゐるからと謎の樣な答をした。余は蝙蝠の翼が好だと云つた。先生はあれは悪魔の翼だと云つた。成程畫にある悪魔は何時でも蝙蝠の羽根を脊負つてゐる。

其時夕暮の窓際に近く日暮しが來て朗らに鋭どい聲を立てたので、卓を圍んだ四人はしばらくそれに耳を傾けた。あの鳴聲にも以太利の連想があるでせうと余は先生に尋ねた。是は先生が少し前に蜥蜴が美くしいと云つたので、青く澄んだ以太利の空を思ひ出させやしませんかと聞いたら、左樣だと答へられたからである。然し日暮しの時には、先生は少し首を傾むけて、いや彼は以太利ぢやない、何うも以太利では聞いた事がない樣に思ふと云はれた。

余等は熱い都の中心に誤つて點ぜられたとも見える古い家の中で、靜かにこんな話をした。夫

から菊の話と椿の話と鈴蘭の話をした。果物の話もした。其果物のうちで尤も香りの高い遠い國から來たレモンの露を搾つて水に滴らして飲んだ。珈琲も飲んだ。凡ての飲料のうちで珈琲が一番旨いといふ先生の嗜好も聞いた。夫から靜かな夜の中に安倍君と二人で出た。

先生の顏が花やかな演奏會に見えなくなつてから、もう餘程になる。先生はピヤノに手を觸れる事すら日本に來ては口外せぬ積であつたと云ふ。先生は夫程浮いた事が嫌なのである。凡ての演奏會を謝絶した先生は、たゞ自分の部屋で自分の氣に向いたとき丈樂器の前に坐る、さうして自分の音樂を自分丈で聞いてゐる。其外にはたゞ書物を讀んでゐる。

文科大學へ行つて、此處で一番人格の高い教授は誰だと聞いたら、百人の學生が九十人迄は、數ある日本の教授の名を口にする前に、まづフォン・ケーベルと答へるだらう。斯程に多くの學生から尊敬される先生は、日本の學生に對して終始渝らざる興味を抱いて、十八年の長い間哲學の講義を續けてゐる。先生が疾くに索寞たる日本を去るべくして、未だに去らないのは、實に此愛すべき學生あるが爲である。

京都の深田教授が先生の家にゐる頃、何時でも閑な時に晩餐を食べに來いと云はれてから、行

かずに經過した月日を數へるともう四年以上になる。漸く其約を果して安倍君と一所に大きな暗い夜の中に出た時、余は先生は是から先、もう何年位日本に居る積だらうと考へた。さうして一度日本を離れゝばもう歸らないと云はれた時、先生の引用した "no more, never more." というふポーの句を思ひ出した。

四四、七、一六―一七

變な音

上

うと〳〵したと思ふうちに眠が覺た。すると、隣の室で妙な音がする。始めは何の音とも又何處から來るとも判然した見當が付かなかつたが、聞いてゐるうちに、段々耳の中へ纏まつた觀念が出來てきた。何でも山葵卸しで大根かなにかをごそごそ擦つてゐるに違ない。自分は確に左樣だと思つた。夫にしても今頃何の必要があつて、隣りの室で大根卸を拵えてゐるのだか想像が付かない。

いひ忘れたが此處は病院である。貯は遙か半町も離れた二階下の臺所に行かなければ一人もゐない。病室では炊事割烹は無論菓子さへ禁じられてゐる。況して時ならぬ今時分何しに大根卸を

拵えやう。是は屹度別の音が大根卸の様に自分に聞えるのに極つてゐると、すぐ心の裡で覺つたやうなものゝ、偖それなら果して何處から何うして出るのだらうと考へると矢ツ張分らない。

自分は分らないなりにして、もう少し意味のある事に自分の頭を使はうと試みた。けれども一度耳に付いた此不可思議な音は、それが續いて自分の鼓膜に訴へる限り、妙に神經に祟つて、何うしても忘れる譯に行かなかつた。あたりは森として靜かである。此棟に不自由な身を託した患者は申し合せた樣に默つてゐる。寐てゐるのか、考へてゐるのか話をするものは一人もない。廊下を歩く看護婦の上草履の音さへ聞えない。その中に此ごし〳〵と物を擦り減らす樣な異な響丈が氣になつた。

自分の室はもと特等として二間つゞきに作られたのを病院の都合で一つ宛に分けたものだから、火鉢などの置いてある副室の方は、音通の壁が隣の境になつてゐるが、寢床の敷いてある六疊の方になると、東側に六尺の袋戸棚があつて、其傍が芭蕉布の襖ですぐ隣へ往來が出來るやうになつてゐる。此一枚の仕切をがらりと開けさへすれば、隣室で何を爲てゐるかは容易く分るけれども、他人に對して夫程の無禮を敢てする程大事な音でないのは無論である。折から暑さに向ふ時

節であつたから緣側は常に明け放した儘であつた。緣側は固より棟一杯細長く續いてゐる。けれども患者が緣端へ出て互を見透す不都合を避けるため、わざと二部屋毎に開き戸を設けて御互の關とした。夫は板の上へ細い棧を十文字に渡した洒落たもので、小使が毎朝拭掃除をするときには、下から鍵を持つて來て、一々此戸を開けて行くのが例になつてゐた。自分は立つて敷居の上に立つた。かの音は此妻戸の後から出る樣である。戸の下は二寸程空いてゐたが其處には何も見えなかつた。

此音は其後もよく繰返された。ある時は五六分續いて自分の聽神經を刺激する事もあつたし、又ある時は其半にも至らないでぱたりと已んで仕舞ふ折もあつた。けれども其何であるかは、つひに知る機會なく過ぎた。病人は靜かな男であつたが、折々夜半に看護婦を小さい聲で起してゐた。看護婦が又殊勝な女で小さい聲で一度か二度呼ばれると快よい優しい「はい」と云ふ受け答へをして、すぐ起きた。さうして患者の爲に何かしてゐる樣子であつた。

ある日回診の番が隣へ廻てきたとき、何時もよりは大分手間が掛ると思つてゐると、やがて低い話し聲が聞え出した。それが二三人で持ち合つて中々拂取ないやうな濕り氣を帶びてゐた。や

がて醫者の聲で、どうせ、さう急には御癒りにはなりますまいからと云つた言葉丈が判然聞えた。夫から二三日して、かの患者の室にこそ〳〵出入りする人の氣色がしたが、孰れも己れの活動する立居を病人に遠慮する樣に、ひそやかに振舞つてゐたと思つたら、病人自身も影の如く何時の間にか何處かへ行つて仕舞つた。さうして其後へはすぐ翌る日から新しい患者が入つて、入口の柱に白く名前を書いた黑塗の札が懸易へられた。例のごし〳〵云ふ妙な音はとう〳〵見極はめる事が出來ないうちに病人は退院して仕舞つたのである。其うち自分も退院した。さうして、彼の音に對する好奇の念は夫ぎり消えて仕舞つた。

下

三ケ月許して自分は又同じ病院に入つた。室は前のと番號が一つ違ふ丈で、つまり其西隣であつた。壁一重隔てた昔の住居には誰が居るのだらうと思つて注意して見ると、終日かたりと云ふ音もしない。空いてゐたのである。もう一つ先が卽ち例の異樣の音の出た所であるが、此處には今誰がゐるのだか分らなかつた。自分は其後受けた身體の變化のあまり劇しいのと、其劇しさが

頭に映つて、此間からの過去の影に與へられた動搖が、絕えず現在に向つて波紋を傳へるのとで、山葵卸の事などは頓と思ひ出す暇もなかつた。夫よりは寧ろ自分に近い運命を持つた在院の患者の經過の方が氣に掛つた。看護婦に一等の病人は何人ゐるのかと聞くと、三人丈だと答へた。重いのかと聞くと重さうですと云ふ。夫から一日二日して自分は其三人の病症を看護婦から確めた。一人は食道癌であつた。一人は胃癌であつた、殘る一人は胃潰瘍であつた。みんな長くは持たない人許ださうですと看護婦は彼等の運命を一纏めに豫言した。

自分は緣側に置いたベゴニアの小さな花を見暮らした。實は菊を買ふ筈の所を、植木屋が十六貫だと云ふので、五貫に負けろと値切つても相談にならなかつたので、歸りに、ぢや六貫やるから負けろと云つても矢つ張り負けなかつた、今年は水で菊が高いのだと說明した、ベゴニアを持つて來た人の話を思ひ出して、賑やかな通りの緣日の夜景を頭の中に描きなどして見た。

やがて食道癌の男が退院した。胃癌の人は死ぬのは諦めさへすれば何でもないと云つて美しく死んだ。潰瘍の人は段々惡くなつた。夜半に眼を覺すと、時々東のはづれで、附添のものが氷を摧く音がした。其の音が已むと同時に病人は死んだ。自分は日記に書き込んだ。——「三人のう

ち二人死んで自分丈け殘つたから、死んだ人に對して殘つてゐるのが氣の毒の樣な氣がする。あの病人は嘔氣があつて、向ふの端から此方の果迄響くやうな聲を出して始終げえ〳〵吐いてゐたが、此二三日夫がぴたりと聞えなくなつたので、大分落ち付いてまあ結構だと思つたら、實は疲勞の極聲を出す元氣を失つたのだと知れた。」

其後患者は入れ代り立ち代り出たり入つたりした。自分の病氣は日を積むに從つて次第に快方に向つた。仕舞には上草履を穿いて廣い廊下をあちこち散歩し始めた。其時不圖した事から、偶然ある附添の看護婦と口を利く樣になつた。暖かい日の午過食後の運動がてら水仙の水を易へてやらうと思つて洗面所へ出て、水道の栓を捩つてゐると、其看護婦が受持の室の茶器を洗ひに來て、例の通り挨拶をしながら、しばらく自分の手にした朱泥の鉢と、其中に盛り上げられた樣に膨れて見える珠根を眺めてゐたが、やがて其眼を自分の横顏に移して、此前御入院の時よりもうずつと御顏色が好くなりましたねと、三ケ月前の自分と今の自分を比較した樣な批評をした。

「此前つて、あの時分君も矢張り附添で此處に來てゐたのかい」

「えゝつい御隣でした。しばらく〇〇さんの所に居りましたが御存じはなかつたかも知れませ

ん」

〇〇さんと云ふと例の變な音をさせた方の東隣である。自分は看護婦を見て、これがあの時夜半に呼ばれると、「はい」といふ優しい返事をして起き上つた女かと思ふと、少し驚かずにはゐられなかつた。けれども、其頃自分の神經をあの位刺激した音の原因に就ては別に聞く氣も起らなかつた。で、あゝ左樣かと云つたなり朱泥の鉢を拭いてゐた。すると女が突然少し改まつた調子で斯んな事を云つた。

「あの頃貴方の御室で時々變な音が致しましたが……」

自分は不意に逆襲を受けた人の樣に、看護婦を見た。看護婦は續けて云つた。

「毎朝六時頃になると屹度する樣に思ひましたが」

「うん、彼れか」と自分は思ひ出した樣につい大きな聲を出した。「あれはね、自働革砥の音だ。毎朝髭を剃るんでね、安全髮剃を革砥へ掛けて磨ぐのだよ。今でも遣つてる。嘘だと思ふなら來て御覽」

看護婦はたゞへえゝと云つた。段々聞いて見ると、〇〇さんと云ふ患者は、ひどく其革砥の音

を氣にして、あれは何の音だ何の音だと看護婦に質問したのださうである。看護婦が何うも分らないと答へると、隣の人は大分快いので朝起きるすぐと、運動をする、其器械の音なんぢやないか羨ましいなと何遍も繰り返したと云ふ話である。

「夫や好いが御前の方の音は何だい」

「御前の方の音つて？」

「そら能く大根を卸す様な妙な音がしたぢやないか」

「えゝ彼れですか。あれは胡瓜を擦たんです。患者さんが足が熱つて仕方がない、胡瓜の汁で冷してくれと仰しやるもんですから私が始終擦つて上げました」

「ぢや矢張大根卸の音なんだね」

「えゝ」

「さうか夫で漸く分つた。――一體〇〇さんの病氣は何だい」

「直腸癌です」

「ぢや到底六づかしいんだね」

「えゝもう疾うに。此處を退院なさると直でした、御亡くなりになつたのは」

自分は默然としてわが室に歸つた。さうして胡瓜の音で他を焦らして死んだ男と、革砥の音を羨ましがらせて快くなつた人との相違を心の中で思ひ比べた。

四四、七、一九―二〇

手紙

一

モーパサンの書いた「二十五日間」と題する小品には、ある溫泉場の宿屋へ落ち付いて、着物や白襯衣を衣裳棚へ仕舞はうとするときに、其の抽出を開けて見たら、中から卷いた紙が出たので、何氣なく引き延ばして讀むと、「私の二十五日」といふ標題が眼に觸れたといふ冒頭が置いてあつて、其次に此無名氏の所謂二十五日間が一字も變へぬ元の姿で轉載された體になつてゐる。

プレヴーの「不在」と云ふ端物の書出には、巴里のある雜誌に寄稿の安受合をしたため、獨逸の去る避暑地へ下りて、其處の宿屋の机か何かの上で、しきりに構想に惱みながら、何か種はないかといふ風に、机の抽出を一々開けて見ると、最終の底から思ひがけなく手紙が出て來たとあ

つて、是にも其手紙がそつくり其儘出してある。

二つとも能く似た趣向なので、或は新しい方が古い人の遺つた迹を踏襲したのではなからうかといふ疑ひさへ挾さめる位だが、夫は自分には何うでも宜しい。たゞ自分もつい近頃、是と同樣の經驗をした事がある。その所爲か今迄は成程小說家丈あつて旨く拵へるなと許り感心してゐたのが、それ以後實際世の中には隨分似た事が澤山あるものだといふ氣になつて、寧ろ偶然の重複に咏嘆する樣な心持が幾分かあるので、つい二人の作をこゝに竝べて擧げたくなつたのである。

尤もモーパサンのは標題の示す如く、逗留二十五日間の印象記と云ふ種類に屬すべきもので、プレヴーのは滯在中の女客に宛てた艶めかしい男の文だから、雙方とも無名氏の文字それ自身が興味の眼目である。自分の經驗も矢張不圖した場所で意外な手紙の發見をしたと云ふ事にはなるが、それが導火線になつて、思ひがけなく或實際上の效果を收め得たのであるから、手紙其物には夫程興味がない。少くとも、小說的な情調の下に、それを讀み得なかつた自分には左ういふ興味はなかつた。其處が前に擧げた佛蘭西の二作家と違ふ所で、其處が又彼等よりも散文的な自分をして、彼等の例にならつて、其手紙を此話の中心として、一字殘らず寫さしめなかつた原因

になる。

手紙は疑ひもなく宿屋で發見されたのである。場所も場合も殆んど佛蘭西の作家の筆にした所と殆んど變りはない。けれども何うしてとか何んな手紙をとか云ふ問に答へるためには、それを發見した當時から約一週間程前に溯ぼつて說明する必要がある。

愈K市へ立つといふ前の晩に成て、妻が丁度好い序だから、歸りに重吉さんの所へ寄つて入らつしやい、さうして重吉さんに會つて、あの事をもつと判然極めて入らつしやい。何だか紙鳶が木の枝へ引懸つてゐながら、途中で揚がつてる樣な氣がして不可ませんからと云つた。重吉の事は自分も同感であつた。夫にしても妻によく斯んな氣の利いた言葉が使へると思つて、御前誰かに敎はつたのかいと、何も答へない先に、まづ冗談半分の疑ひを仄めかして見た。すると妻は存外眞面目切つた顏付で、何をですと問ひ返した。開き直つたといふ程でもないが、此方の意味が通じなかつた事丈は慥な樣に見えたから、自分は紙鳶の話は夫切にして、直接重吉の事を談合した。

重吉といふのは自分の身內とも厄介者とも片の付かない一種の靑年であつた。一時は自分の家

に寢起をして迄學校へ通つた位關係は深いのであるが、大學へ這入つて以來下宿をしたぎり、四年の課程を終るまで、とう〳〵家へは歸らなかつた。尤も別に疎遠になつたと云ふ譯ではない、日曜や土曜もしくは平日でさへ氣に向いた時は遣つて來て長く遊んで行つた。元來が鷹揚な性質で、素直に男らしく打ち寬ろいでゐる樣に見えるのが、持つて生れた此人の得であつた。それで自分も妻も甚だ重吉を好いてゐた。重吉の方でも自分等を叔父さん叔母さんと呼んでゐた。

二

重吉は學校を出た許である。さうして出るや否やすぐ田舍へ行つて仕舞つた。何故そんな所へ行くのかと聞いたら別に大した意味もないが、唯口を賴んで置いた先輩が、行つたら何うだと勸めるから其氣になつたのだと答へた。それにしてもHはあんまりぢやないか、責めて大阪とか名古屋とかなら地方でも仕方がないけれどもと、自分は當人が既に極めたといふにも拘らず一應彼のH行に反對して見た。其時重吉はたゞにや〳〵笑つてゐた。さうして今急にあすこに缺員が出來て困てると云ふから、當分の約束で行のです、直又歸つて來ますと、恰も未來が自分の勝手に

なる様な物の云ひ方をした。自分は其場で重吉の「又歸つて來ます」を「歸つて來る積です」に訂正して違りたかつたけれども左う思ひ込でゐるものゝ心を、無益にさわ付かせる必要もないからそれは夫なりにして置いて、ぢやあの事は何うする積だと尋ねた。「あの事」は今迄の行き掛り上、重吉の立つ前に是非共聞いて置かなければならない問題だつたからである。すると重吉は別に氣に掛る様子もなく、萬事貴方に御任せするから宜敷願ひますと云つたなり、平氣でゐた。刺激に對して急劇な反應を示さないのは此男の天分であるが、夫にしても彼の年齢と、此問題の性質から一般的に見た所で、重吉の態度はあまり冷靜過て、定量未滿の興味しか有ち得ないといふ風に思はれた。自分は少し不審を抱いた。

元來自分と妻と重吉の間にたゞ「あの事」として一種の符牒の様に通用してゐるのは、實を云ふと、彼の緣談に關する件であつた。卒業の少し前から話が續いてゐるので、自分達丈には單なる「あの事」で一切の經過が明かに頭に浮む所爲か、別段改まつて相手の名前などは口へ出さないで濟ます事が多かつたのである。

女は妻の遠緣に當るものゝ次女であつた。其關係で時々自分の家に出入る所から自然重吉とも

知合になつて、會へば互に挨拶する位の交際が成立した。けれども二人の關係は夫以上に接近する機會も企てもなく、殆ど同じ距離で進行するのみに見えた。さうして二人共夫以上に何物をも求むる氣色がなかつた。要するに二人の間は、年長者の監督の下に立つある少女と、まだ修業中の身分を自覺するある青年とが一種の社會的な事情から、互と顏を見合せて、禮義に戻らない丈の應對をするに過ぎなかつた。

だから自分は驚いたのである。重吉が昂らず逼らず、常と少しも違はない平面な調子で、あの人を妻に貰ひたい、話て呉れませんかと云つた時には、君本當かと實際聞き返した位であつた。自分はすぐ重吉の擧止動作が不斷に大抵は眞面目である如く、此の問題に對しても亦眞面目であるのを發見した。さうして過渡期の日本の社會道德に背いて、私の歩を相互に進める事なしに、意志の重みを初から監督者たる父母に寄せ掛けた彼の行ひ振りを快よく感じた。其處で彼の依頼を引き受けた。

早速妻を遣つて先方へ話をさせて見ると、妻は女の母の挨拶だといつて、妙な返事を齎した。金はなくつても構はないから道樂をしない保證の付いた人でなければ遣らないと云ふのである。

さうして何故そんな注文を出すかの、理由が説明として其返事に伴つてゐた。

女には一人の姉があつて、其姉は二三年前既にある資産家の所へ嫁に行つた。今でも行つてゐる。世間並の夫婦として別に他の注意を惹く程の波瀾もなく、まづ平穏に納まつてゐるから、人目には夫で差支ない様に見えるけれども、姉娘の父母は此二三年の間に、苦々しい思ひを斷えず陰で舐めさせられたのである。其凡ては娘の片付いた先の夫の不身持から起つたのだと云へば夫迄であるが、父母だつて、娘の亭主を、業務上必要の交際から追ひ出して迄、娘の權利と幸福を庇護しやうと試みる程捌けない人達ではなかつた。

三

實を云ふと、父母は始めから夫を承知の上で娘を嫁にやつたのである。それのみか、腕利の腕を最も敏活に働かすといふ意味に解釋した酒と女は、仕事の上に缺くべからざる交際社會の必要條件と迄認めてゐた。夫だのに彼等はやがて眉を顰めなければならなくなつて來た。かねて丈夫であつた娘の健康が、嫁に入つて暫くすると、眼に付くやうに衰へ出したときに、彼等はもう相

應に胸を傷めた。娘に會ふたびに母親は何處か悪くはないかと聞いた。娘はたゞ微笑して、別段何ともないと許答へてゐた。けれども其血色は次第に蒼くなる丈であつた。さうして仕舞にはとうとう病氣だと云ふ事が分つた。しかも其病氣があまり質の好いものでないといふ事が分つた。猶よく探究すると、公けに云ひ難い夫の疾が何時の間にか妻に感染したのだと云ふ事迄分つた。父母の懸念が道德上の着色を帶びて、好悪の意味で、娘の夫に反射する様になつたのは此時からである。彼等は氣の毒な長女を見るにつけて、是から嫁に遣る次女の夫として、姉のそれと同型の道樂ものを想像するに堪へなくなつた。それで金はなくても構はないから、何うしても道樂をしない保險付の堅い人に貰つてもらはうと、夫婦の間に相談が纏まつたのである。

自分の妻は先方から聞いて來た通りを斯う云ふ風に詳しく繰返して自分に話した後、重吉さんなら間違ひはなからうと思ふんですが、何うでせうと云つた。自分は只左樣さと答へた儘、疊の上を見詰めてゐた。すると妻は稍疑ぐつたやうな調子で、重吉さんでも道樂をするんでせうかと聞いた。

「まあ大丈夫だらうよ」

「まあぢや困るは。本當に大丈夫でなくつちや。だつて若しか、嘘でも吐いたら、私濟まないんですもの。私許ぢやない、貴方だつて責任が御有りぢやありませんか」

斯う云はれて見ると成程先方へ好加減な返事をするのも如何なものである。と云つて、あの重吉が遊ぶとは、何うしても考へられない。無論彼の容子には爺々汚いとか無骨過ぎるとか、凡て粋の裏へ廻るものは一つもなかつた。けれども全面が平たく尋常に出來上つてゐる所爲か、何處と指して、此處が道樂臭いといふ點も亦丸で見當らなかつた。自分は妻と色々話した末、斯う云つた。

「まあ大抵宜からうぢやないか。道樂の方は受け合ひますと云つといでよ」

「道樂の方つて——。爲ない方をでせう」

「當り前さ。爲る方を受け合つちや大變だ」

妻は又先方へ行つて、決して道樂をする樣な男ぢや御座いませんと受合つた。話は夫から發展し始めたのである。重吉が地方へ行くと云ひ出した時には、夫がずつと進行して、もう十の九迄は纏まつてゐた。自分は重吉のHへ立つ前に、わざ〳〵先方へ出掛けて行つて、父母の同意を求め

た上で重吉を立たせた。

重吉とお靜さんとの關係は其處迄行つて、ぴたりと停つたなり今日に至つてまだ動かずにゐる。尤も自分は夫程氣にも掛からない、今に何方からか動き出すだらう、萬事は其時の事と覺悟を極めてゐたが、妻は女丈に心配して、此間も長い手紙を重吉に遣つて、一體あの事は何うなさる積ですかと尋ねたら、重吉は萬事宜敷願ひますと例の通りの返事を寄こした。其前聞き合はせた時には、私はまだ道樂を始めませんから、大丈夫ですといふ端書が來た。妻は其端書を自分の所へ持つて來て、重吉さんも隨分呑氣ね、まだ始めませんつて、今に始められた日にや、大丈夫でも何でもないぢやありませんか、冗談ぢやあるまいし、と少し怒つた樣な語氣を洩らした。自分にも重吉の用ひた此まだと云ふ字が如何にも可笑しく思はれた。妻に、當人本氣なのかなと云つた位である。

妻が評した如く、斯う云ふ風に、いつ迄も、紙鳶が木の枝に引掛つて中途から揚がつてゐる樣な狀態で推して行かれては間へ這入つた自分達の責任としても、仕舞には放つて置かれなくなるのは明らかだから、今度の旅行を幸ひ、歸りにHへ寄つて、所謂「あの事」をもつと判然片付け

て來たら好からうと云ふ妻の意見に從ふ事に極めて家を出た。

四

汽車中では重吉の地方生活を色々に想像する暇もあつたが、目的地へ下りるや否や、すぐ當用の爲に忙殺されて、「あの事」抔は殆ど考へもしなかつた。やう〳〵四五日掛つて、一段落が付いた時、自分は又汽車に搖られながら、まだ見ないHの町や、其町の中にある重吉の下宿してゐる旅館などを、頭の奥に漂よふ畫の樣に眺めた。固より物數寄のさせる業だから、煙草の煙に似て、取留る事の出來ないうちに、また煙草の煙に似た淡い愉快があつた。とかくする內に汽車はとうとうHへ着いた。

自分はすぐ俥を雇つて、重吉のゐる宿屋の玄關へ乘付けた。番頭に此處に佐野といふ人が下宿して居る筈だがと聞くと番頭は御辭儀を二つばかりして、佐野さんは先達て迄御出になりましたが、つい此間御引移りになりましたと云ふ。怪しからん事だと思ひながらも、猶引越先の模樣を尋ねて見ると、到底自分などの行つて、一晩でも二晩でも厄介になれさうな所ではないらしい。

一層此處へ泊る方が樂だらうと思つて、ぢや空いた部屋へ案內して呉れと云ふと、番頭は又御辭儀を一つして、誠に御氣の毒樣で御座いますが、招魂祭で何の室も塞がつて居りますのでと叮嚀に斷つた。自分は傘を突いた儘、しばらく玄關の前に立つてゐた。正式に云ふと、あらかじめ重吉に通知をした上、猶H着の時間を電報で云つて遣べきであるが、可成御互の面倒を省いて簡略に事を濟すのが當世だと思つて、わざと前觸なしに重吉を襲つたのであるが、愈來て見ると、自分の遣口はたゞの不注意から、出る不都合な結果を、自分の上に投げ掛けたと同じ事になつて仕舞つた。

自分はHにどんな宿屋が何軒あるか丸で知らなかつたが、此旅館が其內で一番善いのだと云ふ事丈は、かねて受取つた重吉の手紙によつて心得てゐた。成程奥を覗いて見ると、廊下が折れ曲つたり、中庭の先に新しい棟が見えたりして、さも廣さうで且物綺麗であつた。自分は番頭に何處か都合が出來るだらうと云つた。番頭は當惑した樣な顏をして、暫く考へてゐたが、甚だ見苦しい所で、一夜泊の御客樣には御氣の毒で御座いますが、佐野さんの入らしつた御座敷なら、何うか致しませうと答へた。其口振から察すると、何でも餘程汚ない所らしいので、又少し躊躇し

掛けたが、もとより此地へ來て體裁を顧みる必要もない身だから、一晩や二晩は何んな室で明かしたつて構はないと云ふ氣になつて、此間迄重吉のゐたと云ふ其部屋へ案内して貰つた。

室は第一の廊下を右へ折れて、其處の縁側から庭下駄を穿いて、二足三足三和土の上を渡らなければ這入れない代りに何處とも續てゐない所が、丸で一軒立の觀を與へた。天井の低いのや柱の細いのが、さも茶がかつた空氣を作ると共に、如何にも濕ぽい陰氣な感じがした。さうして疊と云はず襖と云はず甚しく古びてゐた。向の藤棚の陰に見える少し出張つた新築の中二階抔と較べると、丸で比較にならない程趣が違つてゐた。

「斯んな所に這入つてゐたのか」と思ひながら、自分は茶を呑んで暫く座敷を見廻して居たが、やがて硯を借りて、重吉の所へやる手紙を書いた。たゞ簡單にK市へ用があつて來た序に此處へ寄つたから、すぐ來いといふ丈に留めた。夫から湯に入つて出ると、もう食事の時間になつた。自分は成るべく重吉と一所に晩飯を食はうと思つて、煙草を何本も吹かしながら、彼の來るのを心待ちに待つてゐるうちに、向ふの中二階に電氣燈が點いて、賑やかな人聲が聞え出した。自分はとう〳〵待ち切れず一人膳に向つた。給仕に出た女が、招魂祭で何處の宿屋でも込み合つてゐ

るとか、町では色々の催しがあるとか、佐野さんも今晩は屹度何處かへ御呼ばれなすつたんでせうとか云ふのを聞きながら、麥酒を一二杯呑んだ。下女は重吉の事を大人なしい好い方だと云つた。女に惚れられるかいと聞いたら、えへゝと笑つてゐた。道樂をするだらうと聞いたら、下を向いて小さな聲をしていゝえと答へた。

五

食事が濟んで下女が膳を下げたのは、もう九時近くであつた。夫でも重吉はまだ顔を見せなかつた。自分はひとりで縁鼻へ座蒲團を運んで、手摺に靠れながら向座敷の明るい電氣燈や派出な笑ひ聲を濕つぽい空氣の中から遠く窺つて詰らない心持を詰らないなりに引摺る樣な態度で、煙草許り吹かしてゐた。そこへ先刻の下女が襖を開けて、漸と入らつしやいましたと案内をした。其後から重吉が赤い顔をして入つて來た。自分は重吉の赤い顔を此時始めて見た。けれども席に着いて挨拶をする彼の樣子と云ひ、言葉數と云ひ、抑揚の調子と云ひ、凡てが平生の重吉其儘であつた。自分は彼の言語動作のいづれの點にも、酒氣に驅られて動くのだと評して然るべき際立

つた何物をも認めなかつたので、異常な彼の顏色に就いては、別に云ふ所もなく濟ました。少時して彼は茶器を代へに來た下女の名を呼んで、洋盃に水を一杯呉れと賴んだ。さうして自分の方を見ながら、何うも咽喉が渴いてと間接な辯解をした。

「大分飲んだんだね」

「えゝ御祭りで、少し飲まされました」

赤い顏の事は簡單に是で濟んで仕舞つた。夫れから何處を何う話が通つたか覺えてゐないが、三十分許經つうちに、自分も重吉も何時の間にか、所謂「あの事」の圈内で受け答へをする樣になつた。

「一體何うする氣なんだい」

「何うする氣だつて、——無論貰ひたいんですがね」

「眞劍の所を白狀しなくつちや不可ないよ。好加減な事を云つて引張る位なら、一層きつぱり今のうちに斷る方が得策だから」

「今更斷るなんて、僕は御免だなあ。實際叔父さん、僕はあの人が好きなんだから」

重吉の樣子に何處と云つて嘘らしい所は見えなかつた。

「ぢや、もつと早くどし〳〵片付けるが好いぢやないか、何時迄立つても愚圖々々で、傍から見ると、如何にも煮え切らないよ」

重吉は小さな聲で左樣かなと云つて、しばらく休んでゐたが、やがて元の調子に戻つて、斯う聞いた。

「だつて貰つてこんな田舍へ連れてくるんですか」

自分は田舍でも何でも構はない筈だと答へた。重吉は先方が夫を承知なのかと聞き返した。自分は其時一寸困つた。實はそんな細かな事迄先方の意見を確めた上で、談判に來た譯ではなかつたのだからである。けれども行き掛り上已を得ないので、

「さう話したら、承知するだらうぢやないか」と勢ひよく云つて退けた。

すると、重吉は問題の方向を變へて、目下の經濟事情が、到底暖かい家庭を物質的に形づくる程の餘裕を有つてゐないから、しばらくの間獨りで辛抱する積でゐたのだといふ辯解をした上、最初の約束によれば此年の暮には月給が上がつて東京へ歸れる筈だから、其時は先さへ承知なら、

どんな小さな家でも構へて、お靜さんを迎へる考へだと話した。もし事が約束通りに運ばない爲、月給も上らず、東京へも歸れなかつた曉には、其時こそ、先方さへ異存がなければ、自分の云つた樣にする氣だから、何分宜敷賴むといふ事も附け加へた。自分は一應尤もだと思つた。

「さう御前の腹が極まつてるなら、夫でいい。叔母さんも安心するだらう。御靜さんの方へも、よくさう話して置かう」

「えゝ何うぞ――。然し僕の腹は大抵貴方がたには分つてる筈ですがねえ」

「そんなら、あんな返事を寄こさないが好いよ。たゞ宜敷願ひます丈ぢや何だか一向分らないぢやないか。さうして、あの端書は何だい。私はまだ道樂を始めませんから、大丈夫ですつて。本氣だか冗談だか丸で見當が付かない」

「どうも濟みません。――然し全く本氣なんです」と云ひながら、重吉は苦笑して頭を掻いた。

「あの事」は夫で切り上げて、あとは纏まらない四方山の話に夜を更かした。折角だから二三日逗留して緩くりして入らつしやいと勸めて呉れるのを斷つて、矢張翌日立つ事にしたので、重吉はそんなら御疲れでせう、早く御休みなさいと挨拶して歸つて行つた。

六

翌朝顏を洗つて室へ歸ると、棚の上の鏡臺が麗々と障子の前に据ゑ直してある。自分は何氣なく其前に坐ると共に鏡の下の櫛を取り上げた。さうして其櫛を拭く積か何かで、鏡臺の抽出を力任せに開けて見た。すると淺い桐の底に、奥の方で、何か引掛る樣な手應がしたのが、忽ち輕くなつて、する〳〵と、拔けて來た途端に、捲き納めて捩れたやうな手紙の端が筋違に見えた。自分は引手繰るやうに其手紙を取つて、直五六寸破いて櫛を拭かうとして見ると、細かい女の字で白紙の闇を辿ると云つたやうに、細長くひよろ〳〵と何か書いてあるのに氣が付いた。自分は一寸一二行讀んで見る氣になつた。然し此ひよろ〳〵した文字が言文一致で綴られてゐるのを發見した時、自分の好奇心は最初の一二行では滿足する事が出來なくなつた。自分は知らず知らず、先に裂き破つた五六寸を一息に讀み盡した。さうして裂き殘しの分へ迄もどん〳〵進んで行つた。斯う進んで行くうちにも、自分は絕えず微笑を禁じ得なかつた。實をいふと手紙はある女から男に宛た艶書なのである。

艶書だけに一方から云ふと甚だ陳腐には相違ないが、それが又形式の極らない言文一致で勝手に書き流してあるので、隨分奇拔だと思ふ文句がひよい〳〵と出て來た。ことに字違ひや假名遣が眼に付いた。夫から感情の現はし方が如何にも露骨でありながら一種の型に入つてゐるといふ意味で誠が却て出てゐない樣にも見えた。最も恐るべく下手な戀の都々一なども遠慮なく引用してあつた。凡てを綜合して、書き手の黑人である事が、誰の眼にも何より先にまづ映る手紙であつた。どうせ無關係な第三者が他の艶書の偸み讀をするときに滑稽の興味が加はらない筈はないが、書き手が節操上の德義を負擔しないで濟む黑人の樣な場合には、此興味が他の嚴肅な社會的觀念に妨げられる處がない丈に、讀み手は甚だ氣樂なものである。

さう云ふ譯で、自分は多大の興味を以て此長い手紙をくす〳〵笑ひながら讀んだ。さうして讀みながら、こんなに女から思はれてゐる色男は、一體何者だらうかとの好奇心を、最後の一行が盡きて、名宛の名が自分の眼の前に現れる迄引摺つて行つた。所が此好奇心が遺憾なく滿足されべき畫龍點睛の名前迄愈讀み進んだ時、自分は突然驚いた。名宛には重吉の姓と名が判然書いてあつた。

自分は少しの間ぼんやり庭の方を見てゐた。夫から手に持つた手紙をさら〳〵と卷いて浴衣の懷へ入れた。さうして鏡の前で髪を分けた。時計を見ると、まだ七時である。然し自分は十時何分かの汽車で立つ筈になつてゐた。手を敲いて下女を呼んで、すぐ重吉を車で迎へに遣るやうに命じた。其間に飯を食ふ事にした。

何だか可笑しいといふ氣分も幾分か混つてゐた。けれども惣體に「あの野郎」といふ心持の方が勝つてゐた。其あの野郎として重吉を眺めると、宿を易へて何時迄も知らせなかつたり、散々人を待たせて、氣の毒さうな顏もしなかつたり、漸と這入つて來たかと思ふと、一面アルコールに彩どられてゐたり、凡て不都合だらけである。が、平生何の角度に見ても尋常一式な彼男が、何時の間に女から手紙などを貰つて濟まし返つてゐるのだらうと考へると、當り前過ぎる不斷の重吉と、色男として別に通用する特製の重吉との矛盾が頗る滑稽に見えた。從つて自分は何方の感じで重吉に對して好いか分らなかつた。けれども何方かに極めて、これを根本調として會見しなければならないと云ふ事に氣が付いた。自分は食後の茶を飲んで楊枝を使ひながら、此處へ重吉が來たらどう取扱つたものだらうと考へた。

七

其處へ宿から迎へに遣つた車に乘つて、彼はすぐ馳け付けて來た。彼に對する態度をまだ能く定めてゐない自分には、彼の來かたが寧ろ早過ぎる位、現れやうが今度は迅速であつた。彼は簡單に、早いぢやありませんか、今朝起きたら直上る積でゐた所を御迎へで——と云つた儘、其處へ坐つて、自分の顏を正視した。此時傍から二人の樣子を虛心に觀察したら、重吉の方が自分より遙に無邪氣に見えたに違ない。自分は默つてゐた。彼は白足袋に角帶で單衣の下から鼠色の羽二重を掛けた糯袢の襟を出してゐた。

「今日は大分洒落てるぢやないか」

「昨夕も此服裝ですよ。夜だから分らなかつたんでせう」

自分は又默つた。それから又斯んな會話を二三度取り換はしたが、何時でも其間に妙な穴が出來た。自分は此穴を故意に拵へてゐる樣な感じがした。けれども重吉にはそんな蟠まりがないから、いくら口數を減らしても其態度が自から天然であつた。仕舞に自分は眞面目になつて、斯う

云つた。

「實は昨夕もあんなに話した、あの事だがね。何うだ、一層の事きつぱり斷つて仕舞つちや」

重吉はちよつと腑に落ちないといふ顏付をしたが、それでも何時もの樣なおつとりした調子で、何故ですかと聞き返した。

「何故つて、君の樣な道樂ものは向の夫になる資格がないからさ」

今度は重吉が默つた。自分は重ねて云つた。

「己はちやんと知つてるよ。お前の遊ぶ事は天下に隱れもない事實だ」

斯う云つた自分は、急に自分の言葉が可笑しくなつた。けれども重吉が苦笑ひさへせずに控へてゐて呉れたので、此方も眞面目に進行する事が出來た。

「元來男らしくないぜ。人を胡麻化して自分の得ばかり考へるなんて。丸で詐欺だ」

「だつて叔父さん、僕は病氣なんかに、まだ罹りやしませんよ」と重吉が割り込む樣に辯解したので、自分は又可笑しくなつた。

「そんな事が他に分るもんか」

「いえ、全くです」
「兎に角遊ぶのが既に條件違反だ。御前はとても御靜さんを貰ふ譯に行かないよ」
「困るなあ」
重吉は本當に固つた樣な顏をして、色々泣き付いた。自分は頑として破談を主張したが、最後に、それならば、彼が女を迎へる迄の間、謹愼と後悔を表する證據として、月々俸給のうちから十圓宛自分の手本へ送つて、それを結婚費用の一端とするなら、此事件は內濟にして勘辨してやらうと云ひ出した。重吉は十圓を五圓に負てくれと云つたが、自分は聞き入れないで、とう〳〵此方の云ひ條通り十圓づゝ送らせる事に取り極めた。
間もなく時間が來たので、自分は早速起つて着物を着換た。さうして俥を命じて停車場へ急がした。重吉は無論付いて來た。けれども鞄膝掛其他一切の手荷物は既に宿屋の番頭が始末をして、ちやんと列車內に運び込んであつたので、彼はたゞ手持無沙汰にプラットフオームの上に立つて居た。自分は窓から首を出して、重吉の羽二重の襟と角帶と白足袋を、得意氣に眺めてゐた。愈發車の時刻になつて、車の輪が廻り始めたと思ふ際どい瞬間をわざと見計つて、自分は隱袋の中

から今朝讀んだ手紙を出して、おい御土產を遣らうと云ひながら、出來る丈長く手を重吉の方に伸した。重吉がそれを受取る時分には、汽車がもう動き出してゐた。自分は夫限首を列車內に引込めたまゝ、停車場を外れる迄決してプラットフオームを見返らなかつた。
宅へ歸つても、手紙の事は妻には話さなかつた。旅行後一ケ月目に重吉から十圓屆いた時、妻はでも感心ねと云つた。二ケ月目に十圓屆た時には、全く感心だわと云つた。三ケ月目には七圓しか來なかつた。すると妻は重吉さんも苦しいんでせうと云つた。自分から見ると、重吉の御靜さんに對する敬意は、此過去三ケ月間に於て、既に三圓がた缺乏してゐると云はなければならない。將來の敬意に至つては無論疑問である。

四四、七、二五—三一

三山居士

二月二十八日には生暖たかい風が朝から吹いた。其風が土の上を渡る時、地面は一度に濡れ盡くした。外を歩くと自分の踏む足の下から、熱に冒された病人の呼息の樣なものが、下駄の齒に蹴返される毎に、行く人の眼鼻口を惱ますべく、風の爲に吹き上げられる氣色に見えた。家へ歸つて護謨合羽を脱ぐと、肩當の裏側が何時の間にか濡れて、電燈の光に露の樣な光を投げ返した。不思議だから又羽織を脱ぐと、同じ場所が大きく二ケ所程汗で染め拔かれてゐた。余は其下に綿入を重ねた上、フラネルの襦袢と毛織の襯衣を着てゐたのだから、いくら不愉快な夕暮でも、肌に煮染んだ汗の珠が此所迄浸み出さうとは思へなかつた。試ろみに綿入の脊中を撫で廻して貰ふと、果して何處も濕つてゐなかつた。余は何うして一番上に着た護謨合羽と羽織丈が、是程烈し

く濡れたのだらうかと考へて、私かに不審を抱いた。

池邊君の容體が突然變つたのは、其日の十時半頃からで、一時は注射の利目が見える位、落ち付掛けたのださうである。夫が午過になつて又段々險惡に陷つた揚句、とう〳〵絶望の狀態迄進んで來た時は、余が毎日の日課として筆を執りつゝある「彼岸過迄」を漸く書き上げたと同じ刻限である。池邊君が胸部に末期の苦痛を感じて膏汗を流しながら藻掻いてゐる間、余は池邊君に對して何等の顧慮も心配も拂ふ事が出來なかつたのは、君の朋友として、朋友にあるまじき無頓着な心持を抱でゐたと云ふ點に於て、如何にも殘念な氣がする。余が修善寺で生死の間に迷ふ程の心細い病み方をして居た時、池邊君は例の通りの長大な軀幹を東京から運んで來て、余の枕邊に坐つた。さうして苦い顏をしながら、醫者に騙されて來て見たと云つた。醫者に騙されたといふ彼は、固より余を騙す積で斯ういふ言葉を發したのである。彼の死ぬ時には、斯いふ言葉を考へる餘地すら余に與へられなかつた。枕邊に坐つて目禮をする一分時さへ許されなかつた。余はたゞ其晩の夜半に彼の死顏を一目見た丈である。

其夜は吹荒さむ生溫い風の中に、夜着の數を減して、常よりは早く床に就たが、容易に寢つか

れない晩であつた。締りをした門を揺り動かして、使ひのものが、余を驚かすべく池邊君の訃をもたらしたのは十一時過であつた。余はすぐに白い毛布の中から出て服を改めた。車に乗るとき曇よりした不愉快な空を仰いで、風の吹く中へ車夫を駈けさした。路は齒の廻らない程泥濘つてゐるので、車夫のはあ〳〵いふ息遣が、風に攫はれて行く途中で、折々余の耳を掠めた。不斷なら月の差すべき夜と見えて、空を蔽ふ氣味の惡い灰色の雲が、明らさまに東から西へ大きな幅の廣い帶を二筋許り渡してゐた。其間が白く曇つて左右の鼠を却て浮き出す樣に彩つた具合が殊更に凄かつた。余が池邊邸に着く迄空の雲は死んだ樣に丸で動かなかつた。

二階へ上つて、姑く社のものと話した後、余は口の利けない池邊君に最後の挨拶をする爲に、階下の室へ下て行つた。其處には一人の僧が經を讀んでゐた。女が三四人次の間に默つて控へて居た。遺骸は白い布で包んで其上に池邊君の平生着たらしい黑紋付が掛けてあつた。顏も白い晒しで隱してあつた。余が枕邊近く寄つて、其晒しを取り除けた時、僧は讀經の聲をぴたりと止めた。夜半の灯に透かして見た池邊君の顏は、常と何の變る事もなかつた。刈り込んだ髭に交る白髮が、忘る可からざる彼の特徵の如くに余の眼を射た。たゞ血の漲ぎらない兩頰の蒼褪めた色が、

冷たさうな無常の感じを余の胸に刻んだ丈である。

余が最後に生きた池邊君を見たのは、その母堂の葬儀の日であつた。柩の門を出やうとする間際に駈け付けた余が、門側に佇んで、排列の通過を待つべく餘儀なくされた時、余と池邊君とは端なく目禮を取り換はしたのである。其時池邊君が帽を被らずに、草履の儘質素な服裝をして柩の後に續いた姿を今見る樣に覺えてゐる。余は生きた池邊君の最後の記念として其姿を永久に深く頭の奥に仕舞つて置かなければならなくなつたかと思ふと、其時言葉を交はさなかつたのが、甚だ名殘惜しく思はれてならない。池邊君は其時から既に血色が大變惡かつた。けれども其時なら口を利く事が充分出來たのである。

――四五、三、一――

初秋の一日

汽車の窓から怪しい空を覗いてゐると降り出して來た。それが細かい糠雨なので、雨としてよりは寧ろ草木を濡らす淋しい色として自分の眼に映つた。三人は此の頃の天氣を恐れてみんな護謨合羽を用意してゐた。けれども夫がいざ役に立つとなると決して嬉しい顏はしなかつた。彼等は其の日の侘びしさから推して、二日後に來る暗い夜の景色を想像したのである。

「十三日に降つたら大變だなあ」とOが獨言のやうに云つた。

「天氣の時より病人が增えるだらう」と自分も氣のなさゝうに返事をした。

Yは停車場前で買つた新聞に讀み耽つた儘一口も物を云はなかつた。雨は何時の間にか强くなつて、窓硝子に、碎けた露の球のやうなものが見え始めた。自分は閑靜な車輛のなかで、先年英

國のエドワード帝を葬つた時、五千人の卒倒者を出した事などを思ひ出したりした。

汽車を下りて車に乘つた時から、秋の感じは猶强くなつた。幌の間から見ると車の前にある山が靑く濡れ切つてゐる。其の靑いなかの切通しへ三人の車が靜かに掛つて行く。車夫は草鞋も足袋も穿かずに素足を柔かさうな土の上に踏み附けて、腰の力で車を爪先上りに引き上げる。すると左右を鎖す一面の芒の根から爽かな蟲の音が聞え出した。それが幌を打つ雨の音に打ち勝つやうに高く自分の耳に響いた時、自分は此の果しもない蟲の音に伴れて、果しもない芒の簇りを眼も及ばない遠くに想像した。さうしてそれを自分が今取り卷かれてゐる秋の代表者の如くに感じた。

此の靑い秋のなかに、三人は又眞赤な鷄頭を見附けた。其の鮮やかな色の傍には掛茶屋めいた家があつて、緣臺の上に枝豆の殼を干した儘積んであつた。木槿かと思はれる眞白な花も此處彼處に見られた。

やがて車夫が梶棒を下した。暗い幌の中を出ると、高い石段の上に萱葺の山門が見えた。Oは石段を上る前に、門前の稻田の緣に立つて小便をした。自分も用心のため、すぐ彼の傍へ行つて

顰に倣つた。夫から三人前後して濡れた石を踏み乍ら典座寮と書いた懸札の眼に附く庫裡から案内を乞うて座敷へ上つた。

老師に會ふのは約二十年振である。東京からわざ〳〵會ひに來た自分には、老師の顏を見るや否や、席に着かぬ前から、すぐ夫と解つたが先方では自分を全く忘れて居た。私はと云つて挨拶をした時老師はいや丸で御見逸れ申しましたと、改めて久濶を敍したあとで、久しい事になりますな、もう彼是二十年になりますから抔と云つた。けれども其の二十年後の今、自分の眼の前に現れた小作りな老師は、二十年前と大して變つてはゐなかつた。たゞ心持色が白くなつたのと、年の所爲か額にどこか愛嬌が附いたのが自分の豫期と少し異なる丈で、他は昔の儘のS禪師であつた。

「私ももう直五十二になります」

自分は老師の此の言葉を聞いた時、成程若く見える筈だと合點が行つた。實をいふと今迄腹の中では老師の年齒を六十位に勘定してゐた。然し今漸く五十一二とすると、昔自分が相見の禮を執つた頃はまだ三十を超えた許りの壯年だつたのである。夫でも老師は知識であつ

つたから、自分の眼には比較的老けて見えたのだらう。

一所に連れて行つた二人を老師に引き合せて、巡錫の打ち合せ抔を濟ました後、しばらく雜談をしてゐるうちに、老師から緣切寺の由來やら、時賴夫人の開基の事やら、どうして其んな尼寺へ住むやうになつた譯やら、色々聞いた。歸る時には玄關迄送つてきて、「今日は二百二十日ださうで……」と云はれた。三人は其の二百二十日の雨の中を、また切通し越に町の方へ下つた。

翌朝は高い二階の上から降るでもなく晴れるでもなく、たゞ夢のやうに烟るKの町を眼の下に見た。三人が車を竝べて停車場に着いた時、プラットフォームの上には雨合羽を着た五六の西洋人と日本人が七時二十分の上り列車を待つべく無言の儘徘徊してゐた。

御大葬と乃木大將の記事で、都下で發行するあらゆる新聞の紙面が埋まつたのは、夫から一日置いて次の朝の出來事である。

――大正一、九、二二――

ケーベル先生の告別

ケーベル先生は今日（八月十二日）日本を去る筈になつてゐる。然し先生はもう二三日前から東京にはゐないだらう。先生は虚儀虚禮を嫌ふ念の強い人である。二十年前大學の招聘に應じて獨逸を立つときにも、先生の氣性を知つてゐる友人は一人も停車場へ送りに來なかつたといふ話である。先生は影の如く靜かに日本へ來て、又影の如くこつそり日本を去る氣らしい。

靜な先生は東京で三度居を移した。先生の知つてゐる所は恐らく此の三軒の家と、其處から學校へ通ふ道路位なものだらう。かつて先生に散歩をするかと聞いたら、先生は散歩をする處がないから、爲ないと答へた。先生の意見によると、町は散歩すべきものでないのである。

斯ういふ先生が日本といふ國について何も知らう筈がない。また知らうとする好奇心を有つてゐる道理もない。私が早稲田にゐると云てさへ、先生には早稲田の方角が分らない位である。深田君に大隈伯の宅へ呼ばれた昔を注意されても、先生は既に忘れてゐる。先生には大隈伯の名さへ初めてゞあつたかも知れない。

私が先月十五日の夜晩餐の招待を受けた時、先生に國へ歸つても朋友がありますかと尋ねたら、先生は南極と北極とは別だが、外の處なら何處へ行つても朋友はゐると答へた。是は固より笑談であるが、先生の頭の奥に、區々たる場所を超越した世界的の觀念が潜んでゐればこそ斯んな挨拶も出來るのだらう。又斯んな挨拶が出來ればこそ、大した興味もない日本に二十年も永くゐて、不平らしい顏を見せる必要もなかつたのだらう。

場處ばかりではない、時間の上でも先生の態度は全く普通の人と違つてゐる。郵船會社の汽船は半分荷物船だから船足が遲いのに何故それを撰んだのかと私が聞いたら、先生はいくら永く海の中に浮いてゐても苦にはならない、それよりも日本から伯林迄十五日で行けるとか十四日で着けるとか云つて、旅行が一日でも早く出來るのを、非常の便利らしく考へてゐる人の心持が解らないと云つた。

先生の金錢上の考へも、全く西洋人とは思はれない位無頓着である。先生の宅に厄介になつてゐたものなどは、隨分經濟の點にかけて、普通の家には見るべからざる自由を與へられてゐるらしく思はれた。此前會つた時、ある蓄財家の話が出たら、一體あんなに金を溜めて何うする料簡だらうと云つて苦笑してゐた。先生はこれから先、日本政府から貰ふ恩給と、今迄の月給の餘りとで、暮らして行くのだが、其月給の餘りといふのは、天然自然に出來た本當の餘りで、用意の結果でも何でもないのである。

總て斯んな風に出來上つてゐる先生に一番大事なものは、人と人を結びつける愛と情だけである。ことに先生は自分の教へて來た日本の學生が一番好きらしく見える。私が十五日の晩に、先生の家を辭して歸らうとした時、自分は今日本を去るに臨んで、たゞ簡單に自分の朋友、ことに自分の指導を受けた學生に、「左樣なら御機嫌よう」といふ一句を殘して行きたいから、それを朝日新聞に書いてくれないかと頼まれた。先生は其外の事を云ふのは厭だといふのである。又いふ必要がないと云ふのである。同時に廣告欄に其文句を出すのも好まないといふのである。私は已を得ないから、こゝに先生の許諾を得て、「さよなら御機嫌よう」の外に、私自身の言葉を蛇足な

から付け加へて、先生の告別の辭が、先生の希望通り、先生の薫陶を受けた多くの人々の眼に留まるやうに取り計らふのである。さうして其多くの人々に代つて、先生に恙なき航海と、穏かな餘生とを、心から祈るのである。

――大正三、八、一二――

戰爭から來た行違ひ

十一日の夜床に着いてから間もなく電話口へ呼び出されて、ケーベル先生が出發を見合すやうになつたといふ報知を受けた。然し其時はもう「告別の辭」を社へ送つてしまつた後なので私は何うする譯にも行かなかつた。先生がまだ横濱の露西亞の總領事の許に泊つてゐて、日本を去る事の出來ないのは、全く今度の戰爭のためと思はれる。從つて私に此正誤を書かせるのも其戰爭である。つまり戰爭が正直な二人を嘘吐にしたのだと云はなければならない。

然し先生の告別の辭は十二日に立つと立たないとで變る譯もなし、私のそれに付け加へた蛇足な文句も、先生の去留によつて其價値に狂ひが出て來る筈もないのだから、我々は書いた事云つた事について取消しをだす必要は固より認めてゐないのである。たゞ「自分の指導を受けた學生によろしく」とあるべきのを、「自分の指導を受けた先生によろしく」と校正が誤つてゐるのゝは是非取り消して置きたい。斯んな間違の起るのも亦校正掛を忙殺する今度の戰爭の罪かも知れない。

――大正三、八、一三――

硝子戸の中

一

硝子戸の中から外を見渡すと、霜除をした芭蕉だの、赤い實の結つた梅もどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのがすぐ眼に着くが、其他に是と云つて數へ立てる程のものは殆ど視線に入つて來ない。書齋にゐる私の眼界は極めて單調でさうして又極めて狹いのである。

其上私は去年の暮から風邪を引いて殆ど表へ出ずに、毎日此硝子戸の中にばかり坐つてゐるので、世間の樣子はちつとも分らない。心持が惡いから讀書もあまりしない。私はたゞ坐つたり寐たりして其日其日を送つてゐる丈である。

然し私の頭は時々動く。氣分も多少は變る。いくら狹い世界の中でも狹いなりに事件が起つて

來る。それから小さい私と廣い世の中とを隔離してゐる此硝子戸の中へ、時々人が入つて來る。それが又私に取つては思ひ掛けない人で、私の思ひ掛けない事を云つたり爲たりする。私は興味に充ちた眼をもつて夫等の人を迎へたり送つたりした事さへある。

私はそんなものを少し書きつゞけて見やうかと思ふ。私はさうした種類の文字が、忙しい人の眼に、どれ程つまらなく映るだらうかと懸念してゐる。私は電車の中でポツケットから新聞を出して、大きな活字丈に眼を注いでゐる購讀者の前に、私の書くやうな閑散な文字を列べて紙面をうづめて見せるのを恥づかしいものゝ一つに考へる。是等の人々は火事や、泥棒や、人殺しや、すべて其日〳〵の出來事のうちで、自分が重大と思ふ事件か、若しくは自分の神經を相當に刺戟し得る辛辣な記事の外には、新聞を手に取る必要を認めてゐない位、時間に餘裕を有たないのだから。——彼等は停留所で電車を待ち合はせる間に、新聞を買つて、電車に乘つてゐる間に、昨日起つた社會の變化を知つて、さうして役所か會社へ行き着くと同時に、ポツケットに收めた新聞紙の事は丸で忘れて仕舞はなければならない程忙しいのだから。

私は今是程切り詰められた時間しか自由に出來ない人達の輕蔑を冒して書くのである。

去年から歐洲では大きな戰爭が始まつてゐる。さうして其戰爭が何時濟むとも見當が付かない模樣である。日本でも其戰爭の一小部分を引受けた。それが濟むと今度は議會が解散になつた。來るべき總選擧は政治界の人々に取つての大切な問題になつてゐる。米が安くなり過ぎた結果農家に金が入らないので、何處でも不景氣だ不景氣だと零してゐる。年中行事で云へば、春の相撲が近くに始まらうとしてゐる。要するに世の中は大變多事である。硝子戸の中に凝と坐つてゐる私なぞは一寸新聞に顔が出せないやうな氣がする。私が書けば政治家や軍人や實業家や相撲狂を押し退けて書く事になる。私丈ではとても夫程の膽力が出て來ない。たゞ春に何か書いて見ろと云はれたから、自分以外にあまり關係のない詰らぬ事を書くのである。それが何時迄つゞくかは、私の筆の都合と、紙面の編輯の都合とできまるのだから、判然した見當は今付きかねる。

二

電話口へ呼び出されたから受話器を耳へあてがつて用事を訊いて見ると、ある雜誌社の男が、私の寫眞を貰ひたいのだが、何時撮りに行つて好いか都合を知らして呉れろといふのである。

私は「寫眞は少し困ります」と答へた。

私は此雜誌と丸で關係を有つて居なかつた。それでも過去三四年の間に其一二冊を手にした記憶はあつた。人の笑つてゐる顔ばかりを澤山載せるのが其特色だと思つた外に、今は何にも頭に殘つてゐない。けれども其處にわざとらしく笑つてゐる顔の多くが私に與へた不快の印象はいまだに消えずにゐた。夫で私は斷らうとしたのである。

雜誌の男は、卯年の正月號だから卯年の人の顔を竝べたいのだといふ希望を述べた。私は先方のいふ通り卯年の生れに相違なかつた。それで私は斯う云つた。——

「あなたの雜誌へ出すために撮る寫眞は笑はなくつては不可いのでせう」

「いえそんな事はありません」と相手はすぐ答へた。恰も私が今迄其雜誌の特色を誤解してゐた如くに。

「當り前の顔で構ひませんなら載せて頂だいても宜しう御座います」

「いえそれで結構で御座いますから、何うぞ」

私は相手と期日の約束をした上、電話を切つた。

中一日置いて打ち合せをした時間に、電話を掛けた男が、綺麗な洋服を着て寫眞機を携へて私の書齋に這入つて來た。私はしばらく其人と彼の從事してゐる雜誌について話をした。それから寫眞を二枚撮つて貰つた。一枚は机の前に坐つたゐる平生の姿、一枚は寒い庭前の霜の上に立つてゐる普通の態度であつた。書齋は光線が能く透らないので、機械を据ゑ付けてからマグネシアを燃した。其火の燃えるすぐ前に、彼は顏を半分ばかり私の方へ出して、「御約束では御座いますが、少し何うか笑つて頂けますまいか」と云つた。私は其時突然微かな滑稽を感じた。然し同時に馬鹿な事をいふ男だといふ氣もした。私は「是で好いでせう」と云つたなり先方の注文には取り合はなかつた。彼が私を庭の木立の前に立たして、レンズを私の方へ向けた時も亦前と同じ樣な鄭寧な調子で、「御約束では御座いますが、少し何うか……」と同じ言葉を繰り返した。私は前よりも猶笑ふ氣になれなかつた。

それから四日ばかり經つと、彼は郵便で私の寫眞を屆けて呉れた。然し其寫眞は正しく彼の注文通りに笑つてゐたのである。其時私は中が外れた人のやうに、しばらく自分の顏を見詰めてゐた。私にはそれが何うしても手を入れて笑つてゐるやうに拵へたものとしか見えなかつたから

である。

私は念のため家へ來る四五人のものに其寫眞を出して見せた。彼等はみんな私と同樣に、何うも作つて笑はせたものらしいといふ鑑定を下した。

私は生れてから今日迄に、人の前で笑ひたくもないのに笑つて見せた經驗が何度となくある。その僞りが今此寫眞師のために復讐を受けたのかも知れない。

彼は氣味のよくない苦笑を洩らしてゐる私の寫眞を送つて呉たけれども、其寫眞を載せると云つた雜誌は遂に屆けなかつた。

三

私がHさんからヘクトーを貰つた時の事を考へると、もう何時の間にか三四年の昔になつてゐる。何だか夢のやうな心持もする。

其時彼はまだ乳離れのした許りの子供であつた。Hさんの御弟子は彼を風呂敷に包んで電車に載せて宅迄連れて來てくれた。私は其夜彼を裏の物置の隅に寢かした。寒くないやうに藁を敷い

て、出來る丈居心地の好い寢床を拵へてやつたあと、私は物置の戸を締めた。すると彼は宵の口から泣き出した。夜中には物置の戸を爪で搔き破つて外へ出ようとした。彼は暗い所にたつた獨り寢るのが淋しかつたのだらう、翌る朝迄まんじりともしない樣子であつた。

此不安は次の晩もつゞいた。其の次の晩もつゞいた。私は一週間餘りかゝつて、彼が與へられた藁の上に漸く安らかに眠るやうになる迄、彼の事が夜になると必ず氣に掛つた。

私の子供は彼を珍らしがつて、間がな隙がな玩弄物にした。けれども名がないのでつひに彼を呼ぶ事が出來なかつた。所が生きたものを相手にする彼等には、是非とも先方の名を呼んで遊ぶ必要があつた。それで彼等は私に向つて犬に名を命けて呉れとせがみ出した。私はとう〳〵ヘクトーといふ偉い名を、此子供達の朋友に與へた。

それはイリアッドに出てくるトロイ一の勇將の名前であつた。トロイと希臘と戰爭をした時、ヘクトーは遂にアキリスの爲に打たれた。アキリスはヘクトーに殺された自分の友達の讐を取つたのである。アキリスが怒つて希臘方から躍り出した時に、城の中に逃げ込まなかつたものはヘクトー一人であつた。ヘクトーは三たびトロイの城壁をめぐつてアキリスの鋒先を避けた。アキ

リスも三たびトロイの城壁をめぐつて其後を追ひ懸けた。さうして仕舞にとう〳〵ヘクトーを槍で突き殺した。それから彼の死骸を自分の軍車に縛り付けて又トロイの城壁を三度引き摺り廻した。……

私は此偉大な名を、風呂敷包にして持て來た小さい犬に與へたのである。何にも知らない筈の宅の子供も、始めは變な名だなあと云つてゐた。然しぢきに慣れた。犬もヘクトーと呼ばれる度に、嬉しさうに尾を振つた。仕舞には流石の名もジョンとかジオージとかいふ平凡な耶蘇教信者の名前と一樣に、毫も古典的な響を私に與へなくなつた。同時に彼は次第に宅のものから元程珍重されないやうになつた。

ヘクトーは多くの犬が大抵罹るチステンパーといふ病氣の爲に一時入院した事がある。其時は子供がよく見舞に行つた。私も見舞に行つた。私の行つた時、彼はさも嬉しさうに尾を振つて、懷かしい眼を私の上に向けた。私はしやがんで私の顏を彼の傍へ持つて行つて、右の手で彼の頭を撫でゝ遣つた。彼は其返禮に私の顏を所嫌はず舐めやうとして已まなかつた。其時彼は私の見てゐる前で、始めて醫者の勸める小量の牛乳を呑んだ。夫迄首を傾げてゐた醫者も、此分なら或

は癒るかも知れないと云つた。ヘクトーは果して癒つた。さうして宅へ歸つて來て、元氣に飛び廻つた。

四

日ならずして、彼は二三の友達を拵へた。其中で最も親しかつたのはすぐ前の醫者の宅に居る彼と同年輩位の惡戲者であつた。是は基督教徒に相應しいジョンといふ名前を持つてゐたが、其性質は異端者のヘクトーよりも遙に劣つてゐたやうである。無暗に人に噛み付く癖があるので、仕舞にはとう〳〵打ち殺されてしまつた。

彼は此惡友を自分の庭に引き入れて勝手な狼藉を働いて私を困らせた。彼等はしきりに樹の根を掘つて用もないのに大きな穴を開けて喜んだ。綺麗な草花の上にわざと寢轉んで、花も莖も容赦なく散らしたり、倒したりした。

ジョンが殺されてから、無聊な彼は夜遊び晝遊びを覺えるやうになつた。散歩抔に出掛る時、私はよく交番の傍に日向ぼつこをしてゐる彼を見る事があつた。それでも宅にさへゐれば、能

くうさん臭いものに吠付いて見せた。其内で最も猛烈に彼の攻擊を受けたのは、本所邊から來る十歳ばかりになる角兵衞獅子の子であつた。此子は何時でも「今日は御祝ひ」と云つて入つて來る。さうして家の者から、麵麭の皮と一錢銅貨を貰はないうちは歸らない事に一人で極めてゐた。だからヘクトーが幾何吠えても逃げ出さなかつた。却てヘクトーの方が、吠えながら尻尾を股の間に挾んで物置の方へ退却するのが例になつてゐた。要するにヘクトーは弱蟲であつた。さうして操行からいふと、殆ど野良犬と擇ぶ所のない程に墮落してゐた。夫でも彼等に共通な人懷つこい愛情は何時迄も失はずにゐた。時々顏を見合せると、彼は必ず尾を掉つて私に飛び付いて來た。或は彼の脊を遠慮なく私の身體に擦り付た。私は彼の泥足の爲に、衣服や外套を汚した事が何度あるか分らない。

去年の夏から秋へ掛けて病氣をした私は、一箇月ばかりの間つひにヘクトーに會ふ機會を得ずに過ぎた。病が漸く怠つて、床の外へ出られる樣になつてから、私は始めて茶の間の緣に立つて彼の姿を宵闇の裡に認めた。私はすぐ彼の名を呼んだ。然し生垣の根に凝とうづくまつてゐる彼は、いくら呼んでも少しも私の情けに應じなかつた。彼は首も動かさず、尾も振らず、たゞ白い

塊のまゝ垣根にこびり付いてる丈であつた。私は一箇月ばかり會はないうちに、彼がもう主人の聲を忘れてしまつたものと思つて、微かな哀愁を感ぜずには居られなかつた。

まだ秋の始めなので、何處の間の雨戸も締められずに、星の光が明放たれた家の中からよく見られる晩であつた。私の立つてゐた茶の間の縁には、家のものが二三人居た。けれども私がヘクトーの名前を呼んでも彼等は振り向きもしなかつた。私がヘクトーに忘れられた如くに、彼等も亦ヘクトーの事を丸で念頭に置いてゐないやうに思はれた。

私は默つて座敷へ歸つて、其處に敷いてある布團の上に横になつた。病後の私は季節に不相當な黑八丈の襟のかゝつた銘仙のどてらを着てゐた。私はそれを脱ぐのが面倒だから、其儘仰向に寐て、手を胸の上で組み合せたなり默つて天井を見詰めてゐた。

五

翌朝書齋の縁に立つて、初秋の庭の面を見渡した時、私は偶然又彼の白い姿を苔の上に認めた。私は昨夕の失望を繰り返すのが厭さに、わざと彼の名を呼ばなかつた。けれども立つたなり凝

と彼の樣子を見守らずにはゐられなかつた。彼は立木の根方に据ゑつけた石の手水鉢の中に首を突き込んで、其處に溜つてゐる雨水をぴちゃ〳〵飲んでゐた。

此手水鉢は何時誰が持つて來たとも知れず、裏庭の隅に轉がつてゐたのを、引越した當時植木屋に命じて今の位置に移させた六角形のもので、其頃は苔が一面に生えて、側面に刻み付けた文字も全く讀めないやうになつてゐた。然し私には移す前一度判然とそれを讀んだ記憶があつた。さうして其記憶が文字として頭に殘らないで、變な感情としていまだに胸の中を往來してゐた。其處には寺と佛と無常の匂ひが漂つてゐた。

ヘクトーは元氣なささうに尻尾を垂れて、私の方へ脊中を向けてゐた。手水鉢を離れた時、私は彼の口から流れる垂涎を見た。

「何うかして遣らないと不可い。病氣だから」と云つて、私は看護婦を顧みた。私は其時まだ看護婦を使つてゐたのである。

私は次の日も木賊の中に寐てゐる彼を一目見た。さうして同じ言葉を看護婦に繰り返した。然しヘクトーは夫以來姿を隱したぎり再び宅へ歸つて來なかつた。

「醫者へ連れて行かうと思つて、探したけれども何處にも居りません」
家のものは斯う云つて私の顏を見た。私は默つてゐた。然し腹の中では彼を貰ひ受けた當時の事さへ思ひ起された。屆書を出す時、種類といふ下へ混血兒と書いたり、色といふ字の下へ赤斑と書いた滑稽も微かに胸に浮んだ。

彼が居なくなつて約一週間も經つたと思ふ頃、一二丁隔つたある人の家から下女が使に來た。其人の庭にある池の中に犬の死骸が浮いてゐるから引き上げて頸輪を改めて見ると、私の家の名前が彫り付けてあつたので、知らせに來たといふのである。下女は「此方で埋めて置きませうか」と尋ねた。私はすぐ車夫を遣つて彼を引き取らせた。

私は下女をわざ〳〵寄こしてくれた宅が何處にあるか知らなかつた。たゞ私の子供の時分から覺えてゐる古い寺の傍だらうと許考へてゐた。それは山鹿素行の墓のある寺で、山門の手前に、舊幕時代の記念のやうに、古い榎が一本立つてゐるのが、私の書齋の北の緣から數多の屋根を越して能く見えた。

車夫は筵の中にヘクトーの死骸を包んで歸つて來た。私はわざとそれに近付かなかつた。白木

の小さい墓標を買つて來さして、それへ「秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ」といふ一句を書いた。私はそれを家のものに渡して、ヘクトーの眠つてゐる土の上に建てさせた。彼の墓は猫の墓から東北に當つて、ほゞ一間ばかり離れてゐるが、私の書齋の、寒い日の照ない北側の緣に出て、硝子戸のうちから、霜に荒された裏庭を覗くと、二つとも能く見える。もう薄黑く朽ち掛けた猫のに比べると、ヘクトーのはまだ生々しく光つてゐる。然し間もなく二つとも同じ色に古びて、同じく人の眼に付かなくなるだらう。

六

私は其女に前後四五回會つた。

始めて訪ねられた時私は留守であつた。取次のものが紹介狀を持つて來るやうに注意したら、彼女は別にそんなものを貰ふ所がないといつて歸つて行つたさうである。

それから一日程經つて、女は手紙で直接に私の都合を聞き合せに來た。其手紙の封筒から、私は女がつい眼と鼻の間に住んでゐる事を知つた。私はすぐ返事を書いて面會日を指定して遣つた。

女は約束の時間を違へず來た。三つ柏の紋のついた派出な色の縮緬の羽織を着てゐるのが、一番先に私の眼に映つた。女は私の書いたものを大抵讀んでゐるらしかつた。それで話は多くそちらの方面へばかり延びて行つた。然し自分の著作に就いて初見の人から贊辭ばかり受けてゐるのは、有難いやうで甚だこそばゆいものである。實をいふと私は辟易した。

一週間置いて女は再び來た。さうして私の作物をまた賞めて呉れた。けれども私の心は寧ろさういふ話題を避けたがつてゐた。三度目に來た時、女は何かに感激したものと見えて、袂から手巾を出して、しきりに涙を拭つた。さうして私に自分の是迄經過して來た悲しい歴史を書いてくれないかと頼んだ。然し其話を聽かない私には何といふ返事も與へられなかつた。私は女に向つて、よし書くにした所で迷惑を感ずる人が出て來はしないかと訊いて見た。女は存外判然した口調で、實名さへ、出さなければ構はないと答へた。それで私はとにかく彼女の經歴を聽くために、とくに時間を拵へた。

すると其日になつて、女は私に會ひたいといふ別の人を連れて來て、例の話は此次に延ばして貰ひたいと云つた。私には固より彼女の違約を責める氣はなかつた。二人を相手に世間話をして

別れた。

彼女が最後に私の書齋に坐つたのは其次の日の晩であつた。彼女は自分の前に置かれた桐の手焙の灰を、眞鍮の火箸で突ツつきながら、悲しい身の上話を始める前、默つてゐる私に斯う云つた。

「此間は昂奮して私の事を書いて頂きたいやうに申し上げましたが、それは止めに致します。たゞ先生に聞いて頂く丈にして置きますから、何うか其御積で……」

私はそれに對して斯う答へた。

「あなたの許諾を得ない以上は、たとひどんなに書きたい事柄が出て來ても決して書く氣遣ひはありませんから御安心なさい」

私が十分な保證を女に與へたので、女はそれではと云つて、彼女の七八年前からの經歴を話し始めた。私は默然として女の顔を見守つてゐた。然し女は多く眼を伏せて火鉢の中ばかり眺めてゐた。さうして綺麗な指で、眞鍮の火箸を握つては、灰の中へ突き刺した。

時々膝に落ちない所が出てくると、私は女に向つて短かい質問を掛けた。女は單簡に又私の

納得出來るやうに答をした。然し大抵は自分一人で口を利いてゐたので、私は寧ろ木像のやうに凝としてゐる丈であつた。

やがて女の頰は熱つて赤くなつた。白粉をつけてゐない所爲か、その熱つた頰の色が著しく私の眼に着いた。俯向きになつてゐるので、澤山ある黑い髪の毛も自然私の注意を惹く種になつた。

七

女の告白は聽いてゐる私を息苦しくした位に悲痛を極めたものであつた。彼女は私に向つて斯んな質問を掛けた。——

「もし先生が小說を御書きになる場合には、其女の始末を何うなさいますか」

私は返答に窮した。

「女の死ぬ方が宜いと御思ひになりますか、それとも生きてゐるやうに御書きになりますか」

私は何方にでも書けると答へて、暗に女の氣色をうかゞつた。女はもつと判然した挨拶を私から要求するやうに見えた。私は仕方なしに斯う答へた。——

「生きるといふ事を人間の中心點として考へれば、其儘にして居て差支ないでせう。然し美しいものや氣高いものを一義に置いて人間を評價すれば、問題が違つて來るかも知れません」

「先生はどちらを御擇びになりますか」

私は又躊躇した。默つて女のいふ事を聞いてゐるより外に仕方がなかつた。

「私は今持つてゐる此美しい心持が、時間といふものゝ爲に段々薄れて行のが怖くつて堪らないのです。此記憶が消えてしまつて、たゞ漫然と魂の拔殼のやうに生きてゐる未來を想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくつて堪らないのです」

私は女が今廣い世間の中にたつた一人立つて、一寸も身動きの出來ない位置にゐる事を知つてゐた。さうして夫が私の力で何うする譯にも行かない程に、せつば詰まつた境遇である事も知つてゐた。私は手の付けやうのない人の苦痛を傍觀する位置に立たせられて凝としてゐた。

私は服藥の時間を計るため、客の前も憚らず常に袂時計を座蒲團の傍に置く癖を有つてゐた。

「もう十一時だから御歸りなさい」と私は仕舞に女に云つた。女は厭な顏もせずに立上つた。

私は又「夜が更けたから送つて行つて上げませう」と云つて、女と共に沓脱に下りた。

其時美しい月が靜かな夜を殘る隈なく照してゐた。往來へ出ると、ひつそりした土の上にひゞく下駄の音は丸で聞こえなかつた。私は懷手をした儘帽子も被らずに、女の後に跟いて行つた。曲り角の所で女は一寸會釋して、「先生に送つて頂いては勿體なう御座います」と云つた。「勿體ない譯がありません。同じ人間です」と私は答へた。

次の曲角へ來たとき女は「先生に送つて頂くのは光榮で御座います」と又云つた。私は「本當に光榮と思ひますか」と眞面目に尋ねた。女は簡單に「思ひます」とはつきり答へた。私は「そんなら死なずに生きて居らつしやい」と云つた。私は女が此言葉を何う解釋したか知らない。

私はそれから一丁ばかり行つて、又宅の方へ引き返したのである。

むせつぽいやうな苦しい話を聞かされた私は、其夜却て人間らしい好い心持を久し振に經驗した。さうしてそれが尊い文藝上の作物を讀んだあとの氣分と同じものだといふ事に氣が付いた。有樂座や帝劇へ行つて得意になつてゐた自分の過去の影法師が何となく淺ましく感ぜられた。

八

不愉快に充ちた人生をとぼ〳〵辿りつゝある私は、自分の何時か一度到着しなければならない死といふ境地に就いて常に考へてゐる。さうして其死といふものを生よりは樂なものだとばかり信じてゐる。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の狀態だと思ふ事もある。

「死は生よりも尊とい」

斯ういふ言葉が近頃では絶えず私の胸を往來するやうになつた。

然し現在の私は今まのあたりに生きてゐる。私の父母、私の祖父母、私の曾祖父母、それから順次に遡ぼつて、百年、二百年、乃至千年萬年の間に馴致された習慣を、私一代で解脱する事が出來ないので、私は依然として此生に執着してゐるのである。

だから私の他に與へる助言は何うしても此生の許す範圍内に於てしなければ濟まない樣に思ふ。何ういふ風に生きて行くかといふ狹い區域の中でばかり、私は人類の一人として他の人類の一人に向はなければならないと思ふ。既に生の中に活動する自分を認め、又其の生の中に呼吸する他

人を認める以上は、互の根本義は如何に苦しくても如何に醜くても此生の上に置かれたものと解釋するのが當り前であるから。

「もし生きてゐるのが苦痛なら死んだら好いでせう」

斯うした言葉は、どんなに情なく世を觀ずる人の口からも聞き得ないだらう。醫者などは安らかな眠に赴かうとする病人に、わざと注射の針を立てゝ患者の苦痛を一刻でも延ばす工夫を凝らしてゐる。こんな拷問に近い所作が、人間の德義として許されてゐるのを見ても、如何に根强く我々が生の一字に執着してゐるかゞ解る。私はつひに其人に死をすゝめる事が出來なかつた。

其人はとても回復の見込みのつかない程深く自分の胸を傷けられてゐた。同時に其傷が普通の人の經驗にないやうな美しい思ひ出の種となつて其人の面を輝かしてゐた。

彼女はその美しいものを寶石の如く大事に永久彼女の胸の奥に抱き締めてゐたがつた。不幸にして、その美しいものは取も直さず彼女を死以上に苦しめる手傷其物であつた。二つの物は紙の裏表の如く到底引き離せないのである。

私は彼女に向つて、凡てを癒す「時」の流れに從つて下れと云つた。彼女は若しさうしたら此

大切な記憶が次第に剝げて行くだらうと嘆いた。

公平な「時」は大事な寶物を彼女の手から奪ふ代りに、其傷口も次第に療治して呉れるのである。烈しい生の歡喜を夢のやうに暈してしまふと同時に、今の歡喜に伴ふ生々しい苦痛も取り除ける手段を怠らないのである。

私は深い戀愛に根ざしてゐる熱烈な記憶を取り上げても、彼女の創口から滴る血潮を「時」に拭はしめようとした。いくら平凡でも生きて行く方が死ぬよりも私から見た彼女には適當だつたからである。

斯くして常に生よりも死を尊いと信じてゐる私の希望と助言は、遂に此不愉快に充ちた生といふものを超越する事が出來なかつた。しかも私にはそれが實行上に於る自分を、凡庸な自然主義者として證據立てたやうに見えてならなかつた。私は今でも半信半疑の眼で凝と自分の心を眺めてゐる。

九

私が高等學校にゐた頃、比較的親しく交際つた友達の中にOといふ人がゐた。其時分から餘り多くの朋友を持たなかつた私には、自然Oと往來を繁くするような傾向があつた。私は大抵一週に一度位の割で彼を訪ねた。ある年の暑中休暇などには、毎日缺かさず眞砂町に下宿してゐる彼を誘つて、大川の水泳場迄行つた。

Oは東北の人だから、口の利き方に私などゝ違つた鈍でゆつたりした調子があつた。さうして其調子が如何にも能く彼の性質を代表してゐるやうに思はれた。何度となく彼と議論をした記憶のある私は、遂に彼の怒つたり激したりする顏を見る事が出來ずにしまつた。私はそれ丈でも充分彼を敬愛に價する長者として認めてゐた。

彼の性質が鷹揚である如く、彼の頭腦も私よりは遙に大きかつた。彼は常に當時の私には、考への及ばないやうな問題を一人で考へてゐた。彼は最初から理科へ入る目的を有てゐながら、好んで哲學の書物などを繙いた。私はある時彼からスペンサーの第一原理といふ本を借りた事を未だに忘れずにゐる。

空の澄み切つた秋日和などには、能く二人連れ立つて、足の向く方へ勝手な話をしながら歩い

て行つた。さうした場合には、往來へ塀越に差し出た樹の枝から、黃色に染まつた小さい葉が、風もないのに、はら〳〵と散る景色を能く見た。それが偶然彼の眼に觸れた時、彼は「あッ悟つた」と低い聲で叫んだ事があつた。唯秋の色の空に動くのを美しいと觀ずるより外に能のない私には、彼の言葉が封じ込められた或祕密の符徵として怪しい響を耳に傳へるばかりであつた。

「悟りといふものは妙なものだな」と彼は其後から平生のゆつたりした調子で獨言のやうに說明した時も、私には一口の挨拶も出來なかつた。

彼は貧生であつた。大觀音の傍に間借をして自炊してゐた頃には、よく干鮭を燒いて侘びしい食卓に私を着かせた。ある時は餅菓子の代りに煮豆を買つて來て、竹の皮の儘雙方から突つ付き合つた。

大學を卒業すると間もなく彼は地方の中學に赴任した。私は彼のためにそれを殘念に思つた。然し彼を知らない大學の先生には、それが寧ろ當然と見えたかも知れない。彼自身は無論平氣であつた。それから何年かの後に、たしか三年の契約で、支那のある學校の敎師に雇はれて行つたが、任期が充ちて歸るとすぐ又內地の中學校長になつた。それも秋田から橫手に遷されて、今で

は樺太の校長をしてゐるのである。

去年上京した序に久し振で私を訪ねてくれた時、取次のものから名刺を受取つた私は、すぐ其足で座敷へ行つて、いつもの通り客より先に席に着いてゐた。すると廊下傳ひに室の入口迄來た彼は、座蒲團の上にきちんと坐つてゐる私の姿を見るや否や、「いやに澄ましてゐるな」と云つた。

其時向の言葉が終るか終らないうちに「うん」といふ返事が何時か私の口を滑つて出てしまつた。何うして私の惡口を自分で肯定するやうな此挨拶が、それ程自然に、それ程雜作なく、それ程拘泥はらずに、する〳〵と私の咽喉を滑り越したものだらうか。私は其時透明な好い心持がした。

十

向ひ合つて座を占めたOと私とは、何より先に互の顏を見返して、其所にまだ昔しの儘の面影が、懷かしい夢の記念のやうに殘つてゐるのを認めた。然しそれは恰も古い心が新しい氣分の中

にぼんやり織り込まれてゐると同じ事で、薄暗く一面に霞んでゐた。恐ろしい「時」の威力に抵抗して、再び故の姿に返る事は、二人に取つてもう不可能であつた。二人は別れてから今會ふ迄の間に挾まつてゐる過去といふ不思議なものを顧みない譯に行かなかつた。

Oは昔し林檎のやうに赤い頰と、人一倍大きな丸い眼と、それから女に適した程ふつくりした輪廓に包まれた顏を有つてゐた。今見ても矢張り赤い頰と丸い眼と、同じく骨張らない輪廓の持主ではあるが、それが昔とは何處か違つてゐる。

私は彼に私の口髭と揉み上げを見せた。彼は又私の爲めに自分の頭を撫でて見せた。私のは白くなつて、彼のは薄く禿げかゝつてゐるのである。

「人間も樺太迄行けば、もう行く先きはなからうな」と私が調戯ふと、彼は「まあ其んなものだ」と答へて、私のまだ見た事のない樺太の話を色々して聞かせた。然し私は今それをみんな忘れて仕舞つた。夏は大變好い所だといふ事を覺えてゐる丈である。

私は幾年ぶりかで、彼と一所に表へ出た。彼はフロックの上へ、とんびのやうな外套をぶわぶわに着てゐた。さうして電車の中で釣革にぶら下りながら、隱袋から手帛に包んだものを出して

私に見せた。私は「なんだ」と訊いた。彼は「栗饅頭だ」と答へた。栗饅頭は先刻彼が私の宅にゐた時に出した菓子であつた。彼が何時の間に、それを手帛に包んだらうかと考へた時、私は一寸驚かされた。

「あの栗饅頭を取つて來たのか」

「さうかも知れない」

彼は私の驚いた樣子を馬鹿にするやうな調子で斯う云つたなり、その手帛の包を又隱袋に收めてしまつた。

我々は其晩帝劇へ行つた。私の手に入れた二枚の切符に北側から入れといふ注意が書いてあつたのを、つい間違へて、南側へ廻らうとした時、彼は「其方ぢやないよ」と私に注意した。私は一寸立ち留まつて考へた上、「成程方角は樺太の方が確なやうだ」と云ひながら、又指定された入口の方へ引き返した。

彼は始めから帝劇を知つてゐると云つてゐた。然し晩餐を濟ました後で、自分の席へ歸らうとするとき、誰でも遣る通り、二階と一階の扉を間違へて、私から笑はれた。

折々隱袋から金緣の眼鏡を出して、手に持つた摺物を讀んで見る彼は、其眼鏡を除さずに遠い舞臺を平氣で眺めてゐた。

「それは老眼鏡ぢやないか。よくそれで遠い所が見えるね」

「なにチヤブドーだ」

私には此チヤブドーといふ意味が全く解らなかつた。彼はそれを大差なしといふ支那語だと云つて說明して呉れた。

其夜の歸りに電車の中で私と別れたぎり、彼は又遠い寒い日本の領地の北の端れに行つてしまつた。

私は彼を想ひ出すたびに、達人といふ彼の名を考へる。すると其名がとくに彼のために天から與へられたやうな心持になる。さうして其達人が雪と氷に鎖ざされた北の果に、まだ中學校長をしてゐるのだなと思ふ。

十一

ある奥さんがある女の人を私に紹介した。

「何か書いたものを見て頂きたいのださうで御座います」

私は奥さんの此言葉から、頭の中で色々の事を考へさせられた。今迄私の所へ自分の書いたものを讀んで呉れと云つて來た者は何人となくある。其中には原稿紙の厚さで一寸、又は二寸位の嵩になる大部のものも交つてゐた。それを私は時間の都合の許す限り成るべく讀んだ。さうして簡單な私はたゞ讀みさへすれば自分の頼まれた義務を果したものと心得て滿足してゐた。所が先方では後から新聞に出して呉れと云つたり、雜誌へ載せて貰ひたいと頼んだりするのが常であつた。中には他に讀ませるのは手段で、原稿を金に換へるのが本來の目的であるやうに思はれるのも少くはなかつた。私は知らない人の書いた讀みにくい原稿を好意的に讀むのが段々厭になつて來た。

尤も私の時間に教師をしてゐた頃から見ると、多少の彈力性が出來てきたには相違なかつた。夫でも自分の仕事にかゝれば腹の中は隨分多忙であつた。親切づくで見て遣らうと約束した原稿すら、中々埒のあかない場合もないとは限らなかつた。

私は私の頭で考へた通りの事を其儘奥さんに話した。奥さんはよく私のいふ意味を領解して歸つて行つた。約束の女が私の座敷へ來て、座蒲團の上に坐つたのは夫から間もなくであつた。侘びしい雨が今にも降り出しさうな暗い空を、硝子戸越に眺めながら、私は女に斯んな話をした。

――

「是は社交ではありません。御互に體裁の好い事ばかり云ひ合つてゐては、何時迄經つたつて、啓發される筈も、利益を受ける譯もないのです。貴女は思ひ切つて正直にならなければ駄目ですよ。自分さへ十分に開放して見せれば、今貴女が何處に立つて何方を向いてゐるかといふ實際が、私に能く見えて來るのです。さうした時、私は始めて貴方を指導する資格を、貴方から與へられたものと自覺しても宜しいのです。だから私が何か云つたら、腹に答へべき或物を持つてゐる以上、決して默つてゐては不可せん。こんな事を云つたら笑はれはしまいか、恥を搔きはしまいか、又は失禮だといつて怒られはしまいかなどと遠慮して、相手に自分といふ正體を黑く塗り潰した所ばかり示す工夫をするならば、私がいくら貴方に利益を與へやうと焦慮ても、私の射る矢は悉く空矢になつて仕舞ふ丈です。

「是れは私の貴方に對する注文ですが、其代り私の方でも此私といふものを隱しは致しません。有の儘を曝け出すより外に、あなたを敎へる途はないのです。だから私の考への何處かに隙があつて、其隙をもし貴方から見破られたら、私は貴方に私の弱點を握られたといふ意味で敗北の結果に陷るのです。敎を受ける人丈が自分を開放する義務を有つてゐると思ふのは間違つてゐます。敎へる人も己れを貴方の前に打ち明けるのです。雙方とも社交を離れて勘破し合ふのです。

「さういふ譯で私は是から貴方の書いたものを拜見する時に、隨分手ひどい事を思ひ切つて云ふかも知れませんが、然し怒つては不可せん。貴方の感情を害する爲にいふのではないのですから。其代り貴方の方でも腑に落ちない所があつたら何處迄も切り込んで入らつしやい。貴方が私の主意を了解してゐる以上、私は決して怒る筈はありませんから。

「要するに是はたゞ現狀維持を目的として、上滑りな圓滑を主位に置く社交とは全く別物なのです。解りましたか」

女は解つたと云つて歸つて行つた。

十二

私に短冊を書けの、詩を書けのと云つて來る人がある。さうして其短冊やら絖やらをまだ承諾もしないうちに送つて來る。最初のうちは折角の希望を無にするのも氣の毒だといふ考へから、拙い字とは思ひながら、先方の云ふなりになつて書いてゐた。けれども斯うした好意は永續しにくいものと見えて、段々多くの人の依頼を無にするやうな傾向が強くなつて來た。

私は凡ての人間を、毎日々々恥を掻く爲に生れてきたものだとさへ考へる事もあるのだから、變な字を他に送つてやる位の所作は、敢てしやうと思へば、遣れないとも限らないのである。然し自分が病氣のとき、仕事の忙しい時、又はそんな眞似のしたくない時に、さういふ注文が引き續いて起つてくると、實際弱らせられる。彼等の多くは全く私の知らない人で、さうして自分達の送つた短冊を再び送り返す此方の手數さへ、丸で眼中に置いてゐないやうに見えるのだから。

其うちで一番私を不愉快にしたのは播州の坂越にゐる岩崎といふ人であつた。此人は數年前よく端書で私に俳句を書いてくれと賴んで來たから、其都度向ふのいふ通り書いて送つた記憶の

ある男である。其後の事であるが、彼は又四角な薄い小包を私に送つた。私はそれを開けるのさへ面倒だつたから、つい其儘にして書齋へ放り出して置いたら、下女が掃除をする時、つい書物と書物の間へ挾み込んで、まづ體よく仕舞失くした姿にしてしまつた。

此小包と前後して名古屋から茶の罐が私宛で屆いた。然し誰が何の爲に送つたものか其意味は全く解らなかつた。私は遠慮なく其茶を飲んでしまつた。すると程なく坂越の男から、富士登山の畫を返してくれと云つてきた。彼からそんなものを貰つた覺のない私は、打ち遣つて置いた。然し彼は富士登山の畫を返せ〳〵と三度も四度も催促して已まない。私はついに此男の精神狀態を疑ひ出した。「大方氣違だらう。」私は心の中で斯う極めたなり向ふの催促には一切取合はない事にした。

それから二三箇月經つた。たしか夏の初の頃と記憶してゐるが、私はあまり亂雜に取り散らされた書齋の中に坐つてゐるのが鬱陶敷なつたので、一人でぼつ〳〵其處いらを片付け始めた。其時書物の整理をするため、好い加減に積み重ねてある字引や參考書を、一冊づゝ改めて行くと、思ひ掛けなく坂越の男が寄こした例の小包が出て來た。私は今迄忘れてゐたものを、眼のあたり

見て驚いた。早速封を解いて中を檢べたら、小さく疊んだ畫が一枚入つてゐた。それが富士登山の圖だつたので、私は又喫驚した。

包みのなかには此畫の外に手紙が一通添へてあつて、それに畫の贊をして呉れといふ依頼と、御禮に茶を送るといふ文句が書いてあつた。私は愈驚いた。

然し其時の私は到底富士登山の圖などに贊をする勇氣を有つてゐなかつた。私の氣分が、そんな事とは遙か懸け離れた所にあつたので、其畫に調和するやうな俳句を考へてゐる暇がなかつたのである。けれども私は恐縮した。私は丁寧な手紙を書いて、自分の怠慢を謝した。それから茶の御禮を云つた。最後に富士登山の圖を小包にして返した。

十三

私は是れで一段落付いたものと思つて、例の坂越の男の事を、それぎり念頭に置かなかつた。すると其男が又短冊を封じて寄こした。さうして今度は義士に關係のある句を書いてくれといふのである。私は其内書かうと云つて遣つた。然し中々書く機會が來なかつたので、つひ其儘にな

つてしまつた。けれども執濃い此男の方では決して其儘に濟ます氣はなかつたものと見えて、無暗に催促を始め出した。其催足は一週に一遍か、二週に一遍の割で屹度來た。それが必ず端書に限つてゐて、其書き出しには、必ず「拜啓失敬申し候へども」とあるに極つてゐた。私は其人の端書を見るのが段々不愉快になつて來た。

同時に向ふの催促も、今迄私の豫期してゐなかつた變な特色を帶びるやうになつた。最初には茶を遣つたではないかといふ言葉が見えた。私がそれに取り合はずにゐると、今度はあの茶を返してくれといふ文句に改まつた。私は返す事は容易いが、其手數が面倒だから、東京迄取りに來れば返して遣ると云つてやりたかつた。けれども坂越の男にさういふ手紙を出すのは、自分の品格に關はるやうな氣がして敢てし切れなかつた。返事を受け取らない先方は猶の事催促をした。茶を返さないならそれでも好いから、金一圓を其代價として送つて寄せといふのである。私の感情は此男に對して次第に荒んで來た。仕舞にはとう〳〵自分を忘れるやうになつた。茶は飲んでしまつた、短冊は失くして仕舞つた、以來端書を寄こす事は一切無用であると書いて遣つた。さうして心のうちで、非常に苦々しい氣分を經驗した。こんな非紳士的な挨拶をしなければならな

い樣な穴の中へ、私を追ひ込んだのは、此坂越の男であると思つたからである。こんな男の爲めに、品格にもせよ人格にもせよ、幾分の墮落を忍ばなければならないのかと考へると情なかつたからである。

然し坂越の男は平氣であつた。茶は飲んでしまひ、短冊は失くしてしまふとは、餘りと申せば……と又端書に書いて來た。さうして其冒頭には依然として拜啓失敬申しゐへどもといふ文句が規則通り繰り返されてゐた。

其時私はもう此男には取り合ふまいと決心した。けれども私の決心は彼の態度に對して何の效果のある筈はなかつた。彼は相變らず催促をやめなかつた。さうして今度は、もう一度書いて呉れゝば、また茶を送つてやるが何うだと云つて來た。それから事苟くも義士に關するのだから、句を作つても好いだらうと云つて來た。

しばらく端書が中絶したと思ふと、今度はそれが封書に變つた。尤も其封筒は區役所などで使ふ極めて安い鼠色のものであつたが、彼はわざとそれに切手を貼らないのである。其代り裏に自分の姓名も書かずに投函してゐた。私はそれが爲に、倍の郵税を二度程拂はせられた。最後に

私は配達夫に彼の氏名と住所とを教へて、封のまゝ先方へ逆送して貰つた。彼はそれで六錢取られた所爲か、漸く催促を斷念したらしい態度になつた。

所が二箇月ばかり經つて、年が改まると共に、彼は私に普通の年始狀を寄こした。それが私を一寸感心させたので、私はつひ短冊へ句を書いて送る氣になつた。然し其贈物は彼を滿足させるに足りなかつた。彼は短冊が折れたとか、汚れたとか云つて、しきりに書き直しを請求して已まない。現に今年の正月にも、「失敬申しゆへども……」といふ依頼狀が七八日頃に屆いた。

私がこんな人に出會つたのは生れて始めてである。

十四

つい此間昔私の家へ泥棒の入つた時の話を比較的詳しく聞いた。

姉がまだ二人とも嫁づかずにゐた時分の事だといふから、年代にすると、多分私の生れる前後に當るのだらう、何しろ勤王とか佐幕とかいふ荒々しい言葉の流行た八釜しい頃なのである。

ある夜一番目の姉が、夜中に小用に起きた後、手を洗ふために、潜戸を開けると、狹い中庭の

隅に、壁を壓し付ける樣な勢ひで立つてゐる梅の古木の根方が、赫と明るく見えた。姉は思慮をめぐらす暇もないうちに、すぐ潜戸を締めてしまつたが、締めたあとで、今目前に見た不思議な明るさを其處に立ちながら考へたのである。

私の幼心に映つた此姉の顏は、いまだに思ひ起さうとすれば、何時でも眼の前に浮ぶ位鮮かである。然し其幻像は既に嫁に行つて齒を染めたあとの姿であるから、其時緣側に立つて考へてゐた娘盛りの彼女を、今胸のうちに描き出す事は一寸困難である。

廣い額、淺黑い皮膚、小さいけれども明確した輪廓を具へてゐる鼻、人並より大きい二重瞼の眼、それからお澤といふ優しい名、――私はたゞ是等を綜合して、其場合に於る姉の姿を想像する丈である。

少時立つた儘考へてゐた彼女の頭に、此時もしかすると火事ぢやないかといふ懸念が起つた。それで彼女は思ひ切つて又切戸を開けて外を覗かうとする途端に、一本の光る拔身が、闇の中から、四角に切つた潜戸の中へすうと出た。姉は驚いて身を後へ退いた。其隙に、覆面をした、龕燈提灯を提げた男が、拔刀のまゝ、小さい潜戸から大勢家の中へ入つて來たのださうである。泥

棒の人數はたしか八人とか聞いた。

彼等は、他を殺める爲に來たのではないから、大人しくして居て呉れさへすれば、家のものに危害は加へない、其代り軍用金を借せと云つて、父に迫つた。父はないと斷つた。然し泥棒は却却承知しなかつた。今角の小倉屋といふ酒屋へ入つて、其處で敎へられて來たのだから隱しても駄目だと云つて動かなかつた。父は不精無性に、とう〳〵何枚かの小判を彼等の前に並べた。彼等は金額があまり少な過ぎると思つたものか、それでも却々歸らうとしないので、今迄床の中に寢てゐた母が、「貴方の紙入に入つてゐるのも遣つて御仕舞なさい」と忠告した。其紙入の中には五十兩ばかりあつたとかいふ話である。泥棒が出て行つたあとで、「餘計な事をいふ女だ」と云つて、父は母を叱り付けたさうである。

その事があつて以來、私の家では柱を切り組にして、其中へあり金を隱す方法を講じたが、隱す程の財產も出來ず、又黑裝束を着けた泥棒も、それぎり來ないので、私の生長する時分には、どれが切組にしてある柱か丸で分らなくなつてゐた。

泥棒が出て行く時、「此家は大變締りの好い宅だ」と云つて賞めたさうだが、其締りの好い家を

泥棒に敎へた小倉屋の半兵衞さんの頭には、あくる日から擦り傷がいくつとなく出來た。是は金はありませんと斷る度に、泥棒がそんな筈があるものかと云つては、拔身の先でちよい〳〵半兵衞さんの頭を突ツついたからだといふ。それでも半兵衞さんは、「どうしても宅にはありません、裏の夏目さんには澤山あるから、あすこへ入らつしやい」と强情を張り通して、とう〳〵金は一文も奪られずにしまつた。

私は此話を妻から聞いた。妻は又それを私の兄から茶受話に聞いたのである。

十五

私が去年の十一月學習院で講演をしたら、薄謝と書いた紙包を後から屆けてくれた。立派な水引が掛つてゐるので、それを除して中を改めると、五圓札が二枚入つてゐた。私は其金を平生から氣の毒に思つてゐた。或懇意な藝術家に贈らうかしらと思つて、暗に彼の來るのを待ち受けてゐた。所が其藝術家がまだ見えない先に、何か寄附の必要が出來てきたりして、つい二枚とも消費してしまつた。

一口でいふと、此金は私に取て決して無用なものではなかつたのである。世間の通り相場で、立派に私の爲に消費されたといふより外に仕方がないのである。けれどもそれを他に遣らうと迄思つた私の主觀から見れば、そんなに有難味の附着してゐない金には相違なかつたのである。打明けた私の心持をいふと、斯うした御禮を受けるより受けない時の方が餘程颯爽してゐた。

畔柳芥舟君が樗牛會の講演の事で見えた時、私は話の序として一通り其理由を述べた。

「此場合私は勞力を賣りに行つたのではない。好意づくで依頼に應じたのだから、向ふでも好意丈で私に酬いたらよからうと思ふ。もし報酬問題とする氣なら、最初から御禮はいくらするが、來て呉れるか何うかと相談すべき筈でせう」

其時K君は納得出來ないといつたやうな顏をした。さうして斯う答へた。

「然し何うでせう。其十圓は貴方の勞力を買つたといふ意味でなくつて、貴方に對する感謝の意を表する一つの手段と見たら。さう見る譯には行かないのですか」

「品物なら判然さう解釋も出來るのですが、不幸にも御禮が普通營業的の賣買に使用する金なのですから、何方とも取れるのです」

「何方とも取れるなら、此際善意の方に解釋した方が好くはないでせうか」

私は尤もだとも思つた。然し又斯う答へた。

「私は御存じの通り原稿料で衣食してゐる位ですから、無論富裕とは云へません。然し何うか斯うか、それ丈で今日を過ごして行かれるのです。だから自分の職業以外の事に掛けては、成るべく好意的に人の爲に働いてやりたいといふ考へを持つてゐます。さうして其好意が先方に通じるのが、私に取つては、何よりも尊い報酬なのです。從つて金などを受けると、私が人の爲に働いてやるといふ餘地、――今の私には此餘地がまた極めて狹いのです。――其貴重な餘地を腐蝕させられたやうな心持になります」

K君はまだ私の云ふ事を肯はない樣子であつた。私も强情であつた。

「もし岩崎とか三井とかいふ大富豪に講演を頼むとした場合に、後から十圓の御禮を持つて行くでせうか、或は失禮だからと云つて、たゞ挨拶丈にとゞめて置くでせうか。私の考へでは恐らく金錢は持つて行くまいと思ふのですが」

「さあ」といつた丈でK君は判然した返事を與へなかつた。私にはまだ云ふ事が少し殘つてゐ

た。

「己惚かは知りませんが、私の頭は三井岩崎に比べる程富んでゐないにしても、一般學生よりはずつと金持に違ひないと信じてゐます」

「さうですとも」とK君は首肯いた。

「もし岩崎や三井に十圓の御禮を持つて行く事が失禮ならば、私の所へ十圓の御禮を持つて來るのも失禮でせう。それも其十圓が物質上私の生活に非常な潤澤を與へるなら、また外の意味から此問題を眺める事も出來るでせうが、現に私はそれを他に遣らうと迄思つたのだから。――私の現下の經濟的生活は、此十圓のために、殆ど目に立つ程の影響を蒙らないのだから」

「よく考へて見ませう」と云たK君はにや〳〵笑ひながら歸つて行つた。

十六

宅の前のだら〳〵坂を下りると、一間ばかりの小川に渡した橋があつて、其橋向ふのすぐ左側に、小さな床屋が見える。私はたつた一度其處で髪を刈つて貰つた事がある。

平生は白い金巾の幕で、硝子戸の奥が、往來から見えないやうにしてあるので、私は其床屋の土間に立つて、鏡の前に座を占める迄、亭主の顏を丸で知らずにゐた。

亭主は私の入つてくるのを見ると、手に持つた新聞紙を放り出してすぐ挨拶をした。其時私は何うも何處かで會つた事のある男に違ひないといふ氣がしてならなかつた。それで彼が私の後へ廻つて、鋏をちよき〳〵鳴らし出した頃を見計らつて、此方から話を持ち掛けて見た。すると私の推察通り、彼は昔し寺町の郵便局の傍に店を持て、今と同じやうに、散髪を渡世としてゐた事が解つた。

「高田の旦那などにも大分御世話になりました」

其高田といふのは私の從兄なのだから、私も驚いた。

「へえ高田を知つてるのかい」

「知つてる所ぢや御座いません。始終德、德、つて贔屓にして下すつたもんです」

彼の言葉遣ひはかういふ職人にしては寧ろ丁寧な方であつた。

「高田も死んだよ」と私がいふと、彼は吃驚した調子で「へッ」と聲を揚げた。

「いゝ旦那でしたがね、惜しい事に。何時頃御亡くなりになりました」
「なに、つい此間さ。今日で二週間になるか、ならない位のものだらう」
彼はそれから此死んだ従兄に就いて色々覺えてゐる事を私に語つた末、「考へると早いもんですね旦那、つい昨日の事としつきや思はれないのに、もう三十年近くにもなるんですから」と云つた。
「あのそら求友亭の横町に居らしつてね、……」と亭主は又言葉を繼ぎ足した。
「うん、あの二階のある家だらう」
「えゝ御二階がありましたつけ。あすこへ御移りになつた時なんか、方々様から御祝物なんかあつて、大變御盛でしたがね。それから後でしたつけか、行願寺の寺内へ御引越なすつたのは」
此質問は私にも答へられなかつた。實は餘り古い事なので、私もつい忘れてしまつたのである。
「あの寺内も今ぢや大變變つた様だね。用がないので、それからつい入つて見た事もないが」
「變つたの變らないのつて貴方、今ぢや丸で待合ばかりでさあ」
私は看町を通るたびに、其寺内へ入る足袋屋の角の細い小路の入口に、どた〳〵掲げられた四

角な軒燈の多いのを知つてゐた。然し其數を勘定して見る程の道樂氣も起らなかつたので、つい亭主のいふ事には氣が付ずにゐた。
「成程さう云へば誰が袖なんて看板が通りから見えるやうだね」
「えゝ澤山出來ましたよ。尤も變る筈ですね、考へて見ると。もうやがて卅年にもならうと云ふんですから。旦那も御承知の通り、あの時分は藝妓屋つたら、寺内にたつた一軒しきや無かつたもんでさあ。東家つてね。丁度そら高田の旦那の眞向でしたらう、東家の御神燈のぶら下つてゐたのは」

十七

私は其東家をよく覺えてゐた。從兄の宅のつい向なので、兩方のものが出入りの度に、顏を合はせさへすれば挨拶をし合ふ位の間柄であつたから。
其頃從兄の家には、私の二番目の兄がごろ〳〵してゐた。此兄は大の放蕩もので、よく宅の懸物や刀劍類を盜み出しては、それを二足三文に賣り飛ばすといふ惡い癖があつた。彼が何で從兄

の家に轉がり込んでゐたのか、其時の私には解らなかつたけれども、今考へると、或はさうした亂暴を働いた結果、しばらく家を追ひ出されてゐたかも知れないと思ふ。其兄の外に、まだ庄さんといふ、是も私の母方の從兄に當る男が、そこいらにぶら〳〵してゐた。

斯ういふ連中がいつでも一つ所に落ち合つては、寢そべつたり、緣側へ腰を掛けたりして、勝手な出放題を竝べてゐると、時々向ふの藝者屋の竹格子の窓から、「今日は」などと聲を掛けられたりする。それを又待ち受けてゞもゐる如くに、連中は「おい一寸御出で、好いものあるから」とか何とか云つて、女を呼び寄せやうとする。藝者の方でも晝間は暇だから、三度に一度は御愛嬌に遊びに來る。といつた風の調子であつた。

私は其頃まだ十七八だつたらう、其上大變な羞恥屋で通つてゐたので、そんな所に居合しても、何にも云はずに默つて隅の方に引込んでばかりゐた。それでも私は何かの拍子で、此等の人々と一所に、其藝者屋へ遊びに行つて、トランプをした事がある。負けたものは何か奢らなければならないので、私は人の買つた壽司や菓子を大分食た。

一週間ほど經つてから、私は又此のらくらの兄に連れられて同じ宅へ遊びに行つたら、例の庄

さんも席に居合はせて話が大分はづんだ。其時唉松といふ若い藝者が私の顏を見て、「またトランプをしませう」と云つた。私は小倉の袴を穿いて四角張つてゐたが、懷中には一錢の小遣ひさへ無かつた。

「僕は錢がないから厭だ」

「好いわ、私が持つてるから」

此女は其時眼を病んでゐたのだらう、斯ういひ〳〵、綺麗な繻袢の袖でしきりに薄赤くなつた二重瞼を擦つてゐた。

其後私は「お作が好い御客に引かされた」といふ噂を、從兄の家で聞いた。從兄の家では、此女の事を唉松と云はないで、常にお作お作と呼んでゐたのである。私はその話を聞いた時、心の内でもうお作に會ふ機會も來ないだらうと考へた。

所がそれから大分經つて、私が例の達人と一所に、芝の山内の勸工場へ行つたら、其處で又ばつたりお作に出會つた。此方の書生姿に引き易へて、彼女はもう品の好い奥樣に變つてゐた。旦那といふのも彼女の傍に付いてゐた。……

私は床屋の亭主の口から出た東家といふ藝者屋の名前の奥に潜んでゐる是丈の古い事實を急に思ひ出したのである。

「あすこに居たお作といふ女を知つてるかね」と私は亭主に聞いた。

「知つてる所か、ありや私の姪でさあ」

「さうかい」

私は驚いた。

「それで、今何處にゐるのかね」

「お作は亡くなりましたよ、旦那」

私は又驚いた。

「何時」

「何時つて、もう昔の事になりますよ。慥あれが二十三の年でしたらう」

「へえ」

「然も浦鹽で亡くなつたんです。旦那が領事館に關係のある人だつたもんですから、彼地へ一

所に行きましてね。それから間もなくでした、死んだのは」

私は歸つて硝子戸の中に坐つて、まだ死なずに居るものは、自分とあの床屋の亭主丈のやうな氣がした。

十八

私の座敷へ通されたある若い女が、「どうも自分の周圍がきちんと片付かないで困りますが、何うしたら宜しいものでせう」と聞いた。

此女はある親戚の宅に寄寓してゐるので、其處が手狹な上に、子供などが蒼蠅いのだらうと思つた私の答は、頗る簡單であつた。

「何處か蔭張した家を探して下宿でもしたら好いでせう」

「いえ部屋の事ではないので、頭の中がきちんと片付かないで困るのです」

私は私の誤解を意識すると同時に、女の意味がまた解らなくなつた。それでもう少し進んだ説明を彼女に求めた。

「外からは何でも頭の中に入つて來ますが、それが心の中心と折合が付かないのです」
「貴方のいふ心の中心とは一體どんなものですか」
「どんなものと云つて、眞直な直線なのです」
私は此女の數學に熱心な事を知つてゐた。けれども心の中心が直線だと云ふ意味は無論私に通じなかつた。其上中心とは果して何を意味するのか、それも殆ど不可解であつた。女は斯う云つた。
「物には何でも中心が御座いませう」
「それは眼で見る事が出來、尺度で計る事の出來る物體に就いての話でせう。心にも形があるんですか。そんなら其中心といふものを此處へ出して御覽なさい」
女は出せるとも出せないとも云はずに、庭の方を見たり、膝の上で兩手を擦つたりしてゐた。
「貴方の直線といふのは比喩ぢやありませんか。もし比喩なら、圓と云つても四角と云つても、詰り同じ事になるのでせう」
「さうかも知れませんが、形や色が始終變つてゐるうちに、少しも變らないものが、何うして

もあるのです」
「其變るものと變らないものが、別々だとすると、要するに心が二つある譯になりますが、それで好いのですか。變るものは即ち變らないものでなければならない筈ぢやありませんか」
斯う云つた私はまた問題を元に返して女に向つた。
「凡て外界のものが頭のなかに入つて、すぐ整然と秩序なり段落なりがはつきりするやうに納まる人は、恐らくないでせう。失禮ながら貴方の年齢や教育や學問で、さうきちんと片付けられる譯がありません。もし又そんな意味でなくつて、學問の力を借りずに、徹底的にどさりと納まりを付けたいなら、私の樣なものゝ所へ來ても駄目です。坊さんの所へでも入らつしやい」
すると女が私の顏を見た。
「私は始めて先生を御見上げ申した時に、先生の心はさういふ點で、普通の人以上に整つてゐらつしやるやうに思ひました」
「そんな筈がありません」
「でも私にはさう見えました。內臟の位置までが調つてゐらつしやるとしか考へられませんで

した」

「もし内臓がそれ程具合よく調節されてゐるなら、こんなに始終病氣などはしません」

「私は病氣にはなりません」と其時女は突然自分の事を云つた。

「それは貴方が私より偉い證據です」と私も答へた。

女は蒲團を滑り下りた。さうして、「何うぞ御身體を御大切に」と云つて歸つて行つた。

十九

私の舊宅は今私の住んでゐる處から、四五町奥の馬場下といふ町にあつた。町とは云ひ條、其の實小さな宿場としか思はれない位、小供の時の私には、寂れ切つて且淋しく見えた。もともと馬場下とは高田の馬場の下にあるといふ意味なのだから、江戸繪圖で見ても、朱引内か朱引外か分らない邊鄙な隅の方にあつたに違ひないのである。

それでも内藏造の家が狹い町内に三四軒はあつたらう。坂を上ると、右側に見える近江屋傳兵衛といふ藥種屋などは其一つであつた。それから坂を下り切つた所に、間口の廣い小倉屋といふ

酒屋もあつた。尤も此方は倉造りではなかつたけれども、堀部安兵衛が高田の馬場で敵を討つ時に、此處へ立ち寄つて、枡酒を飲んで行つたといふ履歴のある家柄であつた。私はその話を小供の時分から覺えてゐたが、ついぞ其所に仕舞つてあるといふ噂の安兵衛が口を着けた枡を見たことがなかつた。其代り娘の御北さんの長唄は何度となく聞いた。私は小供だから上手だか下手だか丸で解らなかつたけれども、私の宅の玄關から表へ出る敷石の上に立つて、通りへでも行かうとすると、御北さんの聲が其所から能く聞こえたのである。春の日の午過などに、私はよく恍惚とした魂を、麗かな光に包みながら、御北さんの御浚ひを聽くでもなく聽かぬでもなく、ぼんやり私の家の土藏の白壁に身を靠たせて、佇立んでゐた事がある。其御蔭で私はとう〳〵「旅の衣は篠懸の」などといふ文句を何時の間にか覺えてしまつた。

此外には棒屋が一軒あつた。それから鍛冶屋も一軒あつた。少し八幡坂の方へ寄つた所には、廣い土間を屋根の下に圍ひ込んだやつちや場もあつた。私の家のものは、其處の主人を、問屋の仙太郎さんと呼んでゐた。仙太郎さんは何でも私の父と極遠い親類つゞきになつてゐるんだとか聞いたが、交際からいふと、丸で疎濶であつた。往來で行き會ふ時だけ、「好い御天氣で」などと

聲を掛ける位の間柄に過ぎなかつたらしく思はれる。此仙太郎さんの一人娘が講釋師の貞水と好い仲になつて、死ぬの生きるのといふ騒ぎのあつた事も人聞に聞いて覺えてはゐるが、纏まつた記憶は今頭の何處にも殘つてゐない。小供の私には、それよりか仙太郎さんが高い臺の上に腰を掛けて、矢立と帳面を持つた儘、「いーやつちゃ若干」と威勢の好い聲で下にゐる大勢の顏を見渡す光景の方が餘程面白かつた。下からは又二十本も三十本もの手を一度に擧げて、みんな仙太郎さんの方を向きながら、ろんじだのがれんだのといふ符徴を、罵しるやうに呼び上げるうちに、薑や茄子や唐茄子の籠が、夫等の節太の手で、どし〳〵何處へ運び去られるのを見てゐるのも勇ましかつた。

どんな田舍へ行つてもありがちな豆腐屋は無論あつた。其豆腐屋には油の臭の染み込んだ繩暖簾がかゝつてゐて門口を流れる下水の水が京都へでも行つたやうに綺麗だつた。其豆腐屋について曲ると半町程先に西閑寺といふ寺の門が小高く見えた。赤く塗られた門の後は、深い竹藪で一面に掩はれてゐるので、中に何んなものがあるか通りからは全く見えなかつたが、其奥でする朝晩の御勤の鉦の音は、今でも私の耳に殘つてゐる。ことに霧の深い秋から木枯の吹く冬へ掛けて、

カン〳〵と鳴る西閑寺の鉦の音は、何時でも私の心に悲くて冷たい或物を叩き込むやうに小さい私の氣分を寒くした。

二十

此豆腐屋の隣に寄席が一軒あつたのを、私は夢幻のやうにまだ覺えてゐる。こんな場末に人寄場のあらう筈がないといふのが、私の記憶に霞を掛ける所爲だらう、私はそれを思ひ出すたびに、奇異な感じに打たれながら、不思議さうな眼を見張つて、遠い私の過去を振り返るのが常である。

其席亭の主人といふのは、町内の爲頭で、時々目暗縞の腹掛に赤い筋の入つた印袢纏を着て、突つ掛け草履か何かでよく表を歩いてゐた。其處にまたお藤さんといふ娘があつて、其人の容色が能く家の者の口に上つた事も、まだ私の記憶を離れずにゐる。後には養子を貰つたが、それが口髭を生やした立派な男だつたので、私は一寸驚かされた。お藤さんの方でも自慢の養子だといふ評判が高かつたが、後から聞いて見ると、此人は何處かの瓦役所の書記だとかいふ話であつた。

此養子が來る時分には、もう寄席も已めて、仕舞ふた屋になつてゐたやうであるが、私は其處

の宅の軒先にまだ薄暗い看板が淋しさうに懸つてゐた頃、よく母から小遣を貰つて其處へ講釋を聞きに出掛けたものである。講釋師の名前はたしか、南鱗とかいつた。不思議な事に、此寄席へは南鱗より外に誰も出なかつた樣である。此男の家は何處にあつたか知らないが、何の見當から歩いて來るにしても、道普請が出來て、家並の揃つた今から見れば大事業に相違なかつた。其上客の頭數は何時でも十五か二十位なのだから、何んなに想像を逞しくしても、夢としか考へられないのである。「もうし〳〵花魁へ、と云はれて八ツ橋なんざますえと振り返る、途端に切り込む刃の光」といふ變な文句は、私が其時分南鱗から敎はつたのか、夫とも後になつて落語家の遣る講釋師の眞似から覺えたのか、今では混雜してよく分らない。

當時私の家からまづ町らしい町へ出やうとするには、何うしても人家のない茶畠とか、竹藪とか又は長い田圃路とかを通り拔けなければならなかつた。買物らしい買物は大抵神樂坂迄出る例になつてゐたので、さうした必要に馴らされた私に、左した苦痛のある筈もなかつたが、それでも矢來の坂を上つて酒井樣の火の見櫓を通り越して寺町へ出やうといふ、あの五六町の一筋道などになると、晝でも陰森として、大空が疊つたやうに始終薄暗かつた。

あの土手の上に二抱も三抱もあらうといふ大木が、何本となく竝んで、其隙間々々をまた大きな竹藪が塞いでゐたのだから、日の目を拜む時間と云つたら、一日のうちに恐らくたゞの一刻もなかつたのだらう。下町へ行かうと思つて、日和下駄などを穿いて出やうものなら、屹度非道い目にあふに極つてゐた。あすこの霜融は雨よりも雪よりも恐ろしいものゝやうに私の頭に染み込んでゐる。

其位不便な所でも火事の虞はあつたものと見えて、矢張町の曲り角に高い梯子が立つてゐた。さうして其上に古い半鐘も型の如く釣るしてあつた。私は斯うした有の儘の昔をよく思ひ出す。其半鐘のすぐ下にあつた小さな一膳飯屋もおのづと眼先に浮かんで來る。繩暖簾の隙間からあたたかさうな煮〆の香が煙と共に往來へ流れ出して、それが夕暮の霧に融け込んで行く趣なども忘れる事が出來ない。私が子規のまだ生きてゐるうちに、「半鐘と竝んで高き冬木哉」といふ句を作つたのは、實は此半鐘の記念のためであつた。

二十一

私の家に關する私の記憶は、總じて斯ういふ風に鄙びてゐる。さうして何處かに薄ら寒い憐れな影を宿してゐる。だから今生き殘つてゐる兄から、つい此間、うちの姉達が芝居に行つた當時の樣子を聽いた時には驚いたのである。そんな派出な暮しをした昔もあつたのかと思ふと、私は愈夢のやうな心持になるより外はない。

其頃の芝居小屋はみんな猿若町にあつた。電車も俥もない時分に、高田の馬場の下から淺草の觀音樣の先迄朝早く行き着かうと云ふのだから、大抵の事ではなかつたらしい。姉達はみんな夜半に起きて支度をした。途中が物騷だといふので、用心のため、下男が屹度供をして行つたさうである。

彼等は筑土を下りて、柿の木横町から揚場へ出て、豫て其處の船宿にあつらへて置いた屋根船に乘るのである。私は彼等が如何に豫期に充ちた心をもつて、のろ〳〵砲兵工廠の前から御茶の水を通り越して柳橋迄漕がれつゝ行つただらうと想像する。しかも彼等の道中は決して其處で終りを告げる譯に行かないのだから、時間に制限を置かなかつた其の昔が猶ほ更回顧の種になる。

大川へ出た船は、流れを溯つて吾妻橋を通り抜けて、今戸の有明樓の傍に着けたものだといふ。

姉達は其處から上つて芝居茶屋迄歩いて、それから漸く設けの席に着くべく、小屋へ送られて行く。設けの席といふのは必ず高土間に限られてゐた。是は彼等の扮裝なり顔なり、髪飾なりが、一般の眼によく着く便利のいゝ場所なので、派出を好む人達が、爭つて手に入れたがるからであつた。

幕の間には役者に隨いてゐる男が、何うぞ樂屋へお遊びに入らつしやいましと云つて案内に來る。すると姉達は此縮緬の模樣のある着物の上に袴を穿いた男の後に跟いて、田之助とか訥升とかいふ贔屓の役者の部屋へ行つて扇子に畫などを描いて貰つて歸つてくる。是が彼等の見榮だつたのだらう。さうして其見榮は金の力でなければ買へなかつたのである。

歸りには元來た路を同じ船で揚場迄漕ぎ戻す。無要心だからと云つて、下男が又提灯を點けて迎に行く。宅へ着くのは今の時計で十二時位にはなるのだらう。だから夜半から夜半迄掛つて彼等は漸く芝居を見る事が出來たのである。……

斯んな華麗な話を聞くと、私は果してそれが自分の宅に起つた事か知らんと疑ひたくなる。何處か下町の富裕な町家の昔を語られたやうな氣もする。

尤も私の家も侍分ではなかつた。派出な付合をしなければならない名主といふ町人であつた。私の知つてゐる父は、禿頭の爺さんであつたが、若い時分には、一中節を習つたり、馴染の女に縮緬の積夜具をして遣つたりしたのださうである。青山に田地があつて、其處から上つて來る米丈でも、家のものが食ふには不足がなかつたとか聞いた。現に今生き殘つてゐる三番目の兄などは、其米を春く音を始終聞いたと云つてゐる。私の記憶によると、町内のものがみんなして私の家を呼んで、玄關々々と稱へてゐた。其時分の私には、何ういふ意味か解らなかつたが、今考へると、式臺のついた嚴めしい玄關付の家は、町内にたつた一軒しかなかつたからだらうと思ふ。其式臺を上つた所に、突棒や、袖搦や刺股や、又古ぼけた馬上提灯などが、竝んで懸けてあつた昔なら、私でもまだ覺えてゐる。

二十二

此二三年來私は大抵年に一度位の割で病氣をする。さうして床に就いてから床を上げる迄に、略一月の日數を潰してしまふ。

私の病氣と云へば、何時も極つた胃の故障なので、いざとなると、絶食療法より外に手の着けやうがなくなる。醫者の命令ばかりか、病氣の性質そのものが、私に此絶食を餘儀なくさせるのである。だから病み始めより回復期に向つた時の方が、餘計痩こけてふら〳〵する。一箇月以上掛るのも重に此衰弱が祟るからのやうに思はれる。

私の立居が自由になると、黒枠のついた摺物が、時々私の机の上に載せられる。私は運命を苦笑する人の如く、絹帽などを被つて、葬式の供に立つ、俥を驅つて齋場へ駈けつける。死んだ人のうちには、御爺さんも御婆さんもあるが、時には私よりも年齒が若くつて、平生から其健康を誇つてゐた人も交つてゐる。

私は宅へ歸つて机の前に坐つて、人間の壽命は實に不思議なものだと考へる。多病な私は何故生き殘つてゐるのだらうかと疑つて見る。あの人は何ういふ譯で私より先に死んだのだらうかと思ふ。

私として斯ういふ默想に耽るのは寧ろ當然だといはなければならない。けれども自分の位地や、身體や、才能や――凡て己れといふものゝ居り所を忘れがちな人間の一人として、私は死なない

のが當り前だと思ひながら暮らしてゐる場合が多い。讀經の間ですら、燒香の際ですら、死んだ佛のあとに生き殘つた、此私といふ形骸を、ちつとも不思議と心得ずに澄ましてゐる事が常である。

或人が私に告げて、「他の死ぬのは當り前のやうに見えますが、自分が死ぬといふ事丈は到底考へられません」と云つた事がある。戰爭に出た經驗のある男に、「そんなに隊のものが續々斃れるのを見てゐながら、自分丈は死なないと思つてゐられますか」と聞いたら、其人は「居られますね。大方死ぬ迄は死なないと思つてるんでせう」と答へた。それから大學の理科に關係のある人に、飛行機の話を聽かされた時に、斯んな問答をした覺えもある。

「あゝして始終落ちたり死んだりしたら、後から乘るものは怖いだらうね。今度はおれの番だといふ氣になりさうなものだが、さうでないかしら」

「所がさうでないと見えます」

「何故」

「何故つて、丸で反對の心理狀態に支配されるやうになるらしいのです。矢ッ張り彼奴は墜落

して死んだが、己は大丈夫だといふ氣になると見えますね」

私も恐らく斯ういふ人の氣分で、比較的平氣にしてゐられるのだらう。それも其筈である。死ぬ迄は誰しも生きてゐるのだから。

不思議な事に私の寐てゐる間には、黑枠の通知が殆ど來ない。去年の秋にも病氣が癒つた後で、三四人の葬儀に列したのである。其三四人の中に社の佐藤君も這入つてゐた。私は佐藤君がある宴會の席で、社から貰つた銀盃を持つて來て、私に酒を勸めてくれた事を思ひ出した。其時彼の踊つた變な踊もまだ覺えてゐる。この元氣な頑强な人の葬式に行つた私は、彼が死んで私が生き殘つてゐるのを、別段の不思議とも思はずにゐる時の方が多い。然し折々考へると、自分の生きてゐる方が不自然のやうな心持にもなる。さうして運命がわざと私を愚弄するのではないかしらと疑ひたくなる。

二十三

今私の住んでゐる近所に喜久井町といふ町がある。是は私の生れた所だから、外の人よりも

よく知つてゐる。けれども私が家を出て、方々漂浪して歸つて來た時には、其喜久井町が大分廣がつて、何時の間にか根來の方迄延びてゐた。

私に緣故の深い此町の名は、あまり聞き慣れて育つた所爲か、ちつとも私の過去を誘ひ出す懷かしい響を私に與へて呉れない。然し書齋に獨り坐つて、頰杖を突いた儘、流れを下る船のやうに、心を自由に遊ばせて置くと、時々私の聯想が、喜久井町の四字にぱたりと出會つたなり、其處でしばらく低徊し始める事がある。

此町は江戸と云つた昔には、多分存在してゐなかつたものらしい。江戸が東京に改まつた時か、それともずつと後になつてからか、年代はたしかに分らないが、何でも私の父が拵へたものに相違ないのである。

私の家の定紋が井桁に菊なので、夫にちなんだ菊に井戸を使つて、喜久井町としたといふ話は、父自身の口から聽いたのか、又は他のものから敎はつたのか、何しろ今でもまだ私の耳に殘つてゐる。父は名主がなくなつてから、一時區長といふ役を勤めてゐたので、或はそんな自由も利いたかも知れないが、それを誇りにした彼の虛榮心を、今になつて考へて見ると、厭な心持は疾く

に消え去つて、只微笑したくなる丈である。

父はまだ其上に自宅の前から南へ行く時に是非共登らなければならない長い坂に、自分の姓の夏目といふ名を付けた。不幸にして是は喜久井町程有名にならずに、只の坂として殘つてゐる。然し此間、或人が來て、地圖で此邊の名前を調べたら、夏目坂といふのがあつたと云つて話したから、ことによると父の付けた名が今でも役に立つてゐるのかも知れない。

私が早稻田に歸つて來たのは、東京を出てから何年振になるだらう。私は今の住居に移る前、家を探す目的であつたか、又遠足の歸り路であつたか、久し振で偶然私の舊家の横へ出た。其時表から二階の古瓦が少し見えたのでまだ生き殘つてゐるのかしらと思つたなり、私は其儘通り過ぎてしまつた。

早稻田に移つてから、私は又其門前を通つて見た。表から覗くと、何だか故と變らないやうな氣もしたが、門には思ひも寄らない下宿屋の看板が懸つてゐた。私は昔の早稻田田圃が見たかつた。然し其處はもう町になつてゐた。私は根來の茶畠と竹藪を一目眺めたかつた。然し其痕迹は何處にも發見する事が出來なかつた。多分此邊だらうと推測した私の見當は、當つてゐるのか、

外れてゐるのか、それさへ不明であつた。

私は茫然として佇立した。何故私の家丈が過去の殘骸の如くに存在してゐるのだらう。私の心のうちで、早くそれが崩れて仕舞へば好いのにと思つた。

「時」は力であつた。去年私が高田の方へ散歩した序に、何氣なく其處を通り過ぎると、私の家は綺麗に取り壞されて、其あとに新しい下宿屋が建てられつゝあつた。其傍には質屋も出來てゐた。質屋の前に疎らな園をして、其中に庭木が少し植てあつた。三本の松は、見る影もなく枝を刈り込まれて、殆ど畸形兒の樣になつてゐたが、何處か見覺のあるやうな心持を私に起させた。昔し「影參差松三本の月夜かな」と詠つたのは、或は此松の事ではなかつたらうかと考へつつ、私はまた家に歸つた。

二十四

「そんな所に生ひ立つて、よく今日迄無事に濟んだものですね」

「まあ何うか斯うか無事に遺つて來ました」

私達の使つた無事といふ言葉は、男女の間に起る戀の波瀾がないといふ意味で、云はゞ情事の反對を指したやうなものであるが、私の追窮心は簡單な此一句の答で滿足出來なかつた。

「よく人が云ひますね、菓子屋へ奉公すると、いくら甘いものゝ好な男でも、菓子が厭になるつて。お彼岸にお萩などを拵へてゐる所を宅で見てゐても分るぢやありませんか。拵へるものは、たゞお萩をお重に詰める丈で、もうげんなりした顏をしてゐる位だから。あなたの場合もそんな譯なんですか」

「さういふ譯でもないやうです。兎に角廿歳少し過ぎ迄は平氣でゐたのですから」

其人はある意味に於て好男子であつた。

「たとひ貴方が平氣でゐても、相手が平氣でゐない場合がないとも限らないぢやありませんか。そんな時には、何うしたつて誘はれ勝になるのが當り前でせう」

「今から振り返つて見ると、成程斯ういふ意味であゝいふ事をしたのだとか、あんな事を云つたのだとか、色々思ひ當る事がないでもありません」

「ぢや全く氣が付かずにゐたのですね」

「まあ左右です。それから此方で氣の付いたのも一つありました。然し私の心はどうしても、其相手に惹き付けられる事が出來なかつたのです」

私はそれが話の終りかと思つた。二人の前には正月の膳が据ゑてあつた。客は少しも酒を飲まないし、私も殆ど盃に手を觸れなかつたから、顰蹙といふものは全くなかつた。

「それ丈で今日迄經過して來られたのですか」と私は吸物をすゝりながら念の爲に訊いて見た。

すると客は突然斯んな話を私にして聞かせた。

「まだ使用人であつた頃に、ある女と二年ばかり會つてゐた事があります。相手は無論素人ではないのでした。然し其女はもう居ないのです。首を縊つて死んでしまつたのです。年は十九でした。十日ばかり會はないでゐるうちに死んでしまつたのです。その女にはね、旦那が二人あつて、雙方が意地づくで、身受の金を競り上げに懸つたのです。それに雙方共老妓を味方にして、此方へ來い、彼方へ行くなと義理責にもしたらしいのです。……」

「貴方はそれを救つてやる譯に行かなかつたのですか」

「當時の私は丁稚の少し毛の生えた樣なもので、とても何うも出來ないのです」

「然し其藝妓は貴方の爲に死んだのぢやありませんか」

「さあ……。一度に雙方の旦那に義理を立てる譯に行かなかつたからかも知れませんが。……然し私等二人の間に、何處へも行かないといふ約束はあつたに違ないのです」

「すると貴方が間接に其女を殺した事になるのかも知れませんね」

「或はさうかも知れません」

「貴方は寐覺が惡かありませんか」

「何うも好くないのです」

元日に込み合つた私の座敷は、二日になつて淋しい位靜かであつた。私は其淋しい春の松の内に、斯ういふ憐れな物語りを、其年賀の客から聞いたのである。客は眞面目な正直な人だつたから、それを話すにも、殆ど艶つぽい言葉を使はなかつた。

二十五

私がまだ千駄木にゐた頃の話だから、年數にすると、もう大分古い事になる。

或日私は切通しの方へ散歩した歸りに、本郷四丁目の角へ出る代りに、もう一つ手前の細い通りを北へ曲つた。其曲り角には其頃あつた牛屋の傍に、寄席の看板が何時でも懸つてゐた。

雨の降る日だつたので、私は無論傘をさしてゐた。それが鐵御納戸の八間の深張で、上から洩つてくる雫が、自然木の柄を傳はつて、私の手を濡し始めた。人通りの少い此小路は、凡ての泥を雨で洗ひ流したやうに、足駄の齒に引つ懸る汚ないものは殆んどなかつた。それでも上を見れば暗く、下を見れば侘びしかつた。始終通りつけてゐる所爲でも有らうが、私の周圍には何一つ私の眼を惹くものは見えなかつた。さうして私の心は能く此天氣と此周圍に似てゐた。私には私の心を腐蝕するやうな不愉快な塊が常にあつた。私は陰鬱な顏をしながら、ぼんやり雨の降る中を歩いてゐた。

日蔭町の寄席の前まで來た私は、突然一臺の幌俥に出合つた。私と俥の間には何の隔たりもなかつたので、私は遠くから其中に乘つてゐる人の女だといふ事に氣がついた。まだセルロイドの窓などの出來ない時分だから、車上の人は遠くから其白い顏を私に見せてゐたのである。

私の眼には其白い顏が大變美しく映つた。私は雨の中を歩きながら凝と其人の姿に見惚れてゐ

た。同時に是は藝者だらうといふ推察が、殆ど事實のやうに、私の心に働きかけた。すると俥が私の一間ばかり前へ來た時、突然私の見てゐた美しい人が、鄭寧な會釋を私にして通り過ぎた。私は微笑に伴う其挨拶とともに、相手が、大塚楠緒さんであつた事に、始めて氣が付いた。

次に會つたのは夫から幾日目だつたらうか、楠緒さんが私に、「此間は失禮しました」と云つたので、私は私の有の儘を話す氣になつた。

「實は何處の美しい方かと思つて見てゐました。藝者ぢやないかしらとも考へたのです」

其時楠緒さんが何と答へたか、私はたしかに覺えてゐないけれども、楠緒さんは些とも顏を赧らめなかつた。それから不愉快な表情も見せなかつた。私の言葉をたゞ其儘に受け取つたらしく思はれた。

それからずつと經つて、ある日楠緒さんがわざ〳〵早稻田へ訪ねて來て呉れた事がある。然るに生憎私は妻と喧嘩をしてゐた。私は厭な顏をした儘、書齋に凝と坐つてゐた。楠緒さんは妻と十分ばかり話をして歸つて行つた。

其日は夫で濟んだが、程なく私は西片町へ詫まりに出掛けた。

「實は喧嘩をしてゐたのです。妻も定めて無愛想でしたらう。私は又苦々しい顏を見せるのも失敬だと思つて、わざと引込んでゐたのです」

是に對する楠緒さんの挨拶も、今では遠い過去になつて、もう呼び出す事の出來ない程、記憶の底に沈んでしまつた。

楠緒さんが死んだといふ報知の來たのは、たしか私が胃腸病院に居る頃であつた。死去の廣告中に、私の名前を使つて差支ないかと電話で問ひ合された事抔もまだ覺えてゐる。私は病院で「ある程の菊投げ入れよ棺の中」といふ手向の句を楠緒さんの爲めに咏んだ。それを俳句の好きなある男が嬉しがつて、わざ〳〵私に賴んで、短冊に書かせて持つて行つたのも、もう昔になつてしまつた。

二十六

益さんが何うしてそんなに零落たものか私には解らない。何しろ私の知つてゐる益さんは郵便脚夫であつた。益さんの弟の庄さんも、家を潰して私の所へ轉がり込んで食客になつてゐたが、

是はまだ益さんよりは社會的地位が高かつた。子供の時分本町の鰯屋へ奉公に行つてゐた時、濱の西洋人が可愛がつて、外國へ連れて行くと云つたのを斷つたのが、今考へると殘念だなど〻始終話してゐた。

二人とも私の母方の從兄に當る男だつたから、其緣故で、益さんは弟に會ふため、又私の父に敬意を表するため、月に一遍位は、牛込の奥迄煎餅の袋などを手土產に持つて、よく訪ねて來た。

益さんは其時何でも芝の外れか、又は品川近くに世帶を持つて、一人暮しの呑氣な生活を營んでゐたらしいので、宅へ來ると能く泊つて行つた。たまに歸らうとすると、兄達が寄つてたかつて、「歸ると承知しないぞ」など〻威嚇したものである。

當時二番目と三番目の兄は、まだ南校へ通つてゐた。南校といふのは今の高等商業學校の位置にあつて、そこを卒業すると、開成學校卽ち今日の大學へ這入る組織になつてゐたものらしかつた。彼等は夜になると、玄關に桐の机を竝べて、明日の下讀みをする。下讀みと云つた所で、今の書生の遣るのとは大分違つてゐた。グードリッチの英國史といつたやうな本を、一節位づゝ讀んで、それからそれを机の上へ伏せて、口の內で今讀んだ通りを暗誦するのである。

其下讀が濟むと、段々益さんが必要になつて來る。庄さんも何時の間にか其處へ顔を出す。一番目の兄も、機嫌の好い時は、わざ〳〵奥から玄關迄出張つて來る。さうしてみんな一所になつて、益さんに調戯ひ始める。

「益さん、西洋人の所へ手紙を配達する事もあるだらう」

「そりや商賣だから厭だつて仕方がありません、持つて行きますよ」

「益さんは英語が出來るのかね」

「英語が出來る位なら斯んな眞似をしちやゐません」

「然し郵便ツとか何とか大きな聲を出さなくつちやならないだらう」

「そりや日本語で間に合ひますよ。異人だつて、近頃は日本語が解りますもの」

「へえゝ、向でも何とか云ふのかね」

「云ひますとも。ペロリの奥さんなんか、貴方よろしい有難うと、ちやんと日本語で挨拶をする位です」

みんなは益さんを此處迄おびき出して置いて、どつと笑ふのである。それから又「益さん何て

云ふんだつて、其奥さんは」と何遍も一つ事を訊いては、何時迄も笑ひの種にしやうと巧らんでかゝる。益さんも仕舞には苦笑ひをして、とう〳〵「貴方よろしい」を已めにしてしまふ。すると今度は「ぢや益さん、野中の一本杉を遣つて御覽よ」と誰かが云ひ出す。

「やれつたつて、左右おいそれと遣れるもんぢやありません」

「まあ好いから、御遣りよ。愈野中の一本杉の所迄參りますと……」

益さんは夫でもにや〳〵して應じない。私はとう〳〵益さんの野中の一本杉といふものを聽かずにしまつた。今考へると、それは何でも講釋か人情噺の一節ぢやないかしらと思ふ。

私の成人する頃には益さんももう宅へ來なくなつた。大方死んだのだらう。生きてゐれば何か消息のある筈である。然し死んだにしても、何時死んだのか私は知らない。

二十七

私は芝居といふものに餘り親しみがない。ことに舊劇は解らない。是は古來から其方面で發達して來た演藝上の約束を知らないので、舞臺の上に開展される特別の世界に、同化する能力が私

に缺けてゐる爲だとも思ふ。然しそれ許りではない。私が舊劇を見て、最も異樣に感ずるのは、役者が自然と不自然の間を、どつち付かずにぶら〳〵歩いてゐる事である。それが私に、中腰と云つた樣な落ち付けない心持を引き起させるのも恐らく理の當然なのだらう。

然し舞臺の上に子供などが出て來て、甲の高い聲で、憐れつぽい事などを云ふ時には、いかなる私でも知らず〳〵眼に涙が滲み出る。さうしてすぐ、あゝ騙されたなと後悔する。何故あんなに安つぽい涙を零したのだらうと思ふ。

「何う考へても騙されて泣くのは厭だ」と私はある人に告げた。芝居好の其相手は、「それが先生の常態なのでせう。平生涙を控え目にしてゐるのは、却て貴方の餘所行ぢやありませんか」と注意した。

私は其說に不服だつたので、色々の方面から向を納得させやうとしてゐるうちに、話題がいつか繪畫の方に滑つて行つた。其男は此間參考品として美術協會に出た若冲の御物を大變に嬉しがつて、其評論を何處かの雜誌に載せるとかいふ噂であつた。私はまた彼の鷄の圖が頗る氣に入らなかつたので、此處でも芝居と同じ樣な議論が二人の間に起つた。

「一體君に畫を論ずる資格はない筈だ」と私は遂に彼を罵倒した。すると此一言が本になつて、彼は藝術一元論を主張し出した。彼の主意をかいつまんで云ふと、凡ての藝術は同じ源から湧いて出るのだから、その内の一つさへうんと腹に入れて置けば、他は自から解し得られる理窟だといふのである。座にゐる人のうちで、彼に同意するものも少くなかつた。

「ぢや小說を作れば、自然柔道も旨くなるかい」と私が笑談半分に云つた。

「柔道は藝術ぢやありませんよ」と相手も笑ひながら答へた。

藝術は平等觀から出立するのではない。よし其處から出立するにしても、差別觀に入つて始めて、花が咲くのだから、それを本來の昔へ返せば、繪も彫刻も文章も、すつかり無に歸してしまふ。其處に何で共通のものがあらう。たとひ有つたにした所で、實際の役には立たない。彼我共通の具體的のものなどの發見も出來る筈がない。

斯ういふのが其時の私の論旨であつた。さうして其論旨は決して十分なものではなかつた。もつと先方の主張を取り入れて、周到な解釋を下して遣る餘地はいくらでもあつたのである。

然し其時座にゐた一人が、突然私の議論を引き受けて相手に向ひ出したので、私も面倒だか

らつい其儘にして置いた。けれども私の代りになつた其男といふのは大分醉つてゐた。それで藝術がどうだの、文藝が何うだのと、しきりに辯ずるけれども、あまり要領を得た事は云はなかつた。言葉遣ひさへ少しへべれけであつた。初めのうちは面白がつて笑つてゐた人達も、遂には默つてしまつた。

「ぢや絶交しやう」などと醉つた男が仕舞に云ひ出した。私は「絶交するなら外で遣つてくれ、此處では迷惑だから」と注意した。

「ぢや外へ出て絶交しやうか」と醉つた男が相手に相談を持ちかけたが、相手が動かないので、とう〳〵夫限になつてしまつた。

是は今年の元日の出來事である。醉つた男はそれからちよい〳〵來るが、其時の喧嘩に就ては一口も云はない。

二十八

ある人が私の家の猫を見て、「是は何代目の猫ですか」と訊いた時、私は何氣なく「二代目です」と答へたが、あとで考へると、二代目はもう通り越して、其實三代目になつてゐた。

初代は宿なしであつたに拘らず、ある意味からして、大分有名になつたが、それに引きかへて、二代目の生涯は、主人にさへ忘れられる位、短命だつた。私は誰がそれを何處から貰つて來たか能く知らない。然し手の掌に載せれば載せられるやうな小さい恰好をして、彼が其處いら中這ひ廻つてゐた當時を、私はまだ記憶してゐる。此可憐な動物は、ある朝家のものが床を揚げる時、誤つて上から踏み殺してしまつた。ぐうといふ聲がしたので、蒲團の下に潜り込んでゐる彼をぐ引き出して、相當の手當をしたが、もう間に合はなかつた。彼はそれから一日二日して遂に死んでしまつた。其後へ來たのが卽ち眞黑な今の猫である。

私は此黑猫を可愛がつても憎がつてもゐない。猫の方でも宅中のそ〳〵歩き廻るだけで、別に私の傍へ寄り付かうといふ好意を現した事がない。

或時彼は臺所の戸棚へ這入つて、鍋の中へ落ちた、其鍋の中には胡麻の油が一杯あつたので、彼の身體はコスメチツクでも塗り付けたやうに光り始めた。彼はその光る身體で私の原稿紙の上に寐たものだから、油がずつと下迄滲み通つて、私を隨分な目に逢はせた。

去年私の病氣をする少し前に、彼は突然皮膚病に罹つた。顏から額へ掛けて、毛が段々拔けて來る。それを頻に爪で搔くものだから、瘡蓋がぽろ〳〵落ちて、痕が赤裸になる。私はある日食事中此見苦しい樣子を眺めて厭な顏をした。

「あゝ瘡蓋を零して、もし子供にでも傳染すると不可ないから、病院へ連れて行て早く療治をして遣るがいゝ」

私は家のものに斯ういつたが、腹の中では、ことによると病氣が病氣だから全治しまいとも思つた。昔私の知つてゐる西洋人が、ある伯爵から好い犬を貰つて可愛がつてゐた所、何時かこんな皮膚病に惱まされ出したので、氣の毒だからと云つて、醫者に賴んで殺して貰つた事を、私はよく覺えてゐたのである。

「クロロフオームか何かで殺して遣つた方が、却て苦痛がなくつて仕合せだらう」

私は三四度同じ言葉を繰返して見たが猫がまだ私の思ふ通りにならないうちに、自分の方が病氣でどつと寐てしまつた。其間私はつひに彼を見る機會を有たなかつた。自分の苦痛が直接自分を支配するせゐか、彼の病氣を考へる餘裕さへ出なかつた。

十月に入つて、私は漸く起きた。さうして例の如く黑い彼を見た。すると不思議な事に、彼の醜い赤裸の皮膚に故の樣な黑い毛が生えかゝつてゐた。

「おや癒るのかしら」

私は退屈な病後の眼を絕えず彼の上に注いでゐた。すると私の衰弱が段々回復するにつれて、彼の毛も段々濃くなつて來た。それが平生の通りになると、今度は以前より肥え始めた。

私は自分の病氣の經過と彼の病氣の經過とを比較して見て、時々其處に何かの因緣があるやうな暗示を受ける。さうしてすぐ其後から馬鹿らしいと思つて微笑する。猫の方では唯にや〳〵鳴く許りだから、何んな心持でゐるのか私には丸で解らない。

二十九

私は兩親の晩年になつて出來た所謂末ツ子である。私を生んだ時、母はこんな年齒をして懷姙するのは面目ないと云つたとかいふ話が、今でも折々は繰り返されてゐる。

單に其爲ばかりでもあるまいが、私の兩親は私が生れ落ちると間もなく、私を里に遣つてし

まつた。其里といふのは、無論私の記憶に殘つてゐる筈がないけれども、成人の後聞いて見ると、何でも古道具の賣買を渡世にしてゐた貧しい夫婦ものであつたらしい。

私は其道具屋の我樂多と一所に、小さい笊の中に入れられて、毎晩四谷の大通りの夜店に曝れてゐたのである。それを或晩私の姉が何かの序に其處を通り掛つた時見付けて、可哀想とでも思つたのだらう、懐へ入れて宅へ連れて來たが、私は其夜どうしても寢付かずに、とう〳〵一晩中泣き續けに泣いたとかいふので、姉は大いに父から叱られたさうである。

私は何時頃其里から取り戻されたか知らない。然しぢき又ある家へ養子に遣られた。それは慥か私の四つの歳であつたやうに思ふ。私は物心のつく八九歳迄其處で成長したが、やがて養家に妙なごた〳〵が起つたため、再び實家へ戻る樣な仕儀となつた。

淺草から牛込へ遷された私は、生れた家へ歸つたとは氣が付かずに、自分の兩親をもと通り祖父母とのみ思つてゐた。さうして相變らず彼等を御爺さん、御婆さんと呼んで毫も怪しまなかつた。向でも急に今迄の習慣を改めるのが變だと考へたものか、私にさう呼ばれながら澄ました顏をしてゐた。

私は普通の末ツ子のやうに決して兩親から可愛がられなかつた。是は私の性質が素直でなかつた爲だの、久しく兩親に遠ざかつてゐた爲だの、色々の原因から來てゐた。とくに父からは寧ろ苛酷に取扱はれたといふ記憶がまだ私の頭に殘つてゐる。それだのに淺草から牛込へ移された當時の私は、何故か非常に嬉しかつた。さうして其嬉しさが誰の目にも付く位に著るしく外へ現れた。

馬鹿な私は、本當の兩親を爺婆とのみ思ひ込んで、何の位の月日を空に暮らしたものだらう、それを訊かれると丸で分らないが、何でも或夜斯んな事があつた。

私がひとり座敷に寢てゐると、枕元の所で小さな聲を出して、しきりに私の名を呼ぶものがある。私は驚いて眼を覺ましたが、周圍が眞暗なので、誰が其處に蹲踞つてゐるのか、一寸判斷が付かなかつた。けれども私は子供だから唯凝として先方の云ふ事丈を聞いてゐた。すると聞いてゐるうちに、それが私の家の下女の聲である事に氣が付いた。下女は暗い中で私に耳語をするやうに斯ういふのである。——

「貴君が御爺さん御婆さんだと思つてゐらつしやる方は、本當はあなたの御父さんと御母さん

なのですよ。先刻ね、大方その所爲であんなに此方の宅が好なんだらう、妙なものだな、と云つて二人で話してゐらしつたのを私が聞いたから、そつと貴君に敎へて上げるんですよ。誰にも話しちゃ不可せんよ。よござんすか」

私は其時たゞ「誰にも云はないよ」と云つたぎりだつたが、心の中では大變嬉しかつた。さうして其嬉しさは事實を敎へて呉れたからの嬉しさではなくつて、單に下女が私に親切だつたからの嬉しさであつた。不思議にも私はそれ程嬉しく思つた下女の名も顔も丸で忘れてしまつた。覺えてゐるのはたゞ其人の親切丈である。

三十

私が斯うして書齋に坐つてゐると、來る人の多くが「もう御病氣はすつかり御癒りですか」と尋ねてくれる。私は何度も同じ質問を受ながら、何度も返答に躊躇した。さうして其極何時でも同じ言葉を繰返す樣になつた。それは「えゝまあ何うか斯うか生きてゐます」といふ變な挨拶に異ならなかつた。

何うか斯うか生きてゐる。――私は此一句を久しい間使用した。然し使用するごとに、何だか不穩當な心持がするので、自分でも實は已められるならばと思つて考へて見たが、私の健康狀態を云ひ現すべき適當な言葉は、他に何うしても見付からなかつた。

ある日T君が來たから、此話をして、癒つたとも云へず、癒らないとも云へず、何と答へて好いか分らないと語つたら、T君はすぐ私に斯んな返事をした。

「そりや癒つたとは云れませんね。さう時々再發する樣ぢや。まあ故の病氣の繼續なんでせう」

此繼續といふ言葉を聞いた時、私は好い事を敎へられたやうな氣がした。それから以後は、「何うか斯うか生きてゐます」といふ挨拶を已めて、「病氣はまだ繼續中です」と改めた。さうして其繼續の意味を說明する場合には、必ず歐洲の大亂を引合に出した。

「私は丁度獨逸が聯合軍と戰爭をしてゐるやうに、病氣と戰爭をしてゐるのです。今斯うやつて貴方と對坐して居られるのは、天下が太平になつたからではないので、塹壕の中に這入つて、病氣と睨めつくらをしてゐるからです。私の身體は亂世です。何時どんな變が起らないとも限りません」

或人は私の説明を聞いて、面白さうにはゝと笑つた。或人は黙つたゐた。また或人は氣の毒らしい顔をした。

客の歸つたあとで私はまた考へた。――繼續中のものは恐らく私の病氣ばかりではないだらう。私の説明を聞いて、笑談だと思つて笑ふ人、解らないで黙つてゐる人、同情の念に驅られて氣の毒らしい顔をする人、――凡て是等の人の心の奥には、私の知らない、又自分達さへ氣の付かない、繼續中のものがいくらでも潜んでゐるのではなからうか。もし彼等の胸に響くやうな大きな音で、それが一度に破裂したら、彼等は果して何う思ふだらう。彼等の記憶は其時最早彼等に向つて何物をも語らないだらう。過去の自覺はとくに消えてしまつてゐるだらう。今と昔と又其昔の間に何等の因果を認める事の出來ない彼等は、さういふ結果に陷づた時、何と自分を解釋して見る氣だらう。所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂彈を、思ひ〳〵に抱きながら、一人殘らず、死といふ遠い所へ、談笑しつゝ歩いて行くのではなからうか。唯どんなものを抱いてゐるのか、他も知らず自分も知らないで、仕合せなんだらう。

私は私の病氣が繼續であるといふ事に氣が付いた時、歐洲の戰爭も恐らく何時の世からかの

繼續だらうと考へた。けれども、それが何處から何う始まつて、何う曲折して行くかの問題になると全く無知識なので、繼續といふ言葉を解しない一般の人を、私は却て羨ましく思つてゐる。

三十一

私がまだ小學校に行つてゐた時分に、喜いちやんといふ仲の好い友達があつた。喜いちやんは當時中町の叔父さんの宅にゐたので、さう道程の近くない私の所からは、毎日會ひに行く事が出來惡かつた。私は重に自分の方から出掛けないで、喜いちやんの來るのを宅で待つてゐた。喜いちやんはいくら私が行かないでも、屹度向ふから來るに極つてゐた。さうして其來る所は、私の家の長屋を借りて、紙や筆を賣る松さんの許であつた。

喜いちやんには父母がない樣だつたが、子供の私には、それが一向不思議とも思はれなかつた。恐らく訊いて見た事もなかつたらう。從つて喜いちやんが何故松さんの所へ來るのか、其譯さへも知らずにゐた。是はずつと後で聞いた話であるが、此喜いちやんの御父さんといふのは、昔銀座の役人か何かをしてゐた時、贋金を作つたとかいふ嫌疑を受けて、入牢した儘死んでしまつた

のだといふ。それであとに取り殘された細君が、喜いちやんを先夫の家へ置いたなり、松さんの所へ再緣したのだから、喜いちやんが時々生の母に會ひに來るのは當り前の話であつた。

何にも知らない私は、此事情を聞いた時ですら、別段變な感じも起さなかつた位だから、喜いちやんと巫山戲廻つて遊ぶ頃に、彼の境遇などを考へた事はたゞの一度もなかつた。

喜いちやんも私も漢學が好きだつたので、解りもしない癖に、能く文章の議論などをして面白かつた。彼は何處から聽いてくるのか、調べてくるのか、能く六づかしい漢籍の名前などを擧げて、私を驚かす事が多かつた。

彼はある日私の部屋同樣になつてゐる玄關に上り込んで、懷から二冊つゞきの書物を出して見せた。それは確に寫本であつた。しかも漢文で綴つてあつた樣に思ふ。私は喜いちやんから、其書物を受け取つて、無意味に其處此處を引つ繰返して見てゐた。實は何が何だか私には薩張り解らなかつたのである。然し喜いちやんは、それを知つてるかなどゝ露骨な事をいふ性質ではなかつた。

「是は太田南畝の自筆なんだがね。僕の友達がそれを賣りたいといふので君に見せに來たんだ

が、買つて遣らないか」

私は太田南畝といふ人を知らなかつた。

「太田南畝つて一體何だい」

「蜀山人の事さ。有名な蜀山人さ」

無學な私は蜀山人といふ名前さへまだ知らなかつた。然し喜いちやんにさう云はれて見ると、何だか貴重の書物らしい氣がした。

「若干なら賣るのかい」と訊て見た。

「五十錢に賣たいと云ふんだがね。何うだらう」

私は考へた。さうして何しろ價切つて見るのが上策だと思ひついた。

「二十五錢なら買つても好い」

「それぢや二十五錢でも構はないから、買つて遣り給へ」

喜いちやんは斯う云ひつゝ私から二十五錢受取つて置いて、又しきりに其本の效能を述べ立てた。私には無論其書物が解らないのだから、それ程嬉しくもなかつたけれども、何しろ損はしな